

019683-000-4

特18-344

曹洞宗修証義說教例題

今川 勇禪 / 編

M29.6

ABG-0477



吉田梵仙師校閱
今川勇禪師編著

曹洞宗
修証義

說
教
例
題

東京

護法書院發行

曹洞宗修證義說教例題自序

上求菩提と下化衆生とは吾黨畢生の二大事業而已矣

然りて雖上求菩提は畢竟何等の目的に出づるものな
るを仔細に論究するときは吾黨畢生の目的は究竟下

化衆生の大事業に歸着するを見ん

下化衆生を實踐するには如何なる手段を要すべきか
是れ至易に似て而かも至難の一問題たりと雖之を要

するに聞思修の三慧最も其捷徑たるを覺ゆ説教の
學科吾黨豈に熱心に講究せずと已むべけんや



今や我曹洞宗務局は明治廿八年五月三十日發布内務省訓令第九號の旨趣に基き曹洞宗教師檢定條規を制定し之を宗内に公布し以て益々我曹洞宗僧侶の威嚴を保持せしめんと欲す然り而して特に重きを説教の一學科に置き自今首先住職の際は固より言を待たず資格を異にする寺院へ昇住せんと欲する際と雖必ず修證義の一節を賛題として起草したる説教講録を曹洞宗務局の檢定に供し其合格を得るに非されは首先住職及昇住を許さざることと定めらる乃ち説教の一

學科は管に下化衆生の事業に必要なのみならず併せて能化の資格を求むるに於て亦喫緊の一學科と定めらる然りと雖修證義は我曹洞宗在家化導の標準にして一字一句向上の宗乘を包含し之を參究する尙容易の事にあらず況んや之を自在に運用して隨處に宣説するをや是れ山僧が自から揣らす聊か從來の經驗に任せて修證義三十一節を實地に運用し以て同憂諸兄弟の例題に供せんと欲する所以なり若夫れ説く所の膚淺讀むに足らざるは山僧淺學短才の然らしむる

所なり同憂諸兄弟にして是正に吝なるなぐんは則ち
何の慶か之に加へん

明治二十九年六月於東京都築坡公園小宮

攝北 今川勇禪 謹識

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並ぶ）

曹洞宗修證義說教例題

古田梵仙校閱
今川勇禪編著

第一 壹 席 (修證義大意)

借今晚から曹洞二宗安心立命の要訣たる修證義の說教に取りかゝる次第でありま
すが、御參詣の皆々士方に分りのよいやうに、最初に修證義一部の要旨、懺悔滅
罪、受戒入位、發願利生、行持報恩、とある此四大法門のね断を致して置ませう、
我宗即心是佛の安心決定は、ことごとく此修證義三十一節でつくしてある

ので、つゞければ此四大法門となるのじや、ソコで此四大法門をね断しいたせば、
夫れで事は足りて仕舞ふやうな譯であるが、扱そなたやすくはまゐらぬから、茲に
は四通りの心得かたを、手みぢかにね断しいたして置く、そもく我宗即心是佛の

境界にいたりますには、先づ最初に懺悔滅罪して、悪むことは必らずせぬといふことを定めなければならぬ、おもひめぐらして見るといふと、此身がこれまで造りかさねた罪業は、ソモまた何はぞ澤山なことであらふ、地獄餓鬼畜生さては修羅なををめぐつて、出たいうまれないと願ひに願つて、漸やく人間に生を受け、また遇ひ難き佛法に逢ふて、始めて無始劫來の造惡を知りたから、今生を最も大切と定めて、茲で踏み外したら又阿鼻は眼のあたりじやから、オ、怖はやれろろしやと、誠心に造惡を佛前に懺悔すれば、其時身心潔白となりて、俯仰天地に愧ることなく只誠心の一ツとなるから、諸佛は此誠心にめでさせて、いよく受戒入位を許させられ、ね仲間入りをさせて下さる、サテね仲間が出来て見たらば、諸佛諸祖と同位同体じや、是時心鏡明朝として、毫末はどの滞りもなく、あらゆる萬事萬物が、赫灼と光りを放つて来て、微塵の世界まで洞見することが出来るから、其よるこびはまた格別じや、其よるこびをれもふと同時に、自分ばかりが甘いものを喰べては、外のものが氣の毒とれもひ、先づ他の人にこれをすゝめて、ね厭でもわがつて下さ

れど、一盆さし出さねばならぬ、夫れを我等與衆生皆共成佛道と申して、此上もない菩提心と名づくるのじや、此菩提心を發すのが即ち發願利生と相成るのじや、扱かやうに發願利生の念が起れば、直ぐ其言葉の下から一切の物事、皆行持報恩となりて、大臣參議は大臣參議のまゝ、ねさん權助はねさん權助のまゝ、皆其職分くをまもりて少しも味まます今日と立働くのが、即ち行持報恩と名づくるのじや、これを即心是佛といふ、即心是佛といふは誰れといふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん、

譬へは家造りするやうなものじや、先づ地盤を擇らんで土臺を堅め、夫れくの木材を取り寄せてやうやく棟上げをすまし、夫れから家根もふさ壁もぬり、諸造作を濟まして此家の主人となりすました、夫から子供が出来て學校へやる、シテ學校は至極宜いところじやが、子供のうちは學校をいやがる、之を叱りつけては遣り叱りつけては遣る、下女も下男も澤山につかふて、今日の活業をたてる、是れで天下は泰平じや、四大法門もこれと替らぬ、棟上げ諸造作までが懺悔滅罪で、主人とな

るのが受戒入位、子供を學校へ遣るのが發願利生で、活業を立つるのが行持報恩、總て佛法といふものは他所のことでない、皆な銘々の足もとのことじや、遠くにならば近くに眼こをつけるのがよい、かやうに無造作に分かるまでには、誰れがいたして下されたぞ、諸佛諸祖のね骨折は中へ口には述べ切れぬ、謹んで大日本曹洞宗高祖越前國永平寺開山佛性傳東國師承陽大師道元大和尚の御履歴を原ねたてまつるに、御系圖は人皇第六十二代村上天皇九世の孫、久我内大臣源通親公の御三男にて、御母君は松殿の關白太政大臣藤原基房公の御女なり、頃は土御門の院の御宇正治二年庚申正月二日に御誕生まじませしが、眼に重瞶ありて七處平滿し、れのづから聖人の相そなはりたまひけり、されば四歳にして李暉の百詠を讀み七歳にして毛詩左傳を讀みたまふなど、世に比類なく生ひ立ちたまひけり、而るに入歳の冬に御母君失せさせたまひければ、流石に恩愛の悲涙に沈ませたまひ終夜その御枕上に坐せしが焼ける香の煙りの立てば消えくする有様をつくく見そなはし、浮世の中の無常なること皆此煙りに異ならず、有ると見る間にひなしき

と何事にか執着して、はかなき榮花を求むべき、早く出家入道して、無上菩提の悟りを開き、一切衆生を濟度せんとの大願心を發したまひしこと尊とけれ、然れば九歳の御時より世親菩薩の俱舍論を初め内典外典に涉りて御學問れたらせたまはざるも、皆これ我等が如き衆生の迷ひを救ひたまはんとどの御心なりとは、知る人更にあらざれば、御母君の兄君にて松殿の攝政師家公と申したてまつる御方は、善き姪を持ちたり、我子となして攝政關白の重職をも繼がしめばやと思しめすを、中へにうるさくや思しけん、遂に十三歳の春の夜に、私かに都を忍び出で同じく御母君の御兄君にて、比叡山にねはす良觀法眼の許に到り、切に出家を求めたまひしかば、法眼いたくれどろきたまひ、近きうちには元服と聞き侍りしに、のたまふを打けしたまひて、母君御臨終の御遺言もればろけならず、且つは浮世の榮花なと願ふべきにあらすとして發心堅固にまじませは、法眼ろゝろに感涙をとぎたまひて、願て横川首楞嚴院の千光房へぞ登せたまひける、斯くて其翌年四月九日、天台の座主公圓僧正に得度を受け十日に比叡の戒壇にて、菩薩戒をうけたまふ、是れよ

り天台八教の學問は更なり秘密一乘の教理をも深く探り、十五歳の御時に一つの疑がひを發したまひける、そは何れの經論の道理にも、本來本法性天然自性身として、我等一切衆生の身が、此身此ま、天然の佛なるのぞと説きたまふことなるが、若し生れつきたるまゝが、直に佛けなりと言はゞ、三世の諸佛を始め奉まつり我々に至るまで、何とて發心修行して、偕て其後に成佛することなるぞとの御疑なり、其頃三井寺の公胤僧正は天下に比類なき學匠なりとの聞ひあれば、往て此義を問ひたまひけるに、僧正頭を傾けたまひ、此義は建仁寺の榮西禪師に問ふころよからめとあるに依りて、是より建仁寺に赴きて初めて禪宗を學びたまひける、翌年禪師は入寂せられ、詮方なく御弟子の明全和尚に隨從して愈々禪宗の修行を勵み、又一切經をも二度までも讀みたまひける、斯くて廿四歳の御時、迎も日本にては吾師なしとれもひたまひ、貞應二年春の二月二十二日に明全和尚に従がひて京都を出立し三月下旬、筑前の博多より船出して、大宋の嘉定十六年に、宋土明州の濠に着きたまひしが、暫しが程は船にねはして諸寺諸山の様子を探り、遂に七月天童山に錫を掛

けさせ玉ひける、同山には無際了派禪師といへる智識ありて、日本人を酷く賤しき明全和尚も大師をも常に席末に置が故に、大師は大に嘆かせたまひ、凡る佛法に入りて戒をうけたるものは、其受戒の順によりて座を定むべきに、他國の人として未席におくは法に背けり、勅詔を以て正したまへよと、二度までも宋の天子に上表したまひ、遂に天童山に勅詔して法の如くに座位を正したまへり、是より大師の御名四方に聞えて、法を重んずることに相なりたるのみならず、國の威光をも揚げさせたり、斯くて二年ばかり天童山にねはして、遂に天童山を下りたまひ、又徑山にのぼり又育王山萬年寺などいへる名山巨刹を巡り、是ぞといふ智識にも逢ひたまはねば、再び天童山へ歸りて、無際禪師を訪ひまゐらせんとしたまふに、禪師は既に入寂せられたりと聞きたまひ、大に落膽ましくて去らば日本へ歸るべしと、天童山にねはす明全和尚を訪ひ申さんとて、山に赴きたまふ折から、老健といふ僧に逢ひて聞きたまへば、今の天童山に住持さるゝ如淨禪師こそ天下に比類なきものなりといふ、登りて見みへたまふと直に告げてのたまはく、佛々祖々面授の法門現成

せりと、此時禪師左右の人に告てのたまはく、昨夜洞山悟本大師を迎ふと夢みたり此日本の僧恐らくは大師の再来なるべし、我宗此人によりて、大に隆んならんと喜こびたまひしとぞ、扱て明全和尚を訪ひたまひしに、和尚大によろこび、何やかや嘶しの末、二日三日もたちけるが、其中に和尚病ひれこりて、是月七日に四十二歳を一期として、遂に入寂せられしかば、火葬して舍利を供養し、是より如淨禪師に参問して、日夜を分かつ辨道修行したまひ、或日一人の僧の居眠りせしを、禪師痛く呵りたまひしを聞きて、豁然として無上菩提を悟りたまひしかば、直に方丈にのぼりて所悟を述べ禪師の印可を受けたまひ、同じく九月十八日に佛祖正傳の大戒を受けたまひたり、是れ實に釋迦牟尼如來より代々正傳して、續々相承の大事なりし、斯くて諸方遊歴の後ち、寶慶三年に歸國せばやと旅装したまひ、其夜半に入室せしめられ、佛祖傳來の袈裟并に舊物を賜はりて離別の垂示懇切なりし、大師は國に歸りたまひて寺を起し法を布き、四衆を弟子として化益大方ならざりしが、建長四年の夏の頃より聊か病の兆みえて、最後の教悔にとて釋迦如來御臨終に觀きた

まへる、遺教經に本きたまひて、八大人覺といへることを述べさせ、斯くて翌年七月十四日に、永平寺を孤雲懷辨禪師に譲らせたまひ、八月五日に永平寺を出立して京都へ上りたまひ、俗弟子の覺念が家に宿らせたまひ、太上天皇より遣はされたる御醫師にも見せたまひしが、或日室内をゐるかせつゝ、若於園中若於林中若於樹下若於僧房若白衣舍、乃至、當知是處即是道場、乃至諸佛於此轉於法輪諸佛於此而般涅槃といへる法華經の文を唱へさせ且つ面前の柱に書きつけたまひたり、此白衣舍に涅槃せんどの思召なればなり、斯くて八月二十八日の子の刻に五十四年 照二第一天一打三箇時跳一觸三破大千、噴、渾身無三着處、活陷三黃泉、といふ偈を書きたまひて掩然入滅したまふ、御親戚御弟子方の歎きは實以て一方ならざりしが、斯くてあるにもあられれば、形の如くに御儀式を行なひまいらせたり、明治十二年十一月今上陛下より承陽大師と追諡あるばさせられて、御徳を慕はせられしが、我々が今尊き御法門を承たまはるは、此の如き大師の御出世なされたからじや、有難くねもふがよろし。

第貳席

(修證義第一章 總序第壹節)

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり生死の中に佛あれば生死なと但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふへさもなく涅槃として欣ふべきもなし是時初めて生死を離るゝ分あり

修證義一部の要旨、懺悔滅罪、受戒入位、發願利生、行持報恩とある、此四大法門の梗概は、前席の話で略お呑込みになりましたのでせう、此四大法門を四章に分ち、其の四章の前に總序と云ふを一章差加へ、以上合せて五章あるを更に三十一節に分ちて、修證義と云ふのが組立てゝある、依て以上の三十一節を三十一席に分ち、第一章總序第一節より第五章行持報恩第三十一節まで、毎席一節づゝ次第を逐へてお話に及びませう、ろこで今席お話に及びますのは修證義第一章總序第一節であります、此總序第一節より第六節までは、四大法門の糸口であるから、それで總序といふのじや、シテ此御發題第一節の、最も大切な示しであるから、眞實に聽て貰はんといふと、後の三十節は、何が何やら分らなくなつて仕舞ふ、つまるところは

一切藏經、馬に七駄半もあるといふ大部な佛説もたつた此第一節に歸して仕舞ふのじや、心隨二萬境、轉々處實能幽、隨流二得性、無喜又無愛、こうじや、

テ此世の中に何が一番に面白いと尋ねたら、生死ほど面白いものはない、三千大千世界の大カラクリは、只此生と死の二つより外はない、万事万物姿た形ちと顯はして居るものは必ず生死をまぬかれない、只遅いと早いがあるばかりじや「時あれば松も薪となるものをなか常盤のいろと定めん」、生と生れて來た以上はいつか一度は飢度死ぬ、決して人間や畜類ばかりが、生れたり死んだりするものとは限らない、其中でも人間といふものが、万物の靈長といふだけに、此生死に格別に心を付て生れたりと言へば喜び、死んだと言へば悲しむ、其感情を一番強く持つて居る、それで佛法といふものは、此人間を定度として、横説堅説いたされたものじやが、外の異類も皆其れ相伴にあづかつて、悉く成佛するである、それから此人間が生れて來たりと言つたら、夫から死といふに至るまでは、ことごとく苦と樂とで持切て仕舞ふから、大体を苦と樂とにいつめて見るがよい、サアろこじやから佛は袂苦與樂

の方便ほうべんをめぐらして、いろ／＼とお世話せわを焼やて下さるのじや、其その世話せわのつゞまる
 ところは御ご賛さん題だいの通り、生せいを明あらめ死しを明あきらむるのじや、是これは出家しゅつがい在家ざいを問とは
 ず、佛法ぶつぽうを學まなぶ人ひとの第一だいいちに心こころをつけんければならぬところじや、そんなら生せいを明あら
 め死しを明あらむるのは何なに様ようすればよいといふのに、七なな駄だ半はんもあるお經きやうをつゞめたれ言こと
 葉はじやから、オイ夫おれとはまゐらぬ次第しだいじや、故ゆゑに生せい死しを明あらめやうとして、ます
 〱生せい死しの種たねをあつめ、仕しかた方かたのないことになつて仕し舞まふ、高こう祖そ大師だいしのれ示しによれ
 ば、生せいより死しにうつるとれもふはあやまりなり、生せいといふ時は生せいは、一時いちじの位ゐにて
 已すでに前まへもあれば後のちもある、死しといふ時は死しは一時いちじの位ゐにて、已すでに前まへもあれば後のちもあ
 る、生せいの時は生せいの外ほかにもなく死しの時は死しの外ほかにもない、皆みな獨どく立りつした名なである
 のじや、生せいの死しになると言いはざるは、佛ぶつ法ぽうの定さだまれる習なまひじや、是こゝろゆゑに不ふ生せいとい
 ふ、死しの生せいにならざるは法ほう輪りんの定さだまれる佛ぶつ轉てんじや、このゆゑに不ふ滅めつといふ、丁てい度ど冬とう
 と春はるどのやうじや、冬ふゆの春はるとなると思おもはず、春はるの夏なつとなると思おもはぬなり、生せいも
 一時いちじの位ゐなれば死しも一時いちじの位ゐなのじや、かやうなれ示しめしの次しだい第だいじやから、れ言こと葉はの

通とほりにれもふといふと、問ま違ちがひの出來きる氣きづかひはない、一時いちじの位ゐじやから、これを
 少ちさく考かんへると、刹せつ那な〱が生せい死しで、時ときに伴ともなはれて生せい死しして居ゐる、これを續つづけて
 見みると年ねんが年ねん中ちゆう千せん代だい末まつへ代よまで生せい死しして居ゐる、決けつして生せい死しのつくる氣きづかひがない
 から、不ふ生せい不ふ滅めつじやらふ、此この道どう理りが知しれて見みたれば、生せい死しの中に佛ぼつあれば生せい死しなし
 と相あ成なるのじや、言いは、身しん体たいは病やまひの入れものじやけれども、健けん康こうになつたら、病やま
 がないといふ様ようなものじや、この様よう子を生せい死し即すなはち涅槃ねはんといふのじや、のぞくべき
 生せい死しとおもへるは、佛ぶつ法ぽうの罪ざい人にんじや、生せい死し即すなはち涅槃ねはんとなつたれば、そんな鹽あん梅ばいかとい
 ふに、涅槃ねはんとて喜よろこぶべきもなく生せい死しでも厭いとふべきでない、かやうに明めい朗ろうとなつた時
 に生せい死しを離はなれたことになつて、生せい死しなんどに動どう搖ようされないのじや、此この生せい死しといふこ
 とがあればこそ、佛ぼつけになる道みちもあるので、生せい死しは實じつに大たい切せつなのじや、じやから佛ぶつ
 家け一だい大だい事じの因いん縁ねんなりとある、法ほう華け經きやうには諸しよ佛ぶつは一だい大だい事じ因いん縁ねんの爲ために、御ご出しゅつ世せ相さう成じやう
 のじやとれ説ときなされてある、一だい大だい事じとは此この生せい死しを明あらめることじや、シテ見みれば
 生せい死しは實じつに佛ぼつのお命いのちといふてもよろしい、若し生せい死しのないことであつたなれば、

佛けも御出世に及ばぬことじや、法性即生死、生死即法性のまじやから、佛けは此理を知らせ様どればしめして、無上道も開示せられたのじや、それを佛法を習ふもの、分際でありながら、厭やな生死じやから取り退けて仕舞いたいなど、かやうな了見をねてすものがあるが、實以て相濟まぬとじや、實に生死を知らぬ人じや譬へば花の散りては飛び、木の葉の凋れて枯れて落るを見て、これをねのれの身の上へ考へて、ア、此私しも若い〜とねもふて居たが、さのふの夢と消えて仕舞いいつか白髪も催ふして来た、これでは段〜と年を取つて、終には死んで仕舞ふであらふが、サテ死んだら何處へゆくか知らん、花の散るを見るもねもひやらる、斜陽淡々閑花老、飛入門前舊碧流、ア、淋びしいことじや、紅葉の散るを見てもねもひやらる、更思人世還如此、落葉頻々一杵鐘、ア、悲しいことじや、ナゼ人間なぞに生れて来たらん、生れて来ない工夫はなかつたらふか、死ぬのは厭やじやが、仕方がない、どんな尊とい身の上でも、迎へか来れば厭でも應でも、待てしばしとは言はせない、ア、厭やなことじや、極樂といふはどんなところか知らんが

結構なところには相違なかるふ、早く此身体をね仕舞にいたして、阿彌陀さまのお側へ往つて見やうか、夫れも善根とやらがなくては成るまい、一ツ佛法へでも這入つて見やうと、やうやく佛法に志して、其本を探ぐる氣になり、扱佛法へ這入つたところで、無餘の涅槃に入つて此世へ出て来ぬやうになりたい、又は灰身滅智して再び生死をやるまいなぞ、下らぬ考へを起しても見たり、いろ〜ケチな考へをやつて見たが、終に佛法の罪人となつて、さうして生死を厭ふ氣になる、これで佛法に這入つた所詮がない、我宗のお断しでは、全くこれと反對じやから、灰身滅智するにも及ばず、無餘の涅槃に入るにも及ばず、阿彌陀さまの御厄介になるにも及ばず、自身が自身で明らめをつけて、生死は最も大切とねもひ、無常も最も大事にかけて、一法として捨てないのじや、時〜は地獄へも遊びにゆくがよし、鳥獸の仲間にも這入て見るがよい、明らめのついた上からは、誠に早や心る易いものじや何にをするのも故障がない、何卒を能々呑み込んで下さい、若しうか〜として居りまして、余所の事にねもつて居ますと、明日にも知れぬ銘々じやから、又ど取

りかへしがありませんぞ
 昨年さきねんの春はるの末すえ、四月しごの初旬しごじゆんアメリカのサンフランシスコといふ港みなとに、嗚呼あゝの白痴漢ばかぢかんがあらはれまして、一時ひととき諸新聞しよしんぶんに冷笑れいせうして掲げられた大笑おほはらひのはなしがあります、我が日本にっぽんの明治二十八年、四月三日の神武天皇祭じんむてんのうまつりとて、居留きよりゆうの日本人は、祝杯しゆはいをあげて大御代おほみよの有難ありがたさをよろこぶ折せから、一人は一葉ひとはの新聞紙しんぶんしをもつて、席上せきじやうに立ちました、やがて諸君しよくんに下物さななをまわらせんとて、高らかに讀むを聞けば、昨日けつじ當港とうこうにこれのしれものがあらはれました、彼れは伊太利人いいたりじんで御座ございまして、久しく此地ちに住すみなれたものであります、彼れは他國たこくへ參つて富とみみを重かさるだけあつて、中なかく客番りんしやくで御座ございます、彼れは本國ほんこくへ寶石ほうしを送らふと致いたして、郵便局ゆうびんきょくにいたりまして運賃うんちんは何程なにほどでありますかと聞ききますと、其運賃そのうんちんは二十五弗にじふごふかゝるといひますと、ハイそれは有難ありがたう御座ございますと、スタ〜と家いへにかへりまして、二十五弗にじふごふはチト高たかい何なんとかして運賃うんちんをのがる、工夫くふはあるまいかと、思案しあんどり〜で御座ございました、其中そのうちにハタと手てを打ち、オ、宜よろいことを考かんがへた、親父おやぢが諸方しよほうをさがして求めもとめて來きて、手

前まへ此本このほんを讀よめとて學問がくもんを頻しばしばりにすゝめられたが、アレが別わかれか其晚そのばんに死しんで仕舞しまはれた、讀よんじやならぬが生うれつきで、どうも嫌きらいで遺言ゆいごんが守まもれない、今はあつても益えきない書物しよぶつじや、アノ眞まん中なかを剔くりぬいて、其中そのなかへ寶石ほうしをいれて、書物しよぶつの運送うんそうの買かで濟すまらふ、さすれば二弗にふもかゝるまいと、怒おこりに眼めのない考かんがへをこれとして、大冊おほさつな書物しよぶつを剔くりぬき、其中そのなかに寶石ほうしを入れて、尋常じんじやう書冊しよさつの体ていに見みせかけ、何喰なにはぬ顔かほをいたして、郵便ゆうびんに差出さしだしました、眼光がんこうするどき郵便局員ゆうびんきよくんのことで御座ございますから、此この体裁ていざいの書物しよぶつにしては、あんまり目方めかたが多いやうだ、何か入いれてあるに相違さういないと、開ひらいてこれを見みるといふと、案あんの條じょういかさまであつた、依よつて當人とうじんを呼び出よしました、其仔細そのしさいをたづねますと、事ことは全ぜんつたく露顯ろけんになりましたから官くわんに沒收ぼつしゆうされて仕舞しましました、時ときに去さる物識ものしりが側かたはらに居きりまして、世よの中なかにはかゝる白痴ばかぢもあるものかな、儲たくわかに二十五弗にじふごふを惜おしんで、最もつとも珍めづらしき大切たいせつな書物しよぶつを、ト〜玉たまなしにして仕舞しまふた、見みよ此書物このしよぶつは世よにも多おほく其類そのるいを見みざる、アルジンといふ珍書ちんしよにいたして求めもとんと欲ほしても中なか〜になさ書しよなり、若わかしも幸さいわひにありとして、これを市いちに求もとむ

るときは、少なくとも千弗は出さねばなるまい、惜しきこととしてけりと笑はれまし
 た、寶石と書物の代を合せて見ると、白痴は余程の損でもありますし、且つ珍書のね
 もむさを聞かしまして、口惜しくてくくってたまりません、殊には親父の記念なり粗
 未にするではなかつた、如何に悔んでも仕方がない、夫から官に駄願いたして、
 寶石はどうでもよいが、親父の記念で御座いますから、書籍だけは御拂下を願ひま
 す、哀を乞ふて止まないから、局長も不便に思はれて、書籍を拂ひさげてやりま
 した、何と大白痴ではあるまいかと、讀み終つて一同大笑しました、何と悲しいこ
 とではあるまいか、大切な書物を粗末にした報いで、大切な書物とは知らなんだ、
 物議りの嘶しで漸やく知れて、今更大切にする氣になつたが、マア曲りなりにも宜
 いとしたところで、皆さまも振りかへつて御覽なされると、厭やヒヤ／＼とれもつた
 生死といふのが、實以て大切でありたことが分る、法華經の方便品には、獅子のね
 嘶しもあることヒヤが、うれも此やうな嘶しである、呉／＼も生死を大切にいたさ
 れて、明らかをつけて御覽い申したい、

第 參 席

(修証後第壹章 總序第貳節)

人身得ること難し佛法遇ふこと希なり今我等宿善の助くるに依りて既に受け難き
 人身を受けたるのみに非ず遇ひ難き佛法に値ひ奉まつれり生死の中の善生最勝の
 生なるべし最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ
 サテ此御贊題のれもむさは、人間の身を受けて來ることの難いのだ、佛法に逢ふこ
 との容易ならざるれもむさを示し下さるのであつて、御文は少しく滯ふるところ
 なく、よく分つて居りますが、其理は中々むづかしい、人身を得ることがナゼそん
 なに難いといふたら、西行法師の曰く、人界に生るゝことは、梵天より糸を下ろし
 て、海の底にある針の孔に貫ぬくがごとし、佛法にあへることは、一眼の龜が浮木
 の穴にあひたらんか如しと、抑／＼善を行ひ惡をなすにおゐて、身命をうくるに六趣
 あり、善は上中下の區別によりて、天上人間修羅に生れ、惡は上中下の區別によ
 りて、畜生餓鬼地獄に生れ、而して十善を人中の貴といはして、天子などの身を受く
 ることに定め、扱は普通の人間といはしても、五つの善がろるはねば、此人間に生

れて來ることが出來ぬ、よしや五戒十善の助けに依りて、人間には生れて來たもの、無佛法の所や、無佛法の時であつたら、尊とい無上道をうけたまはつて、即心是佛などいふ高尚な道理を聞くことも出來ぬ、實に難いことであるし又希なことである、無始劫來六趣を何遍となく經めぐつて、何万劫たつて今日の此身に仕あげたのか分らんから、人身得ること難ひのじや、佛在世の時であつても、直々に説法を聽聞して、お弟子となられたものは何程もない、殆んど天竺の人口三分の一じや、それから御出世に相成つたことを嘶しに聞いたくらゐのものが三分の一、残つた一分の人々は佛生になつたと夢にも知らずすましましたものじや、今でも野蠻極まる國々があつて、無廉恥暴惡の人も澤山ある五濁の世に、此日本は大乗根機の勝れた國ゆへ、天竺でさへ聞かれなかつた佛法が傳はつて、斯く而かも繁昌な時にうまれ合せて、高尚な道理も聞くことが出来る、實にわふこと希れなりとやらふ、かくのごとく千歳一過か万歳一過か分らぬほどの難い人身や、五劫も百劫も遇ふことの出來なかつた、佛法にわふたから、善生最勝の生なるべしじや、れもふ

ても見られよ、實に善生最勝と云ふてある、彼の六道の中の地獄と云ふ處は、晝夜苦惱に沈みて只苦しいばかり、なには結縛な嘶があつても、之れを聞くことが出來ず、餓鬼は年がら年中喰ひたい飲みたい、拙僧等も随分ヒダル目に逢ふたこともあるが、中々苦しいものじや、夫でも今晚の泊りは何處だと分つて、宿へ着けば飯にありつくど極めて居るから、堪へても堪へらるれど、ドーして喰ふことが出來ぬと思つたら堪らない、此苦しみて何のことも耳へは入らぬ、善生は弱肉強食であつて、何でも強いものに遇はぬやうに、恐ればかり居るものじや、耳にも些つとも分りがなくて、謂ゆる猫に小判のお嘶で分らず、修羅は瞋り續けに瞋りて打擲合に忙しくて、これも佛法どころの騒ぎでなく、天上は餘まり樂しみ過ぎて、佛法などを聞くよりも歌舞管絃に忙しく、何様しても此五趣の衆生は濟度に難い、夫れで佛法を聞いて一足飛びに佛位に駆け上つて仕舞はれるのは此人間じや、依つて最勝の生とれ示し下さるゝのじや、尤も佛法と申すものは、前にも一寸申す通り此人間を程度として教えが立て居るから、佛け方も人間の身体をして、人間の了簡

になつて、人間の言葉をして、人間の機根に應じて御化益なされるのじや、此最勝と最も勝れた人間で聞き損ふときは、更に又何れの生を待ちて承たまわることが出来やう、思へば大事の此身じやないか、夫から又其次の御文は、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任することなかれ、無常のことは第四席、即ち此次の席でね嘶し致しますが、此最勝の善身を徒らにしてとは、如何に最勝な善身でも、今日といふて明日は分らぬ、明日どころではなく、出る息の引くを待たぬ實に脆い身体じや、ドンな丈夫な仁王様のやうな角力取でも、鐵で拵らへたやうな不動様のやうな身体でも、身体は芭蕉の如し風に随つて破れ易しで、ボクリと往くのが此身体じや、だから最勝な人間じやと分つたら、それを鹿末に取扱つて、何んにも聞かすに何んにも知らずに、無茶に死んではならぬぞ、露命といふて神頭にねく露のやうな此身体、無常の風に何時かはんも知れぬから、明日とも言はず今此席で、即心是佛のね餘りを承知せねば、人間に生れた甲斐がないぞ、決して此善身を徒らにして、無常の風に任せてはならぬぞと、ね教ね下さる有難さ、此任するなかれと仰

せらるゝ、なかれといふ三字が最も有難い、是れは拙僧や皆様に、命令的に仰せらるゝので、無常の風に任せてはならぬぞとあるのじや、眞實お忘れのないやうに致したし。

譬へば貧しい活業をして居るものが、突然と大盡になるやうなものじや、今日はどうぞこうぞ過したが、明日の朝の用意は何んにもない、どうしたら宜からふかと、手を組んで考へて居るところへ、ハイ今晚は、八兵衛さんのね宅は茲でムいますかハイ此處でムいます、ヤレ〜左様でムいましたか、ヤツと尋ねてきました、ヤレ年を取られたせいか、大層に御様子が替りました、拙者は過る何年の何月、借金の爲めに兩國橋から、身投するところを助けて貰つた、六兵衛でムりますが、オヤ左様でムいますか、ツイれ見それ申しました、サア此方へといふので、見るも汚くろしいところへ招くといふと、六兵衛は懐ろより何程か知らねど大きな包みもの出すと、エ、是れは何でムいます、小判五百兩、是は又大枚のね金、イヤ其れは一寸手土産、何でも此土地にお住所といふことだから、往つたら分らぬこともあるまい

と、心るにかけては居たけれども、今日こうと思つてやつとまゐりました、これは甚だ輕少じやが、先づこれ納め下さりませ、イヤ何様してこれやうに、イヤ左様におつ仰るな、拙者那の時の御恩で以て、今は借金も皆んなかへし、残り丁度十萬兩の身代、此れを思へば其酬金は甚だ少ない、マ、何卒を御納め下さい、エ、決して御辞退御無用、それから長松や、ね前背負て来たものを是へた出し、是れはホンの御平常着に、エ、つまらぬもので、イヤ是れは恐れ入ります、イヤ何に決してお禮は御無用、シテ何なりと御商賣をね始めなさりませ、及ばずながら御恩がへしに、何でもれ力になりませうから、何から何まで此やうに、有難う存じます、イヤお禮で痛み入ります、夫から八兵衛さん、申すも甚だ嗚呼がましいが、差上た其れ金で、何か御商賣をね始めなさい、扱斯様な鹽梅のものじや身投げを助けた宿善で、俄かに金持となつたはよいが、其金を浪費にしてならぬ商賣を始めるとは、取りも直さず最勝の善身を徒らにして、壽命を無常の風に任するなかれである、返すも無常の風にひなしく任せてはなりません、

昔し如來在世の時に、羅閱祇城の中に淫女がありました、其名を蓮華女と申しました、容貌端正、國中にならびのない美人でありました、眸じりは明珠をかがやかし絳ら唇びるは白玉をふくみて、眉は楊柳の葉をならべたやうで、顔ばせは美容も及ぬつや／＼しさ、言葉は巧みにいたして鸚鵡の舌を弄あろび、情けふかくして鶯鶯の媚をうつす、艶色優にやさしうありますから、大臣長者みなうの心ろを傾むけました、一眼見れば心の恍惚するほどに愛でまよひ、二目と見れば命ちも差出して仕舞ふといふほどに我れを忘るゝ始末じや、而かれども蓮華女は宿善がありましたかつらく思ひをこしました、我れたま／＼生を人間に受け、幸はひ美るはしく生れたれども、五障の女人でもあり殊には淫女なり、只明け暮れば鸞鏡に向かひて、容ちをつくり、金鈿をさして色を衒らひ、粧はひなしては人に媚ひつゝ、新たなるをむかへて奮りたるを送り、肩をわけては笑ひをつくり、情けをあらはしては他の心ろと薄かし、實と少なき有様は我身ながら恥かしきことなり、只願はくは尼になりて世を厭ふて出離の志さしを遂げばやと、耆闍崛山にをもひきました、中途にして清

水がありましたから、掬ひて飲まんと近寄つて、水に覗けば寫る影に我れながらも
をどろける様子じや、髪は綱やかにして紺青のごとく、容ちは美はしくいたして雲
間の月の僅かに出るにことならず、丹花の唇びる、珂雪の齒、まことに比ひなき麗
はしき粧はひじや、あたらし身を只今棄て尼とならんは、いとく惜しきことじや、
唯た世に順かひて時めき、我か心に任せて樂しまばやと、それより家にかへりまし
た、如來は三明圓かにして蓮華女が化導時いたれりと思ふなはして、忽ち女人の
姿に變じたまひて、路に尋て來り向はるゝ、其うつくしき蓮華女にまざることを數等
じや、蓮華女はこれを見て、心ろに愛ををこしませて、かゝる美人も世にあるもの
か、我か容ちこれに比ふれば色なきこと灰のごとし、緩くわゆみ靜かに來たるよう
はひ、この世の人とはともはれず、あまりのなつかしさに立とまりて言葉をかけ、
あなたは何れのね人にして、何方へれもひきたまふや、かゝるうつくしき姿たに
て、侍従をも召しつれたまはぬは、甚だいふかしき御事よといへは、女答へて申し
ますには、妾は此城中より出まして、今歸らふところでありますけれども、

道に侍従が妾の跡を見うしなひ、今に來ぬのでふいます、歩みなれぬ路のうへに裾
は露にうるはひたり、いざ清水のもとに休らひて語りませうと、蓮華女と二人にて
水の側りに坐し、越し方ゆく末を語るうちに女は蓮華女の膝を枕にして、いつか眼
りて仕舞ました、暫らくすると女は何としたことぞ、其まゝ空しくなりました、蓮
華女大にねどろきまして、色く介抱すれども及ばず、忽ちちにして麗はしさは何
處へやら、青く痲みて腫れふくれ、崩れて腸をいだしたれば臭きこと言はん方なし
最早や二目とは見られぬ始末じや、是れは如何なる無常ぞや、此美人尙は爾り、我
れもまた幾ばくもあらんと思ひ取り、夫より如來のところに詣りまして、五体を地
に投げ出して禮をなし、具さに此事を申しのべて、出家を望みましたから、如來は
疾くにお歸りになつて居つて、華女に告げてのたまはく、汝ち宿善の助けによりて
幸ひに人身を受たれども、女人に生れて障りは多い、今眼の前に無常を見て、大方
心ろも付たであらふ、速かに菩提心を起して、無上道を成就せよ、夫れ人間には四
つの事あり、一つには少壯なるものは老に歸し、二つには強健なるものは必らず死

す、三つには六親樂しみあつまるは別離すべし、四つには財を積みは必らず散すど
蓮華女は聞さをはりて、深く無常の有様を觀し、受け難き人身を受けたるをよろこ
び、精進思惟して終に阿羅漢果を得たりといふ、實にそうじや、受け難く遇ひ難きの
人身や佛法をよるこふと共に、此身を粗末にいたすことなく、無常の有様をよく觀
して、今生に無上道を修めねば、再び迷ひ出さねばならん、人間の墓なきを深く
もふて、空しく無常に伴はれぬやう、ね心ろがけが肝要であります。

第四席

(修證義第壹章 總序第參節)

無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落ちん身已に私にあらす命は光陰に
移されて暫らくも停め難し紅顏いつくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし熱
觀するところに往事の再び逢ふべからざる多し無常忽ちちりに到る時は國王大臣親
暱從僕妻子珍寶たすくるなし唯獨り黃泉に趣くのみなり已れに隨ひ行くは只是れ
善惡業等のみなり

前席の叱しで最勝善身を徒らにして、無常の風に任することなかれと仰せられた

其無常の様子は如様なものか、如何なるものが無常なるかと委しく御穿鑿を遊ばさ
るゝのが、此御質問じや、頭まから無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落
ちんと、個様な御垂示じや、其無常と申すことは、字に替て常なしじや、些ども定
まりが付て居らぬのじや、何でもよい、世の中の物柄事柄といふものは一ツでも定
まつて常住して居るものはない、實に諸行無常是生滅法じやから、萬事萬物違いか
早いかの差別はあれ、成住壞空々々々々と、出來て其處に在るかと思へは裏面から
既に破れかけて、ト〜破れて空になる、空になるが早いか又出來て又成住壞
空じや、此様いふやうにクル〜廻つて少しも常住永存と極まつたものではない、
地球は何萬億劫の昔に出來たものじや、太陽は何兆載前に出來たものだ、今に存
在して居るではないか、此鹽梅で往く時には、まだ〜何億年永存するか知れぬと
思つて居るじやらふが、是ども出來たといふ始めが付いたら終るものといふこと
も分らにやならぬ、一刹那〜の中に生滅して、今どといふ言葉はモー過ぎた、ソ
ラ又今じやどといふ間にモー過ぎ、過ぎたものは滅して直ちに今を生じ、メンツと

生滅に涉つてゆく、夫れを凡夫の考へでは、成と出来たら住といふてものやうに光り耀やいて居る、那れが又壞れると言つたところで、二年や三年ではない、破れかゝつても空になるまでは何年後のことだか分らない、個様に大きなところへは些し位は氣が付くもの、夫れが一刹那間にも生滅に涉つて成住壞空々々々々で押し通して行くなぞ、は、逆も及ばぬ考へだ、一刹那といふ時刻は極く短かい時間で、今の時計一セコンドを六十に割つた位に當るとうじやが、其中で成住壞空々々々々と生滅して居るのじやから、凡夫の分では分らぬ筈じや、先づ己れが身で考へたばかりでも知れそうなものじや、此身体の生れた時から死に近い六十位の間に果して何様な變遷があつた、生れて七日もたてば七日丈け、一年たてば一年だけ、乃至十年十五年と段々大きくなつて來たが、何時此様なに大きくなつたか、見て居つたものはないが何でも生れてから十五年の内に大きくなつたに違いない、其様なら十五年の内に大きくなつたと承知したなら、十年の内にも大きくなつたであらう、それから五年一年一月と迫りつめて來て、一日の間でも大きくなつたであらう、一時か

一分、一分が一秒間、一秒間が一刹那の内でも大きくなつたに違いない、左すれば一刹那の内にも生滅に涉つて居るものじやといふことは、ドーしても合點がゆかねばならん、又年をとつて皺の寄るのも此道理で知れるだらう、夫れだから此世の中の万事万物は、總べて無常でないものはない、此無常の中に居るのじやから、明日の翌々日のと、ペン／＼として憑みにしては居られぬ、是れが無常憑み難しじや、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、斯様な世の中に居るのじやから露命に違いなからふがな、何れの道か知らねども、業報でかためた此身体、四大五蘊の因縁和合した身じやに依つて、即心是佛のれ悟りが出来ずに死んだら、又地獄や餓鬼に落ちて、散々な苦勞をせねばならん、身に私しにあらす、命は光陰に移されて暫らくも止め難し、紅顏いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、皆んなね互ひ銘々共が、私しが拙者がど、頻りに張臂して威張て居るけれども、天窓のギリ／＼から足しの瓜先まで、何處の處ろに拙者だの私したのと、名の付さうなものがあるか、若し一つでもあるとすれば、ナセ身儘氣儘に自由自在になりませぬ、年

を取つちや面白くないから若やいて二十位にならふ、死んでは面白くないから何億年でも決して死なぬと、思ふ通りになりうらなものであるまいか、夫れが一つでも己れの自由にならぬといふ、身に私しにあらざるまいか、三十は三十四十は四十の年輩のやうに、光陰に移されて包みもてゆかれ、昔し十六七であつた時分、美くしい紅顔はいづくへか去りにし、實に尋ねんとしても蹤かたもなしじや無常の變遷がドシ〜と持ち去る、熱く観する所に往事の再ひ逢ふへからざる多し、ド〜しても一度持ち去りたものは再ひ見ることは出来ぬ、再ひ逢ふへからざる多しとこの嗚しでない、ソフして其死といふ無常に出つ喰はしたなら、うりや其時は何様な騒ぎじや、國王大臣親隨從僕妻子珍寶もたすくるなし、獨り黄泉に趣むくのみなり、何程金をかけてもよいから、此命を止めたい、妻子か戀しくて死に切れないのと、いくら愚痴を並らべたからと言つて、決して止まるものではない、唯獨り黄泉に趣くのみなり、仕方なく一人旅じや、其時のね供は何だと言へば、善と惡との業ばかりじや、何と心細いものではないか、唯獨り行くといへば、何か靈魂でも身体

から抜け出して、フツ〜と行くやうに思ふたらふが、其様なことは決してない、我が佛法の定めでは、世の中の萬事萬物が、決して破ふものではない、身体が死んだら残るものは何にもない、皆んな一度に死んで仕舞ふじや、若し靈魂でもあると言ふたら夫れこそお化が出て堪らない、此寶を残しては往くところへ行かれぬ此妻子は何様なるかと案じられて、マダ屋根の上に迷つて居る、斯様な蓮梅になつて来る、併し世の中に化といふものが確かにあるといふたら晝るでも夜るでも時を嫌はず出らうなものじやか、それがドーしたものか、夜るに限つて居る、夜るも必らず丑満頃とか、山寺の鐘がゴーンと鳴るとか、時を切つて出て来るとは面白い何しろ佛法には靈魂などいふものはない、只業といふ働らさものが残りて地獄道餓鬼道夫れ〜の輕重に依りて、夫れだけの生を受くるのじや、心得違ひせぬやうに致したい、尤もハヤ何時の頃より始まつたかは知らねど、立派な坊さん方が靈魂不滅などいふて、死んだら人玉といふやうなものがフツ〜と抜け出して行くやうに説き、此靈魂といふものは身体と違つて、身体は火葬にでも土葬にでもされるけれど

靈魂ばかりは火にも焼けず水にも溺れず、握まりもせんければ握りられもせん、實に万代不滅は是ばかりじやなぞ、麗々と耶蘇教に似たやうなこと言つて居る、是れだから世間でも、靈魂不滅なと思ふも無理はない、前にも申す通り身体は死んだが魂しいは生きて居るなぞ、決して跋ふむものでは、若し靈魂があるとすれば、生れる時に身体と共に出来て、身体と共に大きくなつて身体と共に年を取つて身体と共に死ぬのじや、ソレで奇麗に片か付くではないか、迷ふなく、譬へて見れば、或る國の王様が國富んで民ゆたかに、干戈を揃かすこともなく、泰平無事に打讀いてあらゆる樂しみも仕盡したれば、今度は死にたくないといふ了簡を起し、徐福見たやうな人間に言ひ付けて、死なぬ靈藥を求めさせたが、サア何程尋ねたからとて其様な藥りがあるものでないト、言つて死にたくないといふ了簡は何處までも止まぬ間誤くして居るうちに大病にかゝつた、サア死にたくないものじやから有ゆる名醫に診せても、何様しても今度は死病だといふ、大王此時考へた、逆も死ぬなら一人じやいやだ、大臣や次官を始めとして諸くの百官を引連れ、可愛い妻子を携へ

て廣い極樂へ出かけ、極樂で一番思ふ存分、ドゑらい政府を押し立て、閻魔の向ふを張つて見やうと言ふので、御世界の供養を觸れ出したところが御世界の供養では、理に外つれたのぞみじやから、一人も應じ手がない、一人として殉死を申し込むものがない、大王これを聞て瞋ること夥多しく、ソソなら備でも拵らぬると木偶の坊を拵て見たが、矢ッ張り面白くないものだから、ト〜〜足摺しながら閻魔に死んで仕舞つたといふやうなものじや、實に無常の風かサツと吹ひて来た時には、一ツも身に添ふものはない、只造りためた善と惡との業だけが供じや何と悲しいものではないか、

昔し平の維盛卿とて、三位中將の大臣があらせられたが、卿は平の清盛とて、天子様も恐れ戦、かれた程の息子で、随分時めき盛んであつたが、兄の重盛は逆も日本では仕方がないとして、唐土へ祠堂金を送り、これへ冥福を祈つて貰つて、平氏の世を斷念めて死んで仕舞い、モ一人の兄の知盛も、檀の浦の藻屑となりて、今は源氏が幅を利かし、都こにも居ることが出来ず、一人スゴ〜と落ちゆく時、熱く無常

を感せられたと見ゆて、聞くも憐れな言葉をもて、痛くなげかれたことがある、其
歎かれた言葉といふは、山に入り市に交はりても、通れ難きは無常の使ひじや、關
を固め兵を集めても、防ぎ難きは生死の敵じや、ア、平氏の盛んな昔しを思へば、
なつかしいことであるが、今はそれとは事かはりて、野原の末に捨られて、雨露に
かばねを晒さにやならぬ、恩愛に心を悩ませども、中有の旅に出ぬれば惡業はか
り従がふのみと、誠に此言葉の通りじや、聞くさへ心ろ細くなるじや、尙ほ此次
は因果のね嘸しでありて、何ゆゑ是等の苦惱を爲すか、何ゆゑ業が付いて廻るか、
能く其種を探つて見ませう、

第五席

(修證義第壹章 總序第四節)

今の世に因果を知らず業報を明らめず三世を知らず善惡を辨せざる邪見の黨侶
には群すべからず大凡因果の道理歴然として私なし造惡の者は墮ち修善の者は陞
る毫釐もばはざるなり若し因果亡して虚しからんか如きは諸佛の出世あるべから
ず祖師の西來あるべからず

前席にお示し下さるゝ通り、死て己れに従ひゆくものは只善惡の業ばかりじやから
邪見を起してれ定りの因果撥無といふものになるな、この此御文じや、尤も己れに従
ふとらへば其己れといふのが、靈魂でも思ふべけれど、是れはホンの障の分るや
うに仰せられたまでのことで、己に己れなきいふものはないのじや、此身私にあら
ずと仰せらるゝので、大抵は分らにやならん、ソレで業のみが残るのじやが、其業
か何様な働らきを爲すかといふに、今死ぬる此身が、物心ればなてから、造り積ん
だ善惡の業か因となりて其因が六道をぐるゝ廻り、人間の果を結ぶか又は畜生の
果を結ぶか、即ち三善道三惡道何れのところへでも、因次第の果をむすぶ、これ
を因果といふ、三善道とは何か、天上と人間と修羅三惡道とは何か、畜生と餓鬼と
地獄との事じや、即ち業に牽かれて此六趣を廻るのじや、廻つて頭を出したとこ
ろが、果じや、だから猫の腹から首を出すことになるか、犬の腹に首を出すことになる
か分らぬ、ソレを何程言つて聞かせたからと言ふて、人間の種は何處までも人間じ
や、丁度爪の種が何時までも、爪茄子の種が何時までも茄子のやうなものじやと、

確かな證據を踏んで来て議論を試み、何で猫や犬に生れるものか、馬鹿といふな、
 業でも喰へなぞ、因果を信せぬ、斯やうな族が多いから、今の世に因果を知らず業
 報を明らめず、三世を知らず善惡を辨まへざる邪見の黨侶には群すべからずと、御
 乘示下ざるゝのじや、尤も昔しから斯様な馬鹿者が多かつたと見えて、身見じやと
 か邊見じやとか、扱は見取見とか戒取見邪見といふやうに五種の見やうをすること
 を戒しめられてゐる、今邪見とは何様なことかといふに、因果と業報と三世と善惡
 とを辨まへ知らざるを邪見といふとある、涅槃經には一闍提即ち信不具と名けた
 まふ、闍提は因果を信せず慚愧あることなく、業報を信せず現在及び未來世を見ず
 善友に親かず諸佛所説の教誡に隨かはす、是の如き人を闍提と名けて、諸佛世尊
 も治すること能はざる所なりとある、何を以ての故にとなれば、死屍は醫の治する
 能はざるが如しと、何と情けないことではないか、死屍と同様に取扱はれるなほは
 捨てられた上からでも頂上な捨てられ方であらふ、是れが何の爲りじやといへば、邪
 見を起して仰せの通りにならぬからじや、御教誡に従はぬからじや、夫れでまた御

親切には已れが幸はひに因果を信する人であつても、是等の邪見の人には群するな
 交はるなど仰らるゝ、何故かといへば朱に交はれば赤くなるからじや、かほせまで
 に邪見を憎みたまふか、憎みまふもれ道理じや、佛にも三不能と申して、三つ出来
 ぬことがある、一つは縁なき衆生は度し難し、モ一つは生界を盡こと能はず、モ一
 つは定業は轉すべからずじや、此中の一つじやから尤ものことじや、是れが則ち
 因果を知らず業報を明らめず、三世を知らず善惡を辨まへざる邪見の黨侶には群す
 べからずの御文の意味じや、次の御文は大凡因果の道理歴然として私しなし、道惡
 のものは墮ち修善のものは陞る、毫釐も忒はざるなり、斯様じや、世の中の有りど
 し有ゆるもの、何一つとして因果を離れたものはない、因果は人間にばかりに付て
 居るものではない、尤も因果な人じやとか又は業つく張りとかいふこともあるから
 人間のことばかりと思ふも無理はないが、決して左様な譯ではない、原因のないも
 のに現在の物柄事柄の出来る道理がない、實に因果といふことは確乎として動かす
 ことの出来ない、道理の總名じやから、此道理に欠るものは一つもないのじや、故

に歴々として毛はせばかりも暗ますところなく、賄賂を使つても些しの効能もあら
 ばころ、メンツと罪が定まつて、那方が重すぎた軽るすぎた、此方か得になつた損
 になつた、壹圓は壹圓だけ貳圓は貳圓だけ、毛はせばかりの違ひもなく、私しをす
 るところもなく、堂々と片をつける、苦情を言ふなら言つて見るがよろしい、犬に
 なつたからとて、猫になつたからとて、他にかはつたことではない、銘々勝手に
 なつたのじや、因果といふれ役人には、スツカリ見透しが付て居つて、何様な苦情
 も受付けられぬ、若し毛はせばかりも違ふたらは、決して因果歴然とは言はれない
 歴然で少しも暗ますことがないから、悪い事はするな公道に欠けたことはするな、
 悪るゝことをするといふと、墮して三惡道へ趣くぞ、善いことは修めろよ、善根を
 植ゑろよ、善ことを爲るといふと墜りて天上にも赴くぞよ、謂ゆる善因は惡報を受
 けず惡因は終に善果を受けずと正法念處經にもある通りじや、シテ又墜るの墮るの
 といふ言葉に直ぐ就てはいかん、天上だからとて高くもなく地獄じやからとて低く
 もないのじや、一般の人間の上に尊卑貴賤があるやうなもので、尊といふても人間

なれば卑といふても人間の譯じや、扱因果は好し此通りじやが、三世とは何様な
 のか、三世とは過ぎた時間と現在の時間と未來の時間じや、此時間を通して因われ
 ば果を結すゝのじやから、三世と因果とは姉とも言はれぬ妹とも言はれないやうな
 もので少しも離れて居らぬ、此三世の中に因果があれば、因と果に善惡ある、其善
 とは何様なものかと、尋ねれば、善にも三品あり惡にも三品あり上品の善は天上
 の身を感じ、中品は人間、下品は修羅じや、惡は上品が餓鬼、中品が畜生、下品が
 地獄で、善に十あり、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不惡口、不綺語、不兩舌
 不貪欲、不瞋恚、不邪見、惡に十あり、善の方の不の字を除けば十惡だ、ソコテ十善
 十惡とは申せども高祖大師様の仰せでは善惡は時なり時は善惡にあらす、善惡は法
 なり法は善惡にあらすとおつて、若し善惡を判断して、一ツの斷案を下し動かすべ
 からざるものとすれば、木偶的の死法なのじや、慈善尊者は宜まはく、法性に隨順
 するを善といひ、法性に違逆するを惡とらふと、個やうに始より善惡の標準も立て
 居る、然ると今更のやうに世間の學者達が、ヤレ善惡の標準じやとか、人は道徳の

標準じやとか、おんまり馬鹿しくして物が言へぬ、さて餘談は兎も角、三世時間中に於て業因業報を以てあらわれ、あらわるゝに善あり悪ありといふことは、先づ大底お分りになりましたらふ。然るに若し、因果も三世もあるものか、業報とか善悪とか一体何じやと、頭まから粉名しつけてよいものならば、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず、諸佛世尊が御出世になつて真理じやの妙道じやの舌を爛らして御教示はなされぬ、何が得になつて面白くもない、達磨さまが遙くのところを得々と御出になつて、面壁九年の御苦勞も皆な是れ妙道開示の爲めじや然るを凡夫が何にも知らずに、屈理屈を並べて済むものではない、譬へは錢のない盲目者が、アメリカへでも行かふといふやうなものじや、モシく按摩さん、お前さんは何處へ行かしやる、へい私しかオ、私しは日本が厭やになつたから、按摩を取つても一晩に五弗も取れるといふ、アメリカへでも行かふと思つて、へい大そうな願ひを起したもんだね、私し共は目もきであつて、錢もアメリカへ行く位のは持つて居るが、氣候も違ふたらふし人氣も違つて居らふ、夫れに一晩に

五弗は取れるか知らないが、それは出る道も亦た多いから、按摩の稼ぎでも五弗になるので、丁度日本で一晩十錢取る位に當るだらふ、イヤ悪ることは言はぬからマア止めにしたら宜いでせう、イヤサ、按摩の渡航は僕が一番絵であらふし、盲目と思つておつ仰るだらふが、ソコが大和魂しむた、日本の按摩の豪膽を見せるのじや、マアく止めて下さるな、イヤれ前の自由じやから止めも強いては致さんが、先づれ前さんは何様行かッしやるね積りかね、イヤれ氣遣ひ下さるな、横濱へ往つて舟に乗ります、ソレからサンフランシスコは直ぐ向ふじやからね、イヤそう言はしやればどうかも知らんが、舟に乗るにも金が要るし、又二日や三日では行かれませんせ、ナニ錢は一文も入らぬ工夫じや、エ、此手が資本じや、舟に乗れば御客方の肩を揉んで、乗つた日から錢を取るのじや、左すれば十日が二十日でも百日が千日でも、一向恐れることはない、イヤ夫れは面白い考へ付きたが、算用通りに行きますかな、ナニ御心配下さるな、モシも行かんとして見たところで、世間には人鬼はない、殊に私しのやうな盲目には分けて不惑をかけて呉れるものじや、イヤ其れ

は當てにならぬ、成程世間には人鬼はない、不惑をかけて呉れるものもあらふ、言はば其様な當ことは、海の中に浮いて居る座のやうなもので、少し風が来ればズンズンと流れて行つて仕舞ふ、握まへたくも向ふで厭と言ふたら仕方がない、イヤれ前さんのやうに心配しては、何事も出来やしない、マア御免なさい、ズンツと出かけて仕舞つた、サア踏み出したはよいが、入王子(武藏の國の地名横濱と反對の方角)の方へ行つて仕舞つた、實に浮雲ものではないか、

昔し天然に善習といふものがありました、丁度迦葉尊者から三代目の、商那和修尊者の時代のもので、尊者のね晰しも親しく承たまはつたであらふが、如何にしても御説法に従がはれぬ、丁度前の按摩のやうな植梅で、ア、言へばコツ言ひコツ言へばア、言ふ、少しも口の滅ることはない、我慢ばかり押し通して手に遇はぬものじやから、尊者も断念めてお仕舞なされた、サア善習は大威張りじや、已れの辨才は誰でも来いじや、尊者をさへ言へ負した、尊者をさへ負ける程じやから其餘の族は吐息でも飛んで仕舞ふ、自分ながら恐ろしいはどの辨才じや、サア是からは尊者

に敵對して、一番已れの名を掲げねばならんと、メソソ、其處らに聞談のいて居ると、時に雷鳴烈しく聞えて、見る間に礫の如き雨を降らし、一閃電の来ると見えしが、善習は打き裂かれて其場に落命、正法に背き正法に逆ふた罪、現前に此通もじや、努力疑ふまいぞや、

第六席

(修証義第五節 雜序第五節)

善惡の報に三時あり一者順現報受二者順次生受三者順後次受これを三時といふ佛祖の道を修習するには其最初より斯三時の業報の理を効ひ驗らひるなり爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり但邪見に墮つるのみにあらず惡道に墮ちて長時間の苦を受く

是の御文は修証義の第五節で、因果の上に三時業報のあることを明らかに、尙ほ重ねて邪見の輩らを誡しめたまふのじや、此三時業のことが能く分らんといふと、因果の道理にも疑かひが起るのじやから、殊更に三時業を御垂示下ざるのじや、抑も善と云ひ惡と申しても、元どく定まつて形ちがあつて、斯れが斯様じやと言はる

いものでない、だから是れには種々の差別があるのじや、悪を爲すも善を爲すも原因は一つでない、軽いもあれば重いもあり、隠れたのもあれば顯はれたものもあるこのところが報を受くるに遅い早いの別があるのじや、其最とも早く受くる果報は今世の因に依りて今生の實を結すふをいふので、即ち是れが第一の順現報受じや、其次ぎに受くる果報を順次生受といふて、來世に實を結すふのじやから、是れは今茲に斯れが順次生受の印しじやといふて、皆々まにお見せ申すことが出來ぬ、去れど順現報受だけは是れで御座ると此身体をお目通りへ出すことが出來る、じやから是れには先づ疑がひは起らぬとしても、順次生受にはナト疑がひが起つて來る起つては來るが茲が我が佛法の特色であつて、味はひが茲にあるのじや、其れなら第三の順後次受といふのは、來々世に果報があるやら來々世に實を結すふやら又は百年千年萬劫億劫の末に報を受くるやら、それは些つとも分らぬから、尙ほ更うたがいが起つて來る斯様なつて來るとます、佛法のお得意なところ、これを經には世尊の言まはく假令ひ百劫を經るとも所作の業は亡びず、因縁會ひ遇ふ時には

果報還て自受すと、決して遁がるゝことは出來ぬ、何時か一度は乾度廻つて來ると個様に仰せらるゝ、若し人これを疑がふとならば、佛は何んで眞語者じやとか、又は眞語者と言はれませうう、殊に知らず、我々凡夫ども相手にして虚言を吐いて何様なりませうか、佛様のお眼からは斯の罪は百年たてば報つて來る、那の罪は千劫經ては報つて來ると、チャンと見透しがついで、謂ゆる三時を見透しの悟りの眼こじやから、其通り些しの間違ひもないのじや、じやから此道理を明らかに見ると顔回のやうな人が、若死をしたり、盜跡のやうな徒づらものかながいさをしたります、世間の道理じやといふのに合はぬやうなことも、順後次受の道理から推す時は些しも暗らますところなく、能く分つて能く知れるじやないか、桃栗三年柿八年、密柑は九年で生り盛る、桃は生じてから三年、栗も植ゑてから三年たゝねば、桃や栗の顔を見ることが出來ぬ、柿は八年、植ゑてから八年育て、置かねば、柿の形を見ること出來ない、夫れよりも密柑の方はマダ長い、九年といふ飽きるほどの年を經てから、漸やくのことで生り盛かるといふ、去年蒔いた麥を、今年になつてか

ら收穫するものもあれば、今年植はて今年で收穫する物もあり、一様一体に定まらぬ、木萱艸竹でも禽獸虫魚でも、何でも角でも皆な別々なところが、尋常のである雀の顔を我れくともから見れば、皆などれく同じやうなものやけれども、皆なあれで違つて居る、それは別嬪じやとか、それは醜男じやとか、那の仲間でも一樣にはいかぬ、皆なそれが個々別々に、生れて来た原因が違ふからのことじや、雀がうとうと極まつて見れば猫の仲間もそうであらふし、犬の仲間もううであらふ、生とし生けるもの皆その通りで、一個々々皆獨立して居るのである、丁度人間に別嬪醜男、貴賤尊卑壽夭強弱があるのだから、因が違つて受けて居る報が個々だとも分らねばならぬ、だから何萬人集まつても、何億人會合しても、決して一人も同じ顔のものはない、雀だらふが犬だらふが其通りじや、是れ業力といふ品物が因果といふ權衡にかゝつて、三世といふ道中を経て、分配されて来た印しなのじや、此色々に替つて居る様子を經には、汝等當に知るべし、若し純黒の業は純黒の異熟を得、若し純白の業は純白の異熟を得、若し黒白の業は雜異熟を得、是ゆゑに應

さに純黒及び黒白の雜業を離れて、當に勤めて純白の業を修學すべしと、皆なその顯はれて来たもの、原因の有様じや而して三時にかゝつて居ぬものは一つもない是佛法の道理を習ひ修するには、先づ最初より斯三時業報の理を効ひ驗らむるなりとありて、第一節の生を明らめ死を明らむるには、斯三時業の道理を最初に明らめ知らねばならぬとの御垂示であるのじや、夫れで斯三時の事に就てまた疑がひ起るならば、祖訓には過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ、未來の果を知らんと欲せば現在の因に驗せよとある、手を取るやうに救はて下さるが、是で分らんければ仕方がない、此道理が分からんければ多く錯りて邪見に墮つるなり、但邪見に墮つるのみにあらず、惡道に墮ちて長時の苦を受くと、多く錯りてドンな學者でもドンな智者でも、天をうらんたり、人を尤めたり、飛んでもないところへ迷惑をかけ即ち多く錯りて邪見に墮つるなり、邪見に落ちたら、邪見に墮ちた切りで濟みはしない、三惡道に墮ちて長時の苦を受く、いつまで苦勞を受くることじやか、口や筆には盡せぬことじや、斯様に御垂示するものぞ、うれでも合點が往かぬと言

つて已れの我を押し通す奴は、眞に剛愎の信不具じや、
 譬へば居付地主が道を教えて呉れるやうなものじや、地主さん手を組んで、那の店
 子にも困つたものだ、ナせ私しの言ふことが分らぬだらう、毎日／＼夫婦喧嘩ばか
 りして居る、面白くもない何のことだ、イヤ那の店子にも困つたものじや、毎日
 博奕ばかり打つて居るが、いつでも裸体じや仕方がないじやないか、斯やうな
 心配をして考へて居るところへ、那地の人やら向ふの行きどまりの通りを行くから
 酔く氣の毒のことに思つてモン／＼、あなたはどこへ出か知りませんが、それは
 行きどまりでよいですよ、へ、其様ですか、言つたつ切り立どまつて仕舞つた、モ
 シあなた何を考へてお出なさる、イヤ此前に来た時には確かに通れた道ですが、ソ
 ンなら何時か塞がりましたか、イヤ元／＼塞がつて居るのですよ、イヤそうじや
 ない、確かに通れる筈じや、其れはお前さんの嘘じや、そんな筈は決してない、馬
 鹿なことをおツ仰れ、夫れは行きどまりじやと申すのに、イヤ何様もそうは思はれ
 ぬ、ソソなら勝手におやりなされ、お前さんとそんな問答したつて、私しの得にな

めやすまいし、口を利くだけ指がたつのも、地主も斯様な馬鹿にかゝつたのだから
 ト／＼怒つて仕舞つて、中ッ腹で刎ねつけた、刎ね付けては見たが併し氣の毒な
 こと、思つて、心のうちでは困つたものじやと思つて居ると、奴さんはそんなこと
 に頓着なく、ノ／＼と出かけて行く、暫らくすると案の條歸つて来て、悪むいと
 も言はず勿論禮も述べず、何處へゆくのか知らないが、地主の前を通り過ぎて仕舞
 つた、マア是れが正氣の沙汰と思はれますか、何が扱て居付地主で、何代前から住
 んで居るものだから分らない、人に啞を言つて何様なるものか、それを一方では疑が
 つて、強情を張り通した、揚句の果は歸つて来ても、一言の禮ものべず、勿論キマ
 リが悪くて無言つて居つたが、ろこまでは分らないが、此様な奴じやから何とも
 知れない、今更此乗示も其通りで、仰せ通りに従はぬといふと、多く錯りて邪見に
 墮つ、但邪見に墮るのみにあらず、悪道に墮ちて長時の苦を受くるのじや、
 昔し天竺の第十九祖に當りたまふ、鳩摩羅多尊者といへるお方が、中天竺に至りた
 まふ時、一人の居士があらました、其名を闍笈多と申したが、鳩摩羅多尊者の來り

たまふと聞きて、急ぎせん許に参られまして、尊者に伺ひたてまつるやうは、我が家の父も母も、素より三寶を信じまして、諸ろくの善根は、人の勤めを待たずとも、先きに立ちて行ふ身でムりますが、日外や病ひにかゝりまして、其のちと申しますは、身体もあまり達者でなく、如何にもいたゞしうムりますし、又營なみます日々のことも凡べて思ふやうになりませぬ、爲ることなすこと皆左りまへとなりまして、見るも氣の毒にムりますが、私しの家には引かへまして、隣りの家でムりますが、久しく施陀羅の行ひを爲しまして、随分惡いことも任兼ねぬものでムります、夫れではあるが身体も常に健康でありまして、爲ることなすことが皆な都合よく、意の如くならぬもの一ツもないやうにムりますが、一体マア何の道理で、何の謂れがありまして、其様な次第でありませう、彼れは何の幸ひがありまして我れには何の罪があるのでムりませう、個様にお尋ね致すといふと、尊者は別に考へもなく、何に、其しきのことを疑ふてなるものか、且ツ夫れ善惡の報に三時あり、凡人は但ゞ仁者の若死すること、暴者の壽いさすることの二ツと、吉なる

ものに逆にして凶なるものに義なることを見て、そうして因果を亡し罪福を虚なりといふ、殊に知らず、影の如く相従がひ、響の如く相應じて、毫釐たりとも忒ふことなきを縱令百千万劫を経るとも亦た磨滅することなし、時に闇夜多是れ言葉聞き終りて頗みに疑ふところを釋き有り難き仰せかな有難や、で、鳩摩羅多尊者のれ供をして、尊者の至らせたまふところに従がひゆき、佛法の一大事因縁をわさためたまひて、終には鳩摩羅多尊者の衣鉢をつぎて、第二十祖と尊めらるゝに至られしは此闇夜多尊者であります、去れば此闇夜多尊者のれ嘶しに付さても、佛祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を、効ひ驗らひるなりとの仰せは、能く分るでありませう、且ツは此闇夜多尊者のお嘶しに付さては、高祖大師の宣まはく、鳩摩羅多尊者は釋尊一佛の法をわさらめ正傳せるのみにあらず、兼て三世諸佛の法をも曉了せり、闇夜多尊者の今の問を設けしよりのち、鳩摩羅多尊者に従かひて如來の正法を修習し、つひに第二十代の祖師となれり、これもまた世尊は遙かに第二十祖は闇夜多なるべしと、記しませせりとこれを三世通達之眼といふ

のじや、何と恐ろしいほどのお眼ではないか、

第七席

(修羅殿第五席 總序第六節)

當に知るべし今生の我身二つ無し三つ無し徒らに邪見に墮ちて虚く惡業を取得せん惜しからざらめや惡を造りなから惡にあらすと思ひ惡の報あるべからすと邪思惟するに依りて惡の報を取得せるにはあらず

ナラ此賛題は、第一章總序の片をつけるので、言は、一章だけのむすびじや、當に知るべし今生の我身二つなし三つなし、此れ言葉だけが第一節第二節のむすびとなし、徒づらに邪見に墮ちて惡業を取得せん、惜しからざらめやとあるまでのれ言葉と、第三節第四節のむすびとなし、惡をつくりながら惡にあらすとれもひ、惡の報あるべからすと邪思惟するに依りて、惡の報を取得せざるにはあらずとあるれ言葉までを、節五節のむすびと遊ばされたのじや、一口に斯やうに述べて仕舞へは別に御賛題のれもむきを言はんでも濟むやうなものじやが、操かへしく、何遍もしくも言ふうちには、様子も自然と知れる道理じやから、ト言ッて一ツことばあん

まり面白くない、只此第一章第五節までのれもむきと、一トまどめにして言ふときは、どのやうな味はひになるか、それは一つ吟味せねばならん、われしくも言ふま方ももとより、斯のごとく佛法を信じて受けますけれども、若しも一念あやまりを生じて、生死の中に佛けなしと思ひ、又は厭離穢土欣求淨土と言つて、此世の中は如何にも厭やじや、是れよりも淨土の樂なところを望みじやが、早く極樂へ往きたいものじやなどと、斯様な望みを起されると、夫こう一大事のところにじやから、重ねの御垂示なのじや、尤も考へて見るといふと淨土のことじやからね、何の事は無い正宗の刀を子供に預けたやうなもので、過やまつて怪我をするもあらずし物心の分つた人なら大切に仕舞つて置く、此正宗のやうな我が曹洞宗の安心、即心是佛佛即是心といふれ悟りを片付けて置かれて堪るものではない、又怒じい聞き囁つた位の人なら、怪我をすることに相成る次第じや、怪我をするとは此も取らず癖も取らずならまだよいが、此も取り癖も取ることになるから、何が何やら知らぬことになる、即ち側で妙なお談義を始められて、ナントね同行、此装束はと厭やなどころ

はわりますまい、だから是れを穢土と申す、彼方向ても此方向いても、面白くないことばかりじや、ヤレ借金じやヤレ悪取りじや、ソラ訴訟が起つた運が悪くて負けて仕舞た、那處の家へは執達吏が来たとか此處の家へは厄病神が舞い込んだとか五月蠅こと、是では此世が厭になりませうなせ、得意のれ談義を承けたまはると、又欣求といふて浄土を求め氣にもなる、又生を明らめ死を明らめて即心是佛のれ悟りも聞くものじやから、何方か眞實のことやら些とも分らず、大怪我を仕て仕舞ふ、終には幸はひと人間に生れ合せて遇ひ難き佛法に遇ひながら、壽命を徒らに無常の風に任することゝなる、斯様なことでいかにぬから、二つある身ではなし三つある身ではなし、タツタ一つの大切な此心身を、最も倉未に扱はぬやうに、大切に守護して祖師門下の安心を取るやうに、妙道を悟り得らるゝやうにと、重ねくの御垂示である、即ち徒らに邪見に墮ちて、虚しく悪業を感得せん惜しからざらめやじや、夫れから悪を造りながら悪にゐらずと思ひ、悪の報あるべからずと邪思惟するに依りて、悪の報を感得せざるにはゐらずと、是れ實に細かなれさとし

でありて、最も有難いところじや、大きな悪ならば、是れは悪じやと氣が付くけれども、一寸した悪業、即ち蚊の足を折つた位のことば、殆んど知らぬはさに過ぎるものじや、去りながら邪見を起すに當つては、決して悪を悪とも思はず、牛や魚は人間に食はるゝ爲めに天帝が拵らへたなせ、邪見を押し通して、天帝の仰せの通りじやから悪ではない、何の報いがあるものでと、如何に不殺生の道理を説いて聞かせても、合點をすることなく、耶蘇教信者で押し切ると、悪の報を感得せざるにはゐらずで、屹度三惡道に墮ち入るのじや、じやから些細の事は罪にもなるまい、報ひなど何あらふなせ、自分勝手に道理を付けて、無闇なことを致さぬがよろしいじや、何様なことがあつたからとて、悪いことをしては決してならん、造惡の者は墮ちる因果の道理の法則じやから、些細なことは尙ほ慎しむがよからふ、ナニ此位なことはよいと思ふのが抑もくの過まらじや、譬へて見れば悪るとすい商賣をするやうなものじや、オイ八百屋さん其大根を一本たくれ、言はるゝといふ商賣だから懸直をいふのが當然と思つて居るから、ハイ是

れですが、代は一錢ですよ、ナニ八十の價で澤山なところを貳厘懸けて言ふと、買入の方では大根一本位のことじやから、直切りも何にもしないで、買ッて行く、オヤ直切ると思ッたら直切らないで行ッて仕舞ッた、貳厘の得が付いた、モシ八百屋さん、其牛房を一把、ハイ入らッしやいまし、代は幾程ですか、是れも五厘はどかけて、へい三錢五厘でふいます、オヤ又代を置いて往ッて仕舞ッた、又五厘、サア始めのはどは賣れたけれども、高いものじやから仕舞には、ね客も段々と減ッて來た折角溜めた錢はと思へば、俵れが悪くッて每晚賣溜を持出す、トローく賣れなくなッて店を仕舞い、夜逃げ全様に引越して往ッて仕舞ッた、ドーじや些しばかりはよいはといふので、世間で賣る相場よりも何時でも少しッ、高く賣ッた其報でトローく店をたゝむといふ始末じや、

昔し支那の平林といふところに、至極まづしい男があつた、其名を崔恭と呼びて妻も子供もなく、何を仕たからと言ッて誰れも小言をいふ人はない、時に盜賊の一群れが飛び込んで宿を借せといふ、崔恭流石に悪い人でもないから、盜賊に宿は借せ

ぬと申して断然と謝絶いたした、スルと盜賊どもは金を出して、ドーだ崔恭、是から一月の價何程と極めて、我々どもに宿を借せば、其方は遊んで喰ッて居らるゝではないか、さうじや、一ツ相談に乗ッて呉れぬか、さうじやくと賣めるから、何にも自分が出で盜賊を働らくでないから、左程罪みもあるまいと觀念して、盜賊のいふ通り一月何程と定めて、毎晩どめることを約束した、約束が出来るといふと其晩から盜賊の宿じや、けれども盜賊の方だからとて、見付けられては大變じやから成る丈け静かにして、成る丈け泊らぬやうにする、崔恭は能いことに思ッて、來なかつたりして格別騒がしくもないのを、結局よろこんで宿をして居た、今日は或る人が尋ねて見ぬて、ドーじやい崔恭さん、此頃は遊んで居ます、へい其様でふいます居なさるな、イヤなんにも仕ませんで、近頃は遊んで居ます、へい其様でふいますか、斯様な鹽梅に何の氣もなく、平氣で噺して居ると尋ねて來た男、懐から繩を出して、ヤイ崔恭、御用だぞ、尋常に繩にかゝれ、ヲヤ私しは繩にかゝる覺えはないが、イヤないとは言はさぬ、昨夜召捕た盜賊は、汝が家を宿として、民家を惱ま

し居つたること、逐一白狀に及んで居るは、サア尋常に繩にかゝり覺がなくなれば往くところへ往つて、勝手に愚癡を並べ居らふと、引つ縛つて連れて往いて仕舞つた、サア茲たて、ナニ是位のこととは、自分勝手に定めを付けて、罪にもなるまいと思つたのが、見すゝ今は戒しめ繩じや、だから些細なところへ心を付けて、少しも造悪をせぬがよろしい、實に惡の報を感得せざるにはあらずじやらふ。

第八席

(修證義第七節 滅罪第七節)

佛祖憐みのあまり廣大の慈門を開き置けり是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり人天誰か入らざらん彼の三時の惡業報必ず感ずべしと雖も懺悔するが如きは重さを轉じて輕受せしむ又滅罪清淨ならしむるなり

扱今晚はいよゝ懺悔滅罪のお断しで、是れからが吾が曹洞宗専門の断しと相成るので、即ち前の第一章は六節ともに皆な餘宗にも談ずるところじや、此章からは吾宗特有の断しであつて、これを發心門とも名づくるのじや、先づ第一章で因果の道理も能く分り、三世の断しも能く知れて見れば、如何に邪思惟したからとて

業報は通れ得べきものでないといふことは知れたであらふ、佛名經に佛舍利弗に告げて言はく、若し善男子善女人、阿耨菩提を求むるものは、當に先づ一切の衆罪を懺悔すべしと、即ち是の御贊題の御文は懺悔滅罪の御垂示であつて、衆罪とて諸の罪を懺悔すべしといふのじや、受戒入位の土臺を固めるのじや、思ひ思ふて見れば我れゝ銘々其が無始劫來造り重ねた罪は、何程であるやら、丈けも高さも分りはしない、今は僅かに宿善の助くるに依りて受け難き人身を受けられたれども、生れて以來も又何時といふことなく知らずゝに造りたる罪も多からん、斯の如き罪業をして、現世に滅し盡くさずんば、來世來々世又は百劫を経るの後に於ても、必らず受くるに違ひない、穴れろろしやとの考へが起りにやならぬ、今にもあれ何様なものに顯はれ來るか知れん、實に恐ろしいではありませんか、然るに其罪を消滅させる工夫は、種々様々にありますけれども、吾宗は素より教外別傳といふ看板をかけて居るのぢやから、格別六ヶ敷いことではない、高が人間のすることじやから、人間に出來ぬことは仰せられぬ、御垂示に宣はく、佛祖憐みの餘り、廣大の慈門を開き

置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり、人天誰れか入らざらんと、廣大には豎に三世を貫ぬき、横に十方に涉りて三千大千世界、如何なるところといへども此廣大に洩るゝところは無い、近頃では時間空間などいふ言葉が流行て、誰れも彼れも言ふやうじやが、矢張り豎を時間と名づけ、横を空間といふて廣大の意味じや、テ廣大の慈門を開きて大層に大きな門を開いて、サア此門から運入れと、れ示しじや、這入つて見ると此奥の御殿は又、何様なに大きいか分らない、シテ其御殿に住まつて見ると、格別樂みなこともなく、格別悲しいこともない、始めより此門内に居たのじやけれども、それを知らないものじやから、開いた此門は佛祖の御情けであつて、我れく其のやうな罪業の深いものを、酷く憐れみたまふたのじやサア門を開けたから一切衆生、生とし生けるものは馬でも牛でも猫でも杓子でも、何でも構はぬから遠慮なく来いよ、斯く佛けのれ慈悲のかゝらぬものは、一つとしてないけれども、別けて人天のどもがらは尙ほ来いよじや、ナセ其様いふかといふに、人間天上のものでなければ、先づ入ることが六ヶ敷い、夫れから又斯様な廣大

な慈門を推しあけて、入つて来る衆生を何様なさるかといへば、彼の三時の惡業報必らず感すべしと雖ども、懺悔するが如きは重さを轉じて輕受せしむ、世の中の生とし生けるもの、皆三時の業報は必らず感するけれども、若し能く眞實に懺悔したことなら、即ち此慈門に入り來つて、決して出づることなく、此慈門の中に攝取せられたまふ、眞實誠心を起し來りて、ア、惡るうふりましたと懺悔する時に於ては、假令ひ邪思惟を以て通れんとしても決して遣げ隠るゝところなく、何時か一度は業報といふ役人に取ツ握まつて、苦惱を受けねばならぬ身でも、其苦惱は輕ろくして取らすべし、十貫目の罪ならば減刑して二貫目の處ろへ轉じて遣る、眞實誠心懺悔せよ、合點が往たかどの御垂示じや、夫れから茲に有難いれ言葉は又滅罪清淨ならしむるなりとありて、罪を輕ろくして遣ることもやるが、夫よりかいつそのこと、滅罪清淨ならしめてやらふ、斯やうな有難いお言葉じや、扱懺悔の力は大層なもので、如何なる意味があるかといへば、懺悔は梵語の懺摩といふのを支那の言葉に譯するとさば悔過と相成る其懺摩の懺の字と悔過の悔の字とをとりて今は懺悔と

云ふてある申さば自身の從來の罪過を知りて至心に悔過する限りは、モー決して悪
 ることは致しませんが、善業なりとか、又天竺の懺摩といふのは忍といふ意味を
 含んで居るので、謂ゆる出来難いことであるが忍へて下さいとか堪忍して下さいと
 か申す義にもなるのか、去ればにや金剛經には、先世の罪業ありて應に惡道に墮す
 べきに、今世の人に輕賤せらるゝを以て、先世の罪業を消滅して、當さに阿耨多羅
 三藐三菩提を得べしとあり、即ち他のものに輕賤と輕ろしめ賤やしめらるゝとも
 賤ることなく怨むことなく、憎いと思はず辛いと思はず、己れが先世の罪業を知り
 て益々懺悔するに由りて、來世來々世に受くべき、惡道の業報を現世に輕受して
 消滅せしむるの謂なるべし、且は滅罪清淨ならしむるなり、個様に御垂示下さるゝ
 のも、罪の性は不可得なるを言ふので、慧可大師の僧璨大師に教えたまふ問答あり
 旁た清淨ならしむるとは、朝日に霜の解けるやうな懺悔であるのじや、僧璨大師慧
 可大師に問ふて曰く、弟子身風恙に懺はさる請ふ和尚罪を懺したまへと慧可大師曰
 く、罪を持ち來れ汝が爲めに懺せんと、時に僧璨大師良久しく思惟して云く、罪と

覓ひるに不可得なりと、慧可大師曰く我れ汝が爲めに罪を懺し畢ぬと僧璨大師大悟
 して曰く今日初めて知る、罪性内にあらず外にあらず中間にあらざることをと、是
 れ罪を滅して清淨ならしめたる趣ひきではないか、兎も角、懺悔の功德は廣大なも
 ので、懺悔の一念眞實に起るときは、重きを轉じて輕ろくなし、苦惱も少しは減る
 めて遣る、其様な手ぬるいことではなく、直ちに滅罪清淨と奇麗さつぱりとしてや
 るのじやとは、何と有難い仰せじやないか、
 譬へば貧人が主人の金を掠めて置いて、懺悔して白狀に及ぶやうなものじや、或る
 日主人が先祖の命日を營むとて、此金の包みを以て、お寺へ往つてお経を讀んで貰
 つて來いと言ひ付けた、スルと其男はハイと畏こまつて包みを以て出て往つたが、
 只見れば布團屋の前に通りかゝつた、見ると其布團が欲しくて堪らない、エ、儘よ
 此金で布團を買つて、寒い目を仕てゐる、父に着せて上げやう、お寺へ往つてお経
 を讀んで貰つたといふて、主人の前をつくるひは、何もいさくさのない嘸じや、オ
 オろろじやと度胸を握りて、ト、ト、ト、布團を買つて仕舞ひ、我が物顔して父の前へ

持つて往き、お父さん、あんまり夜るの物が垢ついたやうじやから、主人から御祝儀に貰つた金で、一枚新調して來ましたから、是れと着替へて下さいまし、是れは澤山綿が通入て居て、至極めた、かいやうにれもひますから、煎餅のやうな其布團は、洗濯でも仕てあげますから、ううしたら重ねてかけてれ休みなさるがよろしい此頃の雪空では無寒かつたでういませう、ナニ疾に風を引いて、ソレは定めてれ困りでせう、あなたを一人で置き申しては、私しも御不自由かと思つて、寝ても安くと寝られませんが、モ一來年で年が明きますから、モ少しの辛抱でういます、何卒を忍んで居て下さいまし、直きにね樂をさせますから、オ、そうか、若いのに能く浪費つかはずに、親孝行をして呉れる、感心なことじや、其やうに堅いれ前じやから、何んにも案じることはないが、若しや万が一氣が狂つて、吉原へでも往くといふと、悪敷病に病み付て碌なことはない、那の石川五右衛門の狂言で言ふことじやが、始めといふは些細なこと、色くるい小博奕の、つばりを合はす筆の先、後は手先が働いて、主親の物他人の物、二人の味方、止めうと言ふて止めら

れすと、懺悔啼しをするやうなもので、さうも吉原はいかぬところじや、氣を付て下されや、決して悪いことはせぬやうに、主人大事に店を大事に信實に勤めて呉れ頼んだぞ、ハイ能く承知して居ります、又其中にお尋ね申します、今日はまだ用事もあるから、先づお大事になされませと、茲は甘く胡摩化したが、父の教訓もあるし又、いよく悪いことをしたと思つたら、サア安い心持はない、去ればといふて宅へ歸つて、實は是れくの次第であれば、一先づ布團を歸して上されと、父の前に言つたらば、父の悲しみは如何ばかり、其様なことをするのも能でもない、色々々に考へたが、扱よい工夫も出て來んから、一つ道を往つたり來たり、ますく考へを凝らして居る、イヤ筆を主人に白狀をして、給金で取つて貰ふとすれば、勘辨して呉れまいものでもない、度胸を据へて歸つて行き、主人の前に据り込めば、主人は少しも知らないから、イカイ苦勞であつた、サアお齋も勝手に出來て居るか、供養に付いてやつて呉れなど、禮を向ふから言はるゝに依て、尙更白狀し兼ねて居たが、やつこのことでありし次第を逐一白狀に及んで仕舞つて、身を投げ出

して詫び入つて居る、主人は且つ瞋り且つ感心して、是から悪むいことをせぬといふなら、今度は始めてのことでもあり、殊に悪むいといふことを悔いて、白状もしたものだから、今度限りゆるしてやる、布團の金はお前に呉れて仕舞ふから、其様なことを何とも思はぬがよろしい、其代り今一度改めて寺へ往つて呉れ、頼んだぞよ、ト、ゆるされて仕舞つた、懺悔の徳は斯やうなもので、大した効能のあるものじや、

昔し梁の都に宣武寺といふ寺がありました、住職法龍は馮、南陽の人にあたして、年三十八の時は、正勝寺の法願道人の許に至りしが、道人能く奨許の相學に通じまして、寵を見て言ひますには、君年滿らて當に死して、避くべきの處なかるべし、唯誠心諸佛に祈りて先罪を懺悔せば、排脱することが出来ませうと、言はれたから龍は早速鏡を取つて面を見ると黒氣を帯びて二タ目と見られぬ有様じや、是に於て衣鉢を賣り飛して閑房に居住して、禮懺ひとへに勤めました、四十歳の暮の夕べに至りて、兩耳の腫れて痛むことを覺えた、怖恐怖を生じて其夜の懺悔は四更

にまで相成つた、戸外に人ありていふには、君が死業己に盡さぬと、俄かに戸を開いて見れば何にもない、明朝人に就て聞て見ると昔黒氣は取れたといふ、是れ全く懺悔の力に依りて、故さらに壽を延すことを得たるのである、普通五年三月十六日、所住に死んだと梁の高僧傳に書てあるか、懺悔の力は實に大層なもので、死業さへも延すことが出来るじや、

第九席

(修証義第八卷 滅罪第八節)

然あれは誠心を専らにして前佛に懺悔すへし恚麼するときは前佛懺悔の功德力我れを救ひて清淨ならしむ此功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり淨信一現するるとき自他同じく轉せらるゝなり其利益普ねく情非情に蒙ひらしむ

此八節の御發題の御文の趣を案じまするに、懺悔の力能く滅罪清淨ならしむるといふので、自分ばかりか奇麗潔白盡虚空雲のないやうになるのみでなく、其功德はあらゆる有情非情にまで蒙むるといふ御教訓であるので、前席に申しました通り、懺悔の力は大層なものじやが、かやうに懺悔せねばならぬといふ、無始劫來の罪み過

を、造り重り重ねた奴は何かといへば、身と口と意との三つの業々に相違ない、
 から三業相應して、三ツが頭を擡めて、悪るかつた堪忍して下されと申さばや
 らぬけれども、其初めは何ものが先きに立つて悪るいことをやらせたかといへば、
 本は心ろに違ひない、ソコで今懺悔するには此心が先きにたつより外に仕方がない
 から身と口との總代になつて、餘所目もふらず専らに一筋に、眞實偽りのない
 ころを發露して、前佛とて過去久遠十方三世の諸佛を始り、生々世々の諸佛に誓
 て、是からは悪るいことを致しませんと懺悔するのじや、恣麼とは支那の俗語で此
 の如くといふことになるか、即ち此の如く前佛に過まり入るときは、其前佛に懺
 悔の功德力で、我れと我が自身を拯ひあげて、清淨秋天に明月を懸けたるが如くな
 らしむ、ゆゑに華嚴經には、我れ今悉く清淨の三業を以て法界極微塵の一切
 諸佛の前に申す、誠心に懺して後は復た造らすと、斯様に諸佛に誓つて眞實過まら
 ぬ懺悔することなら、二度と悪るいことは出来やう筈はないのであるが、若しも破つ
 たら大變だ、ソコで人前懺悔なせ申して、小業なせにては人の前で懺悔させること

があるが、是れは考へて見ると至極面白い王夫とや、オセかといふと人間ならば
 貴公は今確かに二度としないと言つた、嘘ではなからふな、好しく承知じや、其
 替り二たび悪るいことをしたならば、大勢が寄つて集つて、首と鬘との生か別れだ
 ど、ハイ畏こまりました決して二度とはやりません、若しやつたら其時には、如何
 様になされても宜しういいますなと、まさか個様なこともあるまいが、若しも人
 間が人間に誓つて、見らるゝ前で耻ぢ入つた事を並べて、ううして置いて二度と違
 つたら、其時には人に笑はれる、何だあれはどに人の前で、過まり閉口した癖にと
 去りながら破戒の僧なせいふものある世の中だから、何ぼ口でばかり過まつたから
 とて、ホンの御儀式では何んにもならぬ、我宗懺悔の仕方と言つたら、何でも空は
 づかしきことを、人の前で言つて仕舞へ、白狀に及んでしまへなと、決して其様
 なことは言はぬ代りに、身と口との總代では決して對面も叶はぬのじや、誠意誠心
 眞底から罪を悔んで、出て来た總代の心ろでなければ、何んにもならぬと勿付ける
 のじや、ソウヒやらふがな、佛け様は見て居でなくつても、三世十方見透しのれ

眼こじやから、我れ一人間が、悪いことを爲るか爲ないか、眞實わやまつたかき
うだか、ソソなことば疾に御存じで、あやまつてさへ来たことなら、何様な世話で
もしてやるが、啞なら其方の自業自得だ、勝手なところへ勝手にゆけ、シヤがこん
な大きな慈門が開けてある、サアどうじやとあるから、第一節からのね離して、略
ぼ道理が知れて居るから、悪るかつたと眞實にあやまつて、いきなり慈門へ這入つ
て見ると、オ、懺悔して来たか、其懺悔の功德能く無礙の淨信精進を生長せしむる
なり、斯やうにれ替め辞ばと共に無礙の淨信精進を生長せしむるなりと、あも難い
御垂示じや、扱この無礙の淨信精進を生長せしむるとは、無礙とは般若心經なきに
も無礙礙とありて、万事万物、一切一ツとして差し障りのないことじや、又淨信と
は清淨な信心と申こと、精進とは目差した見のまでは、日が暮れやうが夜が明けや
うが、扱は來年來々十年二十年かゝらふが、必らず行きついで見せるといふ、開
ゆる勇猛精進など、つゝく字で、決して魚を喰はぬの精進揚じやのといふ様なもの
でない、夫れで無礙の淨信精進を生長せしむるとは、抑も發心修行菩提道果は、路

本修證の順序であるから、一たび菩提心を發して要路に修證するときは、其功德は
必らず修行を成就せしむるに仰せで、而も懺悔の功德によりて、是から先きの
の徳を顯はす趣ひとを指示し下なるので、惡ることせまいと誓はりたるか直る
に三歸戒ともなり三聚淨戒ともなり十重禁戒ともなるのであるから、悪いことはせ
まいといふ心が實に清淨無垢の信心なのじや、此無垢の心を以て佛に懺悔し、も
るゝの罪を霜の慧日にゆふが如くサツパリと消除して、奇麗潔白なる此懺悔の
功德は、法界を盡して清淨ならしむ、左れば罪といふ罪過といふ過、其性いつれに
か見認めませう、此のやうに潔白な奇麗な淨信が起りて精進して諸善を奉行すれば
已れ一人が重きを轉じて輕受につき、又清淨ならしむるばかりでなく、他の有情非
情生としいけるもの、大千世界の衆生共が、皆此懺悔の力によりて、其利益を蒙り
るのじやから、實に大層なことである、何のことはない酒呑ぬものが佛を見て佛に
と同じことじや、一つの佛が三千世界の衆生が佛に、有難い道理もあればあるもの
じや、

譬へてみれば日輪のやうなものじや、彼れ太陽何時の頃よりか光りを放つて生れ、
 自からは元と光る身体を爲して居るに依りて、左して諸の世界の爲め、即ち地
 球とか金星とか水星とか、または土星とか天王星とか、海王星なさいふもろくの
 世界の爲めに、光りを與へてやらうなとの考へはなければも、其もろくの世界は
 此太陽の光りを受けて、衆の有情非情を養ふて居るのじや、其中のもろく
 の有情非情は矢張り我々の此世界の如く、六道もあらふし又もろくの罪業を辨ら
 ぬて居るであらふ、憂ひ辛いで暮らして居るもあらふし、天上の樂を爲して居る
 もあらふ、十方三世の諸佛菩薩も、定めて御濟度に忙がしいであらふ、此もろく
 の世界の中の有情非情、一つとして此太陽の光りに遇はぬものはないやうな次第で
 一人の懺悔の力は能くあまねく情非情に蒙ひるものなるべし、扱は又一人の心ろの
 中に悲しいこと苦しいことの種があれば眼境にふるゝ限り、思ひのおよぶ限りのも
 のは、其人の爲めに皆な悲しくなる道理で、櫻がなほ奇麗に咲たからとて、梅
 がいかに香しき匂ひを放つたからとて、松の緑が好い艶をもつても竹の節が順をよ

く出来て居ても、月の光が皎々として隈なく澄めども、清風が江上から送つて來て
 も、築山が何様に奇麗でも、泉水が何様なに奇麗でも、其人の爲めには皆な悲しい
 高青邱といふ人の詩に、朝たに吟して其愁れいを忘れ、夕べに吟じて其愁れを忘れ、
 其苦吟の時にあたつては、兀々として醉を被ひるがごとく、兒泣けども憐れみを知
 らず、客到れども迎ふるを果さず、頭髮櫛げつるに暇あらず、綺氏の富を思はず
 回也の虚しさを思はず、斯様に並べたつて悲しがる次第じやが、此時の心の中には
 王侯の位地も面白くなければ、金銀財寶を欲しくもないので、只く悲しい苦しい
 ものばかりじやが、此心ろが一つひつくりかへると、サアそれが目出度い境界にな
 りて櫻らを見ても梅を見ても、乃至末枯れの野原を見ても、秋は淋しくわれを淋し
 さまが、寂て面白く冬は多で雪の朝たの銀世界、酒も甘く香めて來る、草木國土
 悉皆が、皆な其人の爲めに大光明を放つて來る、ソコテ有情非情までが、懺悔の功
 徳をうくることになるので、心に微塵ばかりも曇りがなく、明朝々として來た眼こ
 で、三千世界を見渡したらば、見らるゝものも活々として來る、サから懺悔の功徳

は佛眼でも見ることが出来ない、何ぞ況んや魔道のやからに、決して伺ひ知られうや、大層ことじや、

昔し唐の禮足といふ人、痛く先非を後悔して、佛前に到りて懺悔していふには、我今無始以來作るどころの罪業を發露します、或ひは君親及び真人羅漢を殺害したり兵火征討して鋒刃殺戮したり、禽獸を遊獵したり虫魚を網捕したり、或ひは惡王になりて刑罰を濫用したり、凡る諸の生類殘害殺傷しました上に、或ひは佛物法物僧物を盗み、或ひは已れが室家にわらずして媼穢を行ふたり、妄りに妬忌して憎を起し、鬼神に托して世俗を詭誑したり譏陷兩舌惡言を以て君臣を阻隔し、善を説て惡となし臭を以て香となし白を説て黒となして人を調弄したり、性瞋忿多く正理を知らず、邪見に迷惑して三寶を謗りもし、因果なしと説きて、善を修して人天の樂しみを受くることを信せず、惡を爲して地獄に陥ることを信せず、或ひは此身無因にして得たりと謂ひ、塔寺を毀ぼち經典を燒き佛像を融割して金銅を取り、伽藍を汚し禁戒に違ひ、或ひは酒を呑み肉を喰ひ、愚痴邪見に至らざるどころなく、惡として

造らざることをなし自から作りて他に教ぬ、爲すを見て隨喜したり、能く衆生をして地獄畜生、餓鬼に墮せしめたり、若し人間に生れては短命多病にして常に卑賤に處し、及び貧窮なるを以て人と共に財を有して自在なることを得ず、婦は良謹ならず二妻相諍ひ、多く謗りを被り人に誑惑せらる、有ゆる眷屬弊惡破壞、好語にあふことなく常に惡聲を聞く、凡る陳ぶるところの説は常に訴訟となる、假令ひ眞言を説くとも人信じて受けず、音辭を吐露して又辨正ならず、財を貪さはりて厭くことなく、求むるところを獲ずして、常に他人に其長短を伺がはれ、不善と知識と共に相ひ惱害し、常に邪見の家に生し常に詭曲の心を懷かしむ、無始已來の惡業皆な煩惱邪見に従つて生ず、佛性正見の方に依つて故さらに發露懺悔す、四重五逆の煩惱の濁水をして皆な澄清ならしめたまへ、今の身より成佛に至るまで、願くは更らに此等の諸罪を造らじと、斯く懺悔を爲さるゝといふと、寺僧禮足を禮拜して歡喜踊躍していふには、卿今懺悔されたる時、佛前光明赫灼たりしといへば、空中俄かに音樂の響ありしといふ、ドーじや懺悔の功德はありがたいものではないか、

第拾席

(修証義第九卷 滅罪第九節)

其大旨は願はくは我れ設ひ過去の悪業多く重なりて障道の因縁ありとも佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖我を感みて業累を解脱せしめ學道障り無からしめ其功德法門普ねく無盡法界に充滿彌綸せらん哀みを我れに分布すべし佛祖の往昔は吾等なり吾等か當來は佛祖ならん

是れは前節に引續いて、矢張り懺悔の事を示し下さるゝ御文じやが、只聞となれない言葉が二つあるので餘程に嘯しが致しにくいが、ツマリ此御誓題は發願文といふので、意味さへね断し申せば、夫れて分るのじやから、ドーでもよいやうなものじやが、扱せりし、又はせらんなどの言葉は困る、誠に分にすぎたことを申すやうで、高祖大師に申し譯もないやうな次第じや、一寸せらん、せりしを、極めて置ませう、せりしはしてありしと定め、せらんをしてあらんと定め、シテ拜讀いたして見ると佛道に因りて得道してありしとなり、普ねく無盡法界に充滿彌綸してあらんとする、是れで分ることに相成るのじや、願はくは我れたとひ過去の悪

業多く重なりて障道の因縁ありとも佛道に因りて得道してありし諸佛諸祖、我を感みて業累を解脱せしめ、學道障りなからしめ、其功德法門普ねく無盡法界に充滿彌綸してあらん、哀みを我れに分布すべし、是れで拜讀にも都合がよい、扱この發願文は前節懺悔に引き來りて前來の意を承けしものであつて今我れ過去と過ぎ去つて跡形もない時に、種々様々な悪業が作つてあつて、佛法の悟りを開くことが出来ないやうに多く造りためた罪、山よりも高からふし、海よりも深いてあらふ、此の爲めに妙道に入られないやうな因縁が澤山じやが、あなたさま方は凡夫の我々と違つて、既に一大事因縁、謂ゆる生を明らめ死を明らめ、妙道開示のために、此世に出現ましゝて、其妙道に依りて今我々か佛道を修行するやうに、修行を積ませられて疾に得道遊はされてある諸佛諸祖方、其御方々であるのじやから、我れゝか妙道に入りたいと願を發し、個様に無始已來の罪業を消除せんといたして、斯く懺悔致しますに依つて、既に得道遊はされてあるお力を以て、何卒御冥助遊はされて、罪業も煩累も解脱させて下さい、何卒佛法に入るべき障りとなる従前の罪といふ罪

過といふ過は、皆な取消しに相成るやうに、御冥助なされて下さりませ、何卒速やかに受戒入位の出来るやうにお守りなされて下さりませ、勿論あなたのお手許には發願行持の出来るやうに又其發願行持から、願はれて来る功德法門、あまねく無盡法界の、數かさりもない世界中に充ち満ちて、行き渡つて居りませうから哀みを分ち與へて下され、何卒お守り下され御冥助下され、何卒おはれみを垂れたまへ何卒感應道交して憐れみたまへ助けたまへ、斯やうに發願して感れみを請ふのじや、素より佛げ様のことじやから、感れみを垂れて下さるは勿論、じやから廣大な慈門といふものを常開きにして、何時でも来いよ時は嫌はぬ、何時何日でなければね目にはか、れぬとか、今日は都合かわるいから明日来て呉れとか、又は近距離旅行新年欠禮などいふて、旅行もせずに奥座敷に引籠つて、留守を使つて逢はすに居るとか、イヤ今日は病氣じやから謝絶するの、イヤ明日は客をするから御免を願ひるのど、そんなことをいふて五月纏がらる、やうな、諸佛方は決してない、お出なはるは何時でも構はないとて、常開きの慈門を押し立てあるのじやもの、嘘となき仰せて

堪るものか、此方で嘘をつかぬやうにするがよい、佛は眞語者だぞへ、又實語者だぞへ、嘘をついては佛でない、嘘をつかぬから佛げなのじや、常開きの慈門を立てたは、何時でも居るといふ證據じや、此請合なら拙僧印紙何枚も貼つて受け合ふ決して猶豫は致さぬ、此慈門から割出して、先づ我々は這入つて見たじや、這入つて見ると成ほど廣大慈門であつて、御殿の構へが盡十方法界と大層な構へで、其中には盡十方法界の諸佛諸祖が、何れも何やら忙かしううに、一人も遊んで居らる方はない、夫れで逢つて呉れる佛げ様は誰れかと思へば、那の佛げ様もく、撰りさらひなく逢つて下さる、夫れで御様子を閉て見ると、イヤそれじや、ト一から持ち草臥て居つたのじや、うういふことなら早速懺悔の願文を認める、偽りを書くな個様に書くじやと、手を取つて教へて下さる、此方に些つとも世話がない、世話はないが、書たものは大層なことだ厭といふほど感れみ並べた揚句に、チト利屈ッボク書いてある拜讀すれば左の如じや、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん、斯やうに理屈めいて居るが、感應道交の有様から實に斯様な次第である、夫

れも此方での考へではなく、皆佛けさまのれ見透しじや、其見透しの御了簡で、教えて下さるれ言葉じやから、決して虚言ではないのであるが、今懺悔したがりもなく、眞實誠心に哀愍を乞ふのじやから、是から淨信に精進してゆく時は、當來は佛祖なること、決して疑がひのないところじや、故に佛祖の往昔は吾等なり吾等が當來は佛祖ならん、あなたも昔しは吾等のやうなものであつたから、吾等も是れから修行をしたら、當來には佛祖である、之を佛け様の方かられつしやれば、梵網經の中に、汝は是れ當成の佛なり、我れは是れ已成の佛なり、此の如き信を作せば、戒品既に具足すとある、何方にしても疑がひはない、我々は是れから、陀度佛けと団体になるのじやと、能く信じて疑がひぬ心が、直ちに戒法となるのであるから、戒品既に具足すとあるのじや、何にしてもハヤ有難いことじや

譬へて見れば十露盤珠を弾くやうなもので、佛祖のれ垂示は二一天作の五とチャンと出來で法則通りじやが、我等の凡夫がする仕事は二一天作の八になつたり九になつたりするものじやから、ドーも違ひが出來てならん、やうやく天作の五を學んで

五になつて來たのが、此發心懺悔門じや、發心懺悔したから、今度は八算とか見一に進んで、受戒入位をなし、是れか濟んだら開立開平と進んで發願利生となり、ソレから向ふは算木で使ふやうになつて算術の看板かけて飯を喰ふやうになつた姿が行持報恩といふやうなものじや、今は發心門で極々初まりの算術家じやから、ドー心配しても二一天作の八が耳に付いて居つて、中々其癖せが取れないから、専心精進して五といふことを覺たいと思つて、是が非でも算術家にならんじや盃かんと心ろがけ、二一天作の八といふとはドーしてもうらじやドーしても違つて居る、これを忘れて仕舞んければならぬことじやと、發願文認めて、算術家で世を渡る支度をするのじや、何とこのやうなものではないか、

昔し支那の長安といふところに桑親といへる人あり、律師を招して罪を思ふて懺悔していふには、自から我が生死を惟みるに、過去に初際なく乃至今生に於ても相續して斷絶することがない、愚痴暗昧なるがゆゑに三毒の火常に燃えて、身と心ろとありといへども而も自から悟ることができない、徒づらに一切佛の智慧の日光を放

ちよ、我が此の二種の身を照らしたまふことを蒙るべし、亦た是れも今に知
 覺することがない、惑をいだきて諸ろくの悪趣に生じ、類として更へすといふこ
 ともない、諸らかに此因縁をれもふに誰れか已れの眷属にあらざるか、又もろく
 の衆生をれもふに元と同じく一心の海である、妄想の亂浪によりて、諸趣の身を幻
 起したのじや、是身も種々なく我れと同じ性である失念に依るかゆるるに彼我の分別
 が生じて来る、これによりて愛憎を起したり、常に其間かひあふて日夜に嫌はれ恨
 まれたり、報ひの及ばんことを思ひ念ふて遂には衆生の中に於て、一として傷つけ
 害せずといふことがない、資生食はり奪つて分にあらすして樂欲をれこしたり、虚
 言ばかり談して眞語を言へしことない、悪口して言葉を選んだこともなく、兩舌つ
 かよては人の仰を破つたり、綺語をなしては人を調弄して見たり、貪ばりくつてあ
 き足ることを知らず、瞋が燃えては又た燃えて止む時がなく、邪見をなしては正し
 さ教えにうじき、詭曲しては人に誠を失なひ、諸佛菩薩の一切の清淨戒に違犯して
 みたり、嫌恨と愛憎の爲めに心苦しむることがない、是の罪が若しも懺

悔せずして長夜自心に善い業を積んでやまざる時は、焚いて地獄の處ろ及び諸ろ
 くの苦の具とならん、諸佛祖との時に於ては善い教ふこと能はざらん、只今自か
 ら造くるどころのもろくの憊咎を發露して、佛菩薩の御意に應じ、本淨の性に隨
 順することを願ひます、無始の時の無明も此れより漸やく微ならんか、是のゆゑに
 懺悔をいたさて、深く心に諸ろく罪を忘れ、眞實懺悔におもひます、願はくは佛
 よ、慈光を放ちたまへて、みな悉く消滅せしめたまへ、自性清淨心、是れより
 究竟に至りまして、平等眞の法界を圓滿ならしめたまへと、至心に懺悔し了りまし
 て、歡喜の涙たを流されますと、側はらに聞て居りましたる其妻女の姜氏と申すが
 夫の滅罪懺悔をよろこひ、是れも夫に談りまして律師の御弟子となり、罪を悔ひて
 髮を断ち、佛法をよろこびたりといふ、一人懺悔の功德によりて共妻も亦た利益を
 蒙る、是等の人をばみな、當來の佛祖たるべきなり、

第拾壹席

(修証義第貳章 懺悔 滅罪第拾節)

我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋痴從身口意之所生一切我今盡懺悔是の如く懺悔すれ

は必らず佛祖の冥加あるなり心念身儀發露白佛すべし發露の力罪根をして銷滅せしむるなり

いよく今晩の御齋題が、第十節にあたりまして、いよく發願の本文じや、是れで懺悔門は結局である、扱前から申す通り、ア、已れは徒らものであつた、ア悪るかつたと懺悔する儀式のね断しじや、儀式じやからと申したところで、何も格別に六ヶ敷いことばないのじや、尤も儀式の工合は色々ある様子じやが、其やうな小面倒なことは餘門他宗のことで、大乘小乗の相違もあるだらふ、諸宗各派の所傳もあらふ、または作法懺觀相懺觀無生の懺悔とやら、古道具も宜しくと申すは並べたてたところで、肝要な求むべきものはタツた一ツじや、それは何じやと尋ねて見ると淨淨なされいな、誠心が一ツである、若し敷へて言ふたなら心念身儀發露白佛の三ツになる、ア、已れは悪かつたと眞實に起るのが一ツの懺悔、三世諸佛の佛名を禮拜する加行中の合掌恭敬、身に行ふところのものが二ツの懺悔、無始劫來造り重ねたところの惡業を一々佛様に申し上げて、是からは陀度惡事を致しませぬと白狀す

るのが三ツの懺悔、是等はみな眞實誠心の一ツから出て来るのじやから、誠に眞實心の懺悔の力は廣大無量のものじや、此眞實誠心が我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋痴從身口意之所生一切我今皆懺悔と、佛に様に申上げるのじやから、佛に様も打捨置なく、不惑なものや可愛の信者よ、よくア眞實に懺悔した、ソレでこそ當來の佛祖なれど、喜ばせたまふなり、此四句の偈文を唱ふるを、吾宗先佛の護持したまふところとなして、只音讀すれば足るのであるから、別に六ヶ敷ではないのじやシテ我昔所造諸惡業、是れは申すまでもなく、過去久遠以來、造りためたる罪といふことじや、皆由無始貪瞋痴、其つくりためた罪といふのは、皆な無始の貪瞋痴に由れり、無始の貪瞋痴の爲めに作りなしたことである、無始とは始めがないと書くから何時が始めやら分らぬ。分らぬのではない眞實始めがないのじや、分りやすくいふて見れば、近來幾何學といふものが流行じやが、此道の人達は無始ぐらゐなことば能く知つて居つて、オ、佛敎にも無始といふことがあるか、夫れは始めて聞いたが、デは佛敎が本家なのかなと、聞て驚いて居るやからもあるが、先づ竹の筒

を運かけに切つて御覽なさい、拋物線も出来るし又、隋圓線も出来るだらふし尙ほ環線も出来るだらふ、是から點を打つて見よ、其點が右へでも左へでも少しも動いて見よ、ソレが即ち直線となる、サア出来上つたら能く見えて見たまへ、即ち其線は何れも無始無終だらふ、又點も無始無終たらふ拋物線は石を取つて投げたやうな線で、先きの方が切れて居るから、其先に目を付けて、茲が始めしやないかなと、幼稚な考へを起す人もあらふが、其切れて居る二つの先は何方か始めて何方か終りた、左か右か、但しは右が始めで左が終りか、既に夫ればかりでも答へに苦しむたらふ、其様なことではない、其線の先が何處までも長い、虚空はどの位広いものか、果があるものかないものか、其邊の晰しならば、少しは直打もあるけれど、其何處迄長いか分らぬ線を、已れの軌道としてあるいて居る慧星もあるし、又墮圓形に廻つて居る慧星もあるし、又は環なりに廻つて居る慧星もある、テ拋物線を歩行て居る慧星は、一度来て顔を見せて、ハイ左様ならと往つた切り歸つて来ない、何億年たつても来ぬ環なりに廻つて居るのや隋圓なりの軌道を歩行て居るのは

環の亦太陽の如何にまゝの、何事かには度つては必らず来る、日界や寺尾博士の演説を聞いたことがあつたが、光線は最も早いもので一分間五万里は走むる割合だところだが、目に見ゆる星の中にもゾーと奥に居る星の光りか、此地球まで届くには三万年経ねば来ないといふ、ドーデス大きなものじやありませんか、夫れに始めに申した拋物線の慧星などはドーでせう、何處まで居て虚空となるやら、何處で往生をさするやら、太陽が何億年とか何万年とかいふ前に出来て居て、夫れて今日まで死なぬところを見ては、慧星も矢鱈に崩れるものでない、お負けに其歩行き方といつたら、外の星よりも早いものだから、自分の光りが尾になつて居る、それから又點を打つたやうに動かぬ星もあれば、直線を歩行く星もある、是れはお晰しが横道へ運入つて仕舞つた、兎に角何れも無始無終じや、シテ又世界は恒河沙も世ならずといふ撞梅でいくらあるか、分らぬ上に其廣さ加減の大きいには驚ろくでせう、又無始のお晰しも分りましたら、ツンデ今度は無始のお晰しにいついてある實際幾といふことだか、是れは前にいふたやうな氣もする尙ほ念の爲り申しますれば、實

とらふてムサギルことに三通りあり、眼とらふてイカルことに三通りあり、痴はオロカものゝことであつて、物の道理が知れぬものゝことじや、我見断見常見などは矢張り痴の部類じや、デ食に三つといふのは一に外食といふて男と女の身の相に互ひに貪著を起す、これを色欲といふ、二に内外食といふて、色欲を離れ男女自他の身に愛貪を起す、即ち形貌威儀姿態言語音聲等なり、三に通一切處貪といふて五塵五欲に染着し資生の物に慳貪を起す是れなり、眼は一に非理の瞋、事によれて可否を糺さず直ちにいかるをいふ、二に順理の瞋、他の來りて我れを惱ますに依りて起す瞋をいふ、三に淨論の瞋、己れか所解に信を置いて他の行ひに就て非となし辱ふて起す瞋等なり、今此無始の三毒の爲りに動かされず、淨山につくり重ねた罪をたづぬるに、本は身口意のなしたところに從つてたのじや身口意とは是れも何處かで申したやうじやが、身に三つのはたらき即ち殺生、偷盜、邪淫があり、口に四つのはたらきがある之を惡口、兩舌、妄語、綺語といふ、意に三つのはたらきがある、是れは貪瞋痴なり、此身口意の三惡業から起つて居る、それを只今一切我今皆懺悔と

少しも隠くすところなく、佛けさまに白すのじや、昔しは極惡の三業であつたか、それを懺悔して今は清淨と奇麗な三業を以て、決して罪は造らすと誓ふのじや、斯く懺悔すれば必らず冥助があるのじや、謂ゆる御文に是の如く懺悔すれば必らず冥助あるなり、是れじや、シテ心念身儀發露白佛すべしとあるのも、一寸申して見れば心念と心に惡るかつたと思ひ、即ち理の懺悔事の懺悔ともなるのじや、身儀とは三千佛などを禮拜して合掌恭敬する式じや、早く言つて見ると、惡るかつた御勘辨をと、頭をさげる様子なのじや、シテ發露白佛と、一切投げ出して佛けさまに申しあげれば、其發露の力が、罪根をして銷滅と即ち消滅さしめて仕舞ふなり、サア斯く消滅して仕舞へば、其時直ちに罪か消たばかりでなく、我れがなく天地なく、万物なく万事なく、佛法なんと尙はなく、只々一ツの眞實誠心があるばかりじやらふ、斯く奇麗になつて仕舞へば、やうやく受戒入位することが出来るのじや、譬へて見れば惡少年に家督をゆつるやうなものじや、此少年平日の所爲と言つたら酒を呑み廻り色ぐるひに血眼して居るとか、又は喧嘩をする喧嘩に花を咲せて面白

がるどか、扱は母徒と委は對て平生素の裸体だとか、父母を泣かせ世間を泣かせ、
 虚言をつくと何とも思はず、人を欺きて物をとるとか、悪事といふはなぬことな
 く犯さぬことなく、夫れはく手におまつた少年であるのじや、今此少年に家督を
 ゆづり跡をつかせるとしたところで、こんな仕物がド一なるものか、必らず至心誠
 悔して自から悪るかつたと悔ゆるときが出て来んでは、決して跡をゆづることは出
 来ない、ソレでも親馬鹿でこんなやつほど可愛いものだとうだか、マサカこれに跡
 を継がせるやうな愚昧な親もあるまい、兎に角之に相繼させる父母の身に取つては
 先づ少年の至心に悔悟したるや否やを見届けて、サア是れなら大丈夫といふところ
 が知れなんだら、大切な家督はさせられなからふ、此懺悔心が起らぬものに、決し
 て跡をやるやうな親のないことは分つて居るやうなもので、發露白佛せぬ族に受戒
 入位させるやうな佛け様方もない、おもふに我佛所造の罪は、此悪少年に比して幾
 千倍なるかも知れず、幸に宿善の助けによりて、人に生れた生れ甲斐に、懺悔して
 罪を消さすに置かれませうや、

昔し南都に一人の羅僧がおりました、武道を好みて竹刀持つ外には一知半解の力も
 ない男じや、然るに宿善の開發したるか又年も次第に寄つて来るしつらく思ひめ
 くらせば次第に心細くなつて来て、人間に死があるといふことを今更のやうに考へ
 た、若い時分は何處を風が吹かといふやうな鹽梅で、餘所などにおもつたのが今に
 なつて考へ付て見ると、サア厭になつて堪らぬ恐ろしくなつて来て仕方かない、と
 言つて到底通るゝことは出来ない、悪業あれば悪趣に墮ち、善業あれば善所に生る
 苦樂の報は定まつてある、然るに我れ生れ得て悪事を好み絶へて善根を植えたるこ
 とがない、年は取つた死ぬのも近い、何にか黄泉に行く糧にするものはと、頻りに
 考へて、オーそうじや、今にして佛法を學んだところで、深遠の道理が分るもので
 ない、我れ幸に習ひ覺れた、此武術を以て強盜の群れに入り、仕やうは斯様ぞと京
 都に趣ひき、強盜に交はりを求めたるが、武術の達人と聞て左右なく仲間に入れら
 れた、是れより人家へ押し入るときには、衆に先立て中に入り、暫しくと待せ置
 きて、其ひまに人を遁かし又は物を隠さしめて、悪ものに外を粧ふて、潜かに人

を助けました、シテ盜品を分配するときは、今は用がなし何時か要る時には申し受けんと言ふて腹には念佛して居る、或る時逮捕にゆつて檢非違使の廳に引かれ、盜に繋かれて仕舞つた、檢非違使か其夜夢を見たには、金色の彌陀の像を縛りて柱に繋げりと醒めて驚ろくこと一方ならず、依て先づ強盜法師の縛をゆるめて、貴僧の強盜せらるゝ心根を承はりたいと尋ねると、法師平氣で不審にれよび申さず、物の欲さに強盜せしなり、イヤ思ふ仔細ありて問ふのじや、眞ッ直ぐに言はれよ、いへば前を操りかへすまでじや、檢非違使塔が明かねば、自分から夢の次第を断すと、左しもの強盜法師も涙せさあへすあまた、び嘆息して、愚僧は南都の惡僧なるが、實は然かゝの譯なりとてありし次第を白狀した、檢非違使も感涙してこれに隨喜し、上に申して免したといふ、これに依りて考へても、一念懺悔の功德は分るじやらふ、サテ廣大無邊なことじや、

第拾貳席

(修証義第拾壹章受戒)

次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るゝし生を見へ身を見へても三寶を供養し敬

ひ奉らんことを願ふへし西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり

扱この御誓題は修証義第三章第十一節でありまして、いよく佛の境界にれ仲間入りする順序をれ断しいたすので、今はこれを修行門と名づけます、いよく受戒して佛の位に入るのじやから、つゝしんでお聽聞なされ、此佛の位に入るのはドーして出来たことじやといへば、至心に懺悔滅罪して三業清潔になつた、其懺悔の目的は此佛位に入りたいたいが望みであつたのじや、だから懺悔が済んで仕舞つた後は、一切諸佛のれ守りなされた、其通りの戒法を受くるのじやから、御文に次にはどの前の懺悔をれうけである、我々斯く懺悔して幸はひ佛祖の冥助にあづかり、佛の道を學んで行くのに、差しさはりがなくなつて来たからには、是からは惡いといふ名のつくことは、決して何んにも致しません、深く心ろに戒しめて置きますと、かやうになつたところが取りも直さず戒法じや、先づ戒法を受くるに先だちて、懺悔が済んたら佛法僧の三ツを敬まはねばならぬといふので、深く佛法僧の三寶をうやまひ奉まつるべしとのれ示じや、佛とは佛陀といふて天竺の言葉であるが、支那に來

てから翻譯されて覺者となつて居る。覺は悟りと訓して何にもかも迷ひはないといふことじや、何にも迷ひがないから佛けなので、其佛けとは何様なものかといふに身体は清淨にして光明は赫々と輝やき、面貌は端嚴にして丁度滿月のやうな鹽梅、齒は珂雪といふて珂か雪かのやうにあり、髪は光輝に似て目は青蓮のやうに、眉は翠柳のやうで八音の響き實以て亮かじや、相好ゆつたりとそなはり、五眼洞明六通遙かに颯る、懸河の辨を以て連注して機に投ず、三點を圓かにして身となし、五分を具へて体といはし、權實をしつて物を度し真應に隨つて人を化し、或ひは廣大の慈風を扇ぎ出して煩惱の熱を消し、或ひは滂沱たる法雨を降らして身田を潤はさしめて無上善根の芽を生やさせ、心樹を榮へさせて腐らぬ葉を茂らせ、來ないやうで來たり見えないやうで見ゆる、一切の衆生の爲めに縁に隨つて應現する、斯やうな方を佛と名くるのじや、シテ法といふのはどういふものか、これも問べて見るといふと、法は右の佛が説かせられ、且つ佛已れが言ふて、已れが行はせられた法則もや、ツツリ八萬四千の法門も、ツツリ我宗修證義の上で申せば、懺悔受戒發願、行持

のことじや、付法藏經に曰く佛の曰く三界生死の大海を出んと欲するならば、必ず法船を假りて度り脱せにやならん、法は清涼じや、能く煩惱の熱を除く、法は是れ妙藥じや、能く結ばれた疾ひを愈す、法は是れ衆生の眞の善知識じや、大利益をなして諸ろくの苦惱をすくふ、然る所以は一切衆生志性定まりなければなり、衆生は染習する所に隨ふてゆく、善に近づくとさは善となり、惡に近づくとさは惡となる、是れじや、扱此次は僧じや、僧は矢張天竺の言葉で、僧伽といふのを略したのじや、是れは佛の説かせられた教に従がひ、法を學んで人にも傳へて濟度を專一とせる、其功德のお方を僧といふのじや、道世和尚曰く禁戒眞を守り、威儀俗を出で、方外を圖りて以て發心し世間を棄て而して法を立つ、官榮以て其意を動かすことなく、親屬能く其想ひを累はすことなし、道を弘めて以て四恩に報じ、徳を育なつて以て三有を資すく、高きこと人天に越へ重きこと金玉に逾るを稱して僧となすと、經に曰く縱令ひ持戒破戒若くは長若くは幼ありとも、皆須からく深く敬すべし、輕侮すべからず、若し斯の旨に違せば交もく、重罪を獲んと、故に一人や二

人の僧の、行ひの過ちあるを見戒の虧けて居るを見ても、便ち無上法を輕んじては濟まない、只道の故をもて人を捨てはならん、人をもつて道を捨てはならん、斯様なことを申すは自分の田へ水を引くやうじやが決してそうでない、其仔細は後に申すが、先づ個様な次第である、夫れから此三寶といふに三種あります、一体三寶と現前三寶と住持三寶の三つじや、一体三寶とは釋迦文佛が御出世にならんでも、佛法僧といふ道理が十方三世に充滿して居る、現前三寶とは釋迦文佛の時のことで、御自分が佛寶でお説きなさるのが法でお弟子達が僧寶じや、住持三寶は如來御入滅の後のことで木像や畫像のお姿が佛寶で經卷が法で剃髮染衣の坊さ方方が僧寶じや、即ち拙僧のやうな姿のものが僧寶なりじや、そこでね嘯しがあるのじや、前に申した通り一人や二人の僧が破戒したの行業が僧のやうでないのと申したところで、これを輕ろんじて謗つてはならぬといふ仔細は、今は現前三寶は拜むことが出來ないが、唯一體三寶と住持三寶とは今までも何時でも揃ふて居る、其中でも一體三寶が大切であるのじや、坊主が僧けりや衣まで、僧を殺して經卷を焼ても眞

理といふものは燒けぬ、テ假ひ身は破戒しても口で説く法が眞理だから謗つてはならぬ、只其人が賤めぬ行へぬといふまでじやから、人に依りて道を捨てたり、道をもつて人を捨てはならぬといふのじや、實に此妙道のおもむきを傳えへて呉るものは僧より外にないのである、ないのであるから大切なじや、獨り法の弘まるにわらず、人よく法を弘むるなりで、法ばかりじや働らけないではないか、此れはを貴といものはないから寶といふ字を添えて佛寶法寶僧法としてあるのじや、涅槃經には佛け様が出家の人は在家の人を禮敬せされと御遺言遊ばされてあるはをじやから實に大切なじや、斯はをまで大切なじやから、生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひ奉まつらんとを願ふべしとのお示じや、西天とは天竺のこと東土とは支那や朝鮮や日本のことじや、其西天東土、どちらへ往つたからとて、佛祖正傳といふものは、是の佛法僧を敬まふより外にはないぞとあるのじや、若しも鼠の尾かなんどのやうに、拜むほどの直打のないものなら、三世透達の諸神諸祖が、何んでこのやうにおつ仰るものぞ、眞實尊といから拜めの敬へのと仰せ遊ばさるのじや、わ

かりましたかネ。

譬へて見れば守銭奴のやうな癖じや、金といふものは何處へ往つても通用するもので、至極尊といものじやけれども、眞逆に盗んでもためやうとはれもふまいが、或ひはそれも知れんことじや、併し縁があつて握れる金ならいくらでも握つて、握つたら金輪はなさぬといふでは、それではさつぱり利益功德がないではないか、有りあまる金ならば施しでもすればよいが、うんな善根はとても植ゑられぬ、イヤハヤ如何とも仕方がない、金が金倉の中で血の涙を流して泣いて居る、丁度佛と法とあつても隠されてあつて用をなさぬ、僧といふものがこれを傳へにや、實に利益がないじや、此守銭奴がところへ来た金は皆んな死にもなればよいが、根が金じやから死になつちや大變じや、矢張り金の儘で泣いて居る、サア其様なつて來ると、僧があつて是非とも弘めなければ此妙法を如何とも仕方がない、ソコデ權兵衛さんや、れ前さんはマア其様なに金を溜めてドーナなる、ドツチしても溜める金なら能いことを教めてやる、其金に子を生ませて、ソツしてドシ〜と溜めるがよい、イヤそれは

ダメなこつた、折角れ前さんの御親切じやが、それはマア止めに行ませう、是れまで何様貸して取られて仕舞つたか知れやしません、イヤ銀行へ出すのだよ、ナニ銀行も潰れる患ひがあるからネ、ナニサ潰れない銀行もあるよ、政府銀行があるよ、オヤ左様かネ、デは預けて殖やすも近道だからネと、ト〜と出すことになつたら金のよろこびは如何ばかりじや、サア斯様なると僧といふ銀行殿で、佛實法實僧實と揃つたらふがな、サア揃つたら美事なものだ、銀行は銀行だけに金の遣ひやうを知つて居るから、ドシ〜と子を生ませる、實に活きて働らくから世上を大層利益する、子を受け取るから守銭奴の權兵衛もよろこぶといふ工合は、實に三寶揃つて居んけりや出來んじやらふ、此れだから三寶は尊といものじやといふのだ、分りましたかネ。

昔し後漢の明帝、蔡愔秦景王遵等一十八人を天竺に遣はせしに、摩騰法蘭等及び佛の經像を得て還りまして白馬寺と云ふに安置した、帝問ふていふには法王の出世ありなから何で化が此國に及ばんだらふ、騰の曰く天竺の加毘羅國は三千大千世界

百億の日月の中心でムいまして、三世の諸佛皆な彼處に御出世になりませす、天龍人鬼のもの乃至願行力のあるものは皆なかしこに生れまして、佛の正化を受け悉く悟道を得ました、餘の群生の感ずるに縁なきは佛故さらに往き玉はず、佛往きたまはざるも光明の及ぶところ、或は五百年或ひは一千年或ひは千年の外、皆聖人ありて佛の聲教を傳へて、往いて教化します、斯やうに申しわけると明帝大に悦ばれてあつたが、永平十四年正月一日になると、五岳諸山の道士たち六百九十人、表を上まつりて西道と優劣を辨べやうと願つた、すると帝は尙書令宋庠に勅して此月十五日に大ひに白馬寺の南門に於て三壇を立てた、五岳八山の道士等は道經三百六十九卷を將ちて西壇に置き、二十七家の諸子二百三十五卷を中壇に置き、食を百神に奠て東壇に置き、明帝行殿を白馬寺門の道の西に設けて佛舍利及び佛經を置く、諸くの道士柴藪の火をもちて、壇を繞り經を臨みて泣いて曰く、人主邪を信じて玄風緒を失ひ、敢て經義を延て壇に在つて火をもつて驗を取り、用て眞偽と辨したまふと、ソコで火を放ちて焼くに道經皆な煨燼となる、道士等相顧

りみて驚ろき、天に昇り地に入らんと欲するに種々の咒術並らびに得ることが出来ない、大に愧ぢ入りまして且つ悲しんで居りませす、太傅張衡が曰く、卿今一つも驗とするものがないではないか、宜しく西域の佛法に従つて髮を剃るべしといふと、其時に外道の褚善信等黙して答えず、南岳の道士費叔才等は自から憾んで死にました、時に佛の舍利五色の光りを放ちて空に上ること蓋の如く日を覆ふて衆物に映ず、摩騰法師身を踊らして高く飛び神化自在である、時に天より寶華を雨して未曾有を得たり、法蘭法師は衆の爲めに說法して未聞を開化されて、司空劉峻京師の官庶後宮の陰夫人四岳の諸山の道士呂惠道等一千餘人、並に出家を求めた、帝可して遂に十寺を立て七寺は城外にして僧を安じ、三寺は城内にして尼を安じました、後廣く佛法を興して寺を立つること多かつた、ソツして今に至るのじやと漢の法本内傳にも僧史略にも出て居るが、實に摩騰法蘭師等のとに付ても三寶の大切なるを思ひ敬はるゝじや、三寶揃ふた働らば塩梅、先づザツと斯様なものだが、身を易へ生を易へても、恭敬せよとあるれもむさも是で略わかりませう、

第拾參席

(修證義第參章受戒 入位第拾貳節)

若し薄福少徳の衆生は三寶の名字猶は聞き奉らざるなり何に況や歸依し奉ることを得んや徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し或は外道の制多に歸依すること勿れ彼は其歸依に因りて衆苦解脱することなし早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし

扱佛法僧との三寶のね断しは濟んだが、過去世宿善の助くるところに依りて、今生最勝な人間に生は受けたが、其最勝な人間のうちでも、宿業のゆでたからざるもの、有様を、又此十二節の賛題で示し下さるのじや、若し薄福少徳の衆生は三寶の名字猶は聞き奉らざるなり、何に況や歸依し奉ることを得んや、實に此御文のとはりじや、若し薄福少徳の衆生とは、斯はせに尊とい佛法僧でも、薄福少徳の衆生には猫に小判で分けがわからぬ、佛といふ御名さへも聞かれぬのじや、好し人間に生を受けたからとて、水星や金星に住んで居た時にはドーあらふか、併し今頃は何の佛け様が教化なされてあるかは分らん、ソんな水星や金星でなくても、只一地球

の中までも聞かぬ國の人はいくらもある、ドンな尊とい佛法僧があつても、決して歸依してまづることが出来ない、歸依して正法をうけたまはることが出来なから一寸ばかりでもれのれの考への至らぬことに遇へば、之れは何の祟か知らん、家根屋が屋根から落ちたと言つて、屋根神さまの罰で落ちたしたり、大工が手斧で足を切つたからと言つて番匠神の腹立したり、チト小松川の氣狂ひ病院にでも入らにやいかんといふやうなものを呼んでは、田甫の稻荷さまが憑いたなせといひ、火事に逢へは荒神さまのね瞋り、大風が吹けば怪物かするのじや、こんな愚ろかな考へばかり起して、心ろに恐れをいだくものじやから、徒らに所逼を怖れて、山の神や鬼神を頼んで、一ツは瞋つて害を加へて貰はぬやうにね詫び申し、一ツは鏡でももうかるやうに、両方かけて願ふのじやが、ソんな神さまがあるものか、神にでも鎮められるはどのものが、何で人間に害を興へるものであらん、若しや興へるとすれば神國の神ではない、よし眞正に神さまならば却つて怪我するをぞせなやうにして下さる、我が佛法には十六善神だの三十六神だのと、神様も澤山あるが、此

方から頼まんでも、那方から護つて下さる、けれども薄福少徳の人々は、逆でも佛法を聞くことが出来ないから、是等の神さまも分らぬゆる下らぬ神さまを自分から拵らへて祈るのかよいのサ、ト言つて迷信して居ては夫れは氣の毒じや、じやから徒らに所逼を怖れて、山神鬼神に歸依し或ひは外道の制多に歸依することなかれと示し下さるのじや、外道とは佛教外のれ宗旨で、耶蘇教じやとか波羅門教じやとか、又は近來神道と唱へて勢ひの盛んじやとかいふ天理教じやの連門教じやの、凡べての佛教外のことをいふのじや、又制多とは天竺の言葉で支那に翻譯すれば、靈廟とかなる字じやううだが、ソンの靈廟とか淫祠じやとかには決して歸依してはならぬ、たとひ歸依したからとて、其歸依に因りて衆苦を解脱することなしと熱じたまふにも拘はらず、若しも我が曹洞宗門下の人で、左様なこともあることなれば、夫れこそ已れは迷ひ佛祖を辱かしむるもので、其罪實に墮獄に當るのじや、然るに我れ汗水たらして、此のやうな嘶しする外に、昨年わたりの事であつたか萬朝報といふ新聞が、眞逆正法を外護する爲りでもなく、只一ツ新聞の職務として

書たでもあらふが、酷く連門教を打ち付けたこともあるが、實に拙僧ども尤もの事じやと思ふて養成の意を表して居つた、是れでは信者もなくなるであらふと、喜んで居た甲斐もなく、此頃ではますますふゑて来たとかいふ、何んば馬鹿ものが多い世の中じやからとて、あまり多過るではありませんか、聞けば十萬人もあるとかいふ、是れに天理教やなにかを加へたら、其數實に大層なものでせう、斯様な馬鹿は勝縁のないものとして、我々どもは精進して佛祖の仲間に入らにやならん、デ早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみにあらず、菩提を成就すべし、衆苦とは苦にもいろ／＼ありて、其數實に無量であらふ、サツと茲にあげて見れば、苦々、壞苦、行苦、を三苦となし、生老病死を四苦となし、四苦の上のまた怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦、五盛陰苦、の四を入れて八苦とす、ゆるに衆苦といふのじやが、衆苦だから此様なところでない、日外小野東洋といふ人の書た利學入門といふものを見たが、東洋氏は佛教信者であつて島地歐雷師大内青樹居士など、交はり、随分研究されたやうに思つたが、ナセ那樣なことを書いたのか分ら

ん、默雷和上でも青樹居士でも、チト氣を付けて遣られたならばよいのに、確か斯様でわつたと思ふ釋迦の入苦を説く、甚だ危なりペンナムは幾個あけた成心なものじや、光線も苦た、眼を病む人の爲めにはなほの類、今は意味を言ふのじやから其れ積りで聞て下さい、夫れから苦といふものは、何でもかでも向ふから來て與へるやうに思つて居たやうだ、尤も那れを書かれてから死ぬるまでは、餘程年月も経つて居るから、默雷和上や青樹居士が氣を付けられたかも知らないが、既に前席の何節かで申した通り、苦樂は皆其人の思想境界次第で、決して向ふで惡るいのじやないから、過つてはならぬ、只つた一ツの月なれども悲しく見る人もあらふし、樂しく見る人もあらふし、斯く已れで拵ゆる苦樂じやから、苦を去りて樂に就たいと骨を折るのじや、故に衆苦を解脱するところ、夫から此三寶に歸依すれば、衆苦を解脱するのみにあらず菩提を成就すべしとのれ示じやから、三寶歸依の功德は衆苦を奇麗に取り除けて仕舞ふばかりでなく、又菩提といふ結構な道も出來おがるのであるとのれ示じや、菩提のことは十四節のところ、委くお断にねよびます、

譬へて見れり狸が土の舟を拵らぬる啼しのやうなものじや、狸が鬼に一抔くはされ、オイ何様だ、海へ往つて遊ぶのも面白いじやないか、イヤ巳らのやうな山なれたものが海へ往つたつて仕方がなからふ、イヤ夫れが面白いのじや、見ないところを見るが樂しみなやうなもので、山のものが水の上で遊ぶのが面白いじや、イヤそれもうだか水の中へどうして往くつもりか、ナニ何様して往く、君にも似合ん勿論舟で往くのよ、ダツて舟がないではないか、又うんなツマラぬことを言ふではないか、舟を拵ればよいでないか、コリヤ可笑い、君がツマらんことをいふのじや、舟が一日や二日で出來るものが、馬鹿言へたまへ、土を捏ねて拵らぬれば譯がないワ、ナルはど、コリヤ面白い工夫じや、うれじやア二人乗れるやうにするには大きくなければ否んから、手間が取れて叶はん、銘々一ツ宛作らふじやないか、ナル程尤のことだと是から土舟を拵らぬて海へ乗り出すと鬼は眞成の木で作つてゐるから大丈夫じやが、狸殿の方は土だから段々水が浸り崩れて仕舞ふた、山の神や鬼神に歸依するとこんな目に遇ふのだ、鬼といふ逆門敷などの惻怛ものは一生懸

命で嘘言を吐て、澤山に養錢を巻上げて、舌を出して左り圓扇で酒を呑んで居るも知らず、狸といふ信者の馬鹿者は一生懸命で土舟に乗って海へ往く氣になつて居る愚かなことじや、到底海へ往くことの出来ないものを土舟いとなひと同じやうに、衆苦を解脱するの道でないところへ、一生懸命で骨を折るとは扱て、氣の毒なことでじや、若しも解脱が出来るといふなら、水を呑んで酔つたと同じで、嘘言なことを教ゆるのじや、今我々は正法によつて解脱し、正法によつて菩提を成就するのじやからドンなにうれしか知れんじやないか、此事をおもふに付けても彼等を決して笑へはせん、却つて氣の毒に思ふのじや

昔し鎌倉に良邊といふ悪行者がありました、異やうなる風俗をして、市中を徘徊して居りました、時に或る家の主人病にかゝり褥にあること三十日、金に飽かして療養すれども更に其効がありません、今や命終の苦悶であるが、悲しむ聲戸外に洩れて、道ゆく人は足をどいめて立聞さする程である良邊茲に通るかゝりて、其悲しむ聲を聞きました何事じやと聞けば二人答めて夫婦喧嘩じやといふ、ソソなら止めて

やらふといふので良邊飛込んで見ると、何を圖らん主人臨終の様子なのじや、得たりかしてしと良邊口に任せていふには、拙者は良邊と申し申して扇ヶ谷に住むもので、いいます、咒をもつて人の病を愈し、或ひは悪魔を拂ふて取らずが生業なるが昨夜夢に當家の主人が大病で惱んで居るから、汝がすみやかに往きて咒術を行なひ病ひの愈るやうにして取らせよ、速やかに往くと二度までも神のお告げを續けり、只今是れへ罷り出たが、成程大病の御様子じや、是れは定めでね困りでせうなと、頻りに床の間などを詠めて、少しはありううな様子じやナ、ペロリと舌を出したも知らないで、家内のものは丁寧に挨拶して、ソレは、御親切ありがたふなと、いふて、早速咒術を頼みますと、良邊何の咒術をしたのか苦悶も薄らぐ様子である、家内の喜びは非常なので、御禮は何ほど、問へば、御禮は後でよろしい何ほど、限りはありませんと、錢は入らぬやうな顔をして居れど、其實は欲しくて堪らず、又見舞いませう左様なら、併し御祈禱の水を取りにね出なされよ、ハイ有難う是れは本の少々ばかりと五両包んで出したから、是れは、御丁寧にハイ夫れでは

頂戴して参りますと五兩懐るに入れてスター／＼表へ出ると、其後ろに付て来る若人がある、良邊ややしみてふりかへる途端に、チトれ待下され、ね前さんは今何をなされた、拙者は藤澤の遊行寺の小使だが、チト嘶したいことがある、ドウじやい私しのいふことを承知なされば、悪いことはないのじやが、ドウです承知しますか何だか知らぬが納かれることなら納かう、イヤ今取ツた金を渡せでもなし、居候に置いて呉れでもない、我れ聞く咒をよるこび人心を動搖せしむるは、甚だあし／＼となすど、今より妖怪の事をやめて我と共に寺に入り、佛けの道を覺ゆる氣はないか、イヤ一人もの事だから飯さへ呉れて遊せて置いて呉れば往つてもよい、良邊殿れにいふて老人と連れ立ちて遊行寺へ往きました、朱に交はれば赤さの誓へか、良邊僧へに悪心を改め罪を悔へて、立派な信者になりしといふ、感ひれに言ふたことへ眞實となるのじや、今は正しく申談でね嘶しする場合でないから、氣多きに迷ふをやめて、精進して菩提を成就されたものせや、

第拾四席(修証義第十三節)

其歸依三寶とは正に淨心を専らにして或は如來現在世にもあれ或は如來滅後にもあれ合掌し低頭して口に唱へて云く南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧佛は是れ大師なるか故に歸依す法は良藥なるが故に歸依す僧は勝友なるが故に歸依す佛弟子となること必ず三歸に依る何れの戒を受くるも必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり然あれは則ち三歸に依りて得戒あるなり

此御誓題は修証義第十三節で、三歸戒のね嘶しである、是れは我曹洞宗に限らず、何れのね宗旨でも、授けらるゝ戒で、何にもかも佛け様次第で勅命の儘に従がふと心身を投げ出して歸順する他力宗でも、得度式の時きは三歸戒を授けらるゝといふから、ドーしても佛弟子になるには此三歸戒が必用なのじや、前に三寶に歸依せよと仰せられたれ言葉をうけて、其歸依三寶とは如何なることかといふに、正に淨心を専らにして、或ひは如來現在世にもあれ或ひは如來滅後にもあれ、合掌し低頭して口に唱へて曰く、南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧、斯様に唱ふるのじや、即ち三業奇麗になつて其奇麗潛白な三業で、此三歸を受るのじや、淨信を専ら

にして合掌低頭するは身業、唱ふるは口業、南無歸依佛法僧は意業なり、此清淨潔白な三業を見抜かれて、シテ授けたまふ戒なれば、是れで佛弟子には確かになつたのである、是から三聚淨戒十重禁戒を受けて佛位に入るのじや、シテ見れば此三歸戒だけでは、先づ佛のね弟子となつたまで、佛位に入るにはまだ遠いことじや、シテ御文の南無の字は天竺の言葉で支那に翻譯すれば、歸命となり歸順となり歸投となり歸源となり、或は敬順或ひは歸趣又は救我など、幾つにも譯すそうじやか、意味を取りて味ひなば、何れを取つてよいかは、夫れは人々の詮議することにして、茲には高祖大師の御釋に従ふて、拙僧は歸投といたします、高祖の御釋なら、何處からでも死が來ぬから大丈夫じや、歸投即ち子が父に歸するやうな拙梅、依は依止又は依仗など、相成る字で、丁稚か主人に依り添ふて居り、王に人民か依り添ふて居るやうなことになる、夫れで南無と歸投の意を表して、南無歸依佛と唱ふるごきは、何の佛けさまといふことはなく、一切諸佛に通ずるのじや、元來この南無歸依佛にせよ南無歸依法にせよ、南無歸依僧にせよ、何れも一體不二の姿

たと申してあるが、それは或ほどうなるわけじや、南無歸依の四字は衆生に付き佛なれば法なれば僧なれば此一字は何れも先さまに付くから、諸佛と衆生と眞に一體不二のじや、シテ見ると三寶の全体は元より拙僧も皆さまも又は他の人々も悉く備へ以て居るのじやが、至心誠心佛道修行を精進して、眞に妙道に入らない曉つさには、迎も知ることが出來ない、夫れからナセ南無歸依佛云々と唱へよとなれば、佛は是れ大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す僧は勝友なるが故に歸依す、佛は大師なりとは大醫師の略語なりと申すが、大醫師とはツマリ遺教經に我れは良醫の病ひを知りて藥りを説くが如し、服と不服とは醫の過にあらすどあるが如何さまうでもありませうし、又大導師の略字と申しても宜しいでせう、佛は三界の大導師とも申せば、大師は醫の字を入れて見るも導の字を入れて見るも、何ちらでも宜ひやうに思はるゝじや、法はこれ良藥なるか故に歸依す、ナゼなれば釋迦如來がれ説き下された八萬四千の法門は、機を診てれ七を取らせられた良藥であるこれを服して煩惱の病ひをなほしたいために歸依するのじや、今この修證義の上で

申せば、此修證義に説てある、懺悔受戒發願行持の四ツが、直ぐ良樂であるのじや、又是れ等の佛さまの御事や、法のことを我々銘々ともに、取り傳えて下さる僧であるから實に勝友と勝れた此上もない良い友達じや、依つて此勝友に歸依するのじや、此勝友によりて法を聞き、法を聞いて成ほせ我々どもは元から三寶の体を備へて居る、ア、知らなかつた巴れが懐ろに金のあるのを知らずに散々な費乏して、飛んでもないところを尋ねて居たエ、馬鹿々々しいと分つたのが、漸やく佛道を學んだ甲斐のあるところじや、佛の宣まはく今此の三界は皆な是れ我が有なり、其中の衆生は皆な是れ我子なり、斯やうに説き示してある、ドーじや、我々も皆さまも皆な佛けさまの子じやぞや、此三歸を受けて始めて佛弟子になるのじやから、御文に佛弟子となること必らず三歸に依る、三歸に依て佛法僧を敬まふから佛子といふこともわかつたのじや、有難いことじやないか、夫から又御文の何れの戒を受くるも必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり然れは則ち三歸に依りて得戒あるなりとあるは、薩婆多論に問ふ若し三歸を受けざるもの五戒を受くることを得んや否や

答ふ得ず、要らず先づ三歸をうけて、方に五戒を得とあるから、ドーしても此三歸が先でなければならんのじや此三歸を先づうければ、三歸によりて得戒あるなり、即ち三歸をうけたればこそ、餘の三聚淨戒十重禁戒も受くることか出来るのじやとのれ示じや、だから何事をなすにも願があつて決して一足飛びにはいかぬのじや階子なくては二階へはのぼれぬから、是非とも階子が入用なのじや、それを我々凡夫の境界では、階子なしで上らふとするから、とんでもない怪我をするのじや、佛の御法意は行き届いたものじや、

譬へて見れば子供を育つるやうなものじや、ドーぞして成長させて、此跡を繼かせてやりたい、夫れには何をさせたらよからふ、どんな道から教ぬやうか、通くもよいかから規則を正して、順を追つて覺ゆさせるか、イヤ／＼手ツ取り早く家庭の教育をやめて、家のやうな商賣をして居るところへ年季奉公に入れて仕舞ふか、サチド一仕たらよいのだらふ、あちらこちらと工夫するのは、丁度三歸戒をうけさせて、佛法僧の三寶をうやまはせ、して佛けのれ慈悲も分らせ、其上に戒法も授けてと、

佛けになる道を、漸やく仕上げて下さったやうなものや、かやうに順の付いて居るにも拘はらず、子供の方ではドンなことを思ふかといふに、やツと違ふことをやめたと思へば、足が立ッて来たど嬉しがッて、兎角高へところへ登りたがる、コレ坊やソソなどころへ登るのは、マダノ早い、浮雲い、モー少し大きくなッて足腰がのびて来なければ、ソリヤ無理だやめて此方へ来い、オ、宜坊やだなアなぞと、斯様な世話をやかせるやうなもので、是れも丁度必らず、三歸戒をうけて其後に諸戒を受くるのだぞと、斯やうに仰せらるゝたもむさど誠によく似て居ッて、實にうれしく思はるゝ、シテ此文は始めの其歸依三寶とはより、終り得戒あるなりまでが、まことに子供の手を引くやうじやから、御拜讀いたすうちにも、嬉し涙がこぼれて来る、

昔し唐の雍州渭南縣の南にあたりて一郭之といふ道人がありました、妻と幼兒と三人にて住居ッて居りました、妻或時に夫の購りにあふて去られた、妻を呑んで泣いて夫の家を出ましたが、別れて居ること凡そ三年、一夜兒に逢んと欲して私かれば決

の家に戻りますとい兒も見せず且郭之も居ない、家を覗いてよくよく見れば一人の婦人が居りました、何やら營み居るやうな様子、天寒く風烈し、外には堪ぬおして將さに歸り去らんとするに、俄かに雪空と變じて来た、いよく堪ぬおなりてたのれが家はかへらんとするに、凡そ二三丁も来たかと思ふ頃、遙か隔りて人の泣く聲かするやうだ、ハテ變な人里離れた此一軒家に、如何にも不審なことを思ふて、又立戻ッて様子を見れば、矢張り元のまゝの様子、婦人一人が居る切りである、殊に茲へ来て見れば彼の泣き聲は聞ぬない、またすこゝと歸りかけて元の處ろに來て見ると、ドーも幽かに泣き聲が聞ゆる、ハテなど耳を濟まして聞けば餘り遠くもあらざる様子、雪は次第に積ッて来る殊には夜の道で淋しさも百倍ましじや、小氣味が悪いから歸らふとして見ても、何だか足が向ふへ出ない、これが親子の血を分けた中の印しか、ドーしても歸り去る氣になれぬから、幽かな泣聲を當てにうちこちと探して居るゝすると其聲はツイ側はらの竹藪の中じや、側へゆくのも氣味がわるいから居るところから聲をかけて、モシ、此藪の中に誰れか居ますか、モシ

誰か居るのですかと、頻りに問へども風に笹が捲れぬものじやから、問ふ聲も聞ぬと見ぬ、泣聲も途切れ〜に聞こゆる、哀れ〜、藪の中には何んにも知らで、竹二本はかりを押し曲げて、裸体で麻縄で縊られて居る、雪が加つて解けるにつれて麻縄は次第にしまり段〜肉に喰ひ込んで来る、風が来るたびに竹が扇りて、其度毎に痛むのが甚だしいから、つめたいのと痛いでモー散々に泣き盡して、今は聲も枯れて仕舞った、途切れ〜に聞ゆるのは是れが爲りとは露知らねば何だねへマア何ば人が呼んだって少しも聞へないのかねへ、モシ〜誰ですか、泣て居るのは誰ですか、イ、仕方がないなアなど、小言を翻しながら藪の中へ這入つて見ると、雪のかりて能く見ればイヤ是りや裸体で何様したのですよ、段〜側へ寄つて見ると何と圓ん我子じやから喫驚りして、あんまりあされて腰を抜して、片息で見詰て居る、子供は聲を絞り出して、オ、お慈母さんか、能くマア壯健で居て下さつた、慈母は漸やく立上つて、何もの、不人情じや、可愛い件れを此やうにと繩を解かんとして見ても、濡れて確乎しまつたから、指は凍てゝ居るし中〜解け

ん、可愛い一念で噛み切つて仕舞つて繩を解いて肌を抱きてしつかりと暖めて、アよい委しいとは後でよい、脊中へ廻はれど肌を負ふて我家へ歸つて様子聞けは、繼母に折檻されて、斯の始末じやと語るを聞き、慈母は驚いて末を案じ其まゝ家に養ふたといふが、實に親なればこうすなればこそ、かゝることも出来やうけれど、此れに付ても佛世尊が我々のやうな子供を相手に、斯るお世話を下さるのは、實に此慈母親が、此子供をねもふよりも尙は深い、有難ではありませんか、

第拾四席

(修證義第拾四席 戒入位第拾四席)

此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するときは成就するなり設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなり已に歸依し奉るか如きは生々世々在々處々に増長し必ず積功累徳し阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり知るべし三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりといふことを世尊既に證明しします衆生當に信受すべし

これは修證義第十四節の御寶題で、只今は三歸の功德の次第を一括して更に次の十

五節を呼び起したまふのじや、ソレデあるから此歸依佛法僧の功德とあるので、前には其歸依三寶とはと、未だ知らせ切らぬ言葉、此れは其教示がすめば、即ち此歸依佛法僧の功德と一括したまふのじや、一括して宜はく感應道交するときは成就するなり、とれ結びなされた、感應道交とは此上もない有り難ひことで、何の品柄物柄でも天地の間にわらゆるかさりは一ツとして感應道交せぬものはない、猶ほ因縁會遇といふがごときで、因かあれは夫れにかゝる縁かある會遇と御結になつたのじや、一人の娘があるど夫れが因になりて、脇々から縁談を申し込ひ、何ほど申し込んで来たからと言つて、其娘にかゝる縁かあればねば謂ゆる縁談はじすばらない、ソコで感應道交即ち因縁會遇と、兩方二ツのものが二ツなからに一ツになる、一ツかどらへば二ツ、何どもらへぬ面白ところじや、一寸したはなしじやが、能く世間であらふ言葉で、お前と一ツにならふじやならか、二ツのものでありながら、一ツになれるなられると思ふて、オ、よからふ、一ツにならふなど、直ぐ出来合の夫婦が始まつて、何町へ世帯をもつなどもあるが、感應道交は個やうな工合のものじや

能禮所禮性空寂、感應道交難思議、かやうな次第なのじや、九節で仰せられておる御文に、哀れを我に分付すべし、佛祖の往昔は吾等なり吾等か當來は佛祖ならん此御文の意味でよく分りませう、感は銘々衆生か佛のれ徳に感すること應は如来の方で衆生の信心に應じて下さること、應じて下さるから感ずる、哀れみを我れに分付すべしと願ふたから、分付して下さるのが道交の出来たのじや、會遇ふたのじや頭らを下げて願へば、受けて點頭いて承知したの意を示す、能禮も所禮も其時一ツ心ろだ決して二ツてはないじや、あなたも元は我々と同じ凡夫て、御修行がつんで立派になられたのだ、あなたに教えを受けて道交したらは今度は我々が佛祖じや、教えられる覺ゆる、佛祖通りになつたところが、其時一ツ心ろで決して二ツヒやない、華嚴經に菩薩清涼の月畢竟空に遊ぶ、衆生心水清ければ菩提の影中に現す實に澄み渡りたる月をなかめて、オ、よい月じやと氣が付いたら、付いた時に月より外に天地もない萬物もない「月や我れ我れや月かとおもふまで限なくすめる秋の夜の月、」感應道交する工合は斯様な次第じや、實に月と我と一ツとも言へす二ツ

とも言へない、妙至極なところじや、感應道交はこのくらゐにして置きませう、
 此三歸の功德即ち至心に懺悔して受けた此歸依法佛僧の功德は、是から三衆淨戒十
 重禁戒と階段を踏んで、佛にならふといふ願ひが届いて、夫れが感應道交するとき
 成就するなり即ち菩提となるのであるのじや、尙ほ感應道交を委しくね説き下され
 て、重ねて其仔細を仰せ下さるには、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も、感應道交
 すれば必らず歸依し奉つるなり、實に感應道交がかゝつて來ると、四惡趣の衆生で
 も何んでも、皆んな歸依し奉るけれども、扱この四惡趣と申すものは、甚だ業報か
 多いから、中々感應がむづかしい、むづかしいには違ないか、牢屋の中の罪人が
 日の目も見ずに苦しんで居るが、如何に重罪な罪人でも、風と善心か起つて、ア、
 牢の中は辛いものじや、許されて牢を出たら、二度と此様な苦しいところへ、連れ
 られないやうにしたいものじやと、斯様な心ろが起るといふと、此心か直ちに一体
 三寶の功德、天地の眞理に契つて來るから、感應道交もすることになるやうなもの
 で、地獄の衆生でも畜生道でも、皆なこの道理なわけじやから、ソコで一切の衆生

を籠めて天上人間地獄鬼畜と、悉皆擧げて歸依し奉つるなりとね示し下さるゝじや
 ソコで天地間の事物、有情であれ非情であれ、皆な同類を殖すことを知つて居る、
 二人の親が五人も十人も子供を生むやうに、艸木でも何んでも一本のもので幾千萬
 といふ實をむすぶ、其實一ツがまた生へて、又實をむすぶやうな鹽梅で、鬼畜でも
 地獄でも、風と地獄はイヤな所じやと考へ付くと、其心ろが段々と相續して、生き
 易り死に易はり生を替へて其生を易ゆるうちには、一念過去に起つた功德で人
 間に生れて來て、かやうに尊い佛法僧を聞かれ、承はることも出來る、承けたま
 はるばかりでなく佛にならるゝのであるから、其趣ひきを御文に、已に歸依し奉ま
 つるが如きは生々世々在々處々に増長し必らず積功累徳して阿耨多羅三藐三菩提を
 成就するなり、かやうにね示し下さるゝじや、此阿耨多羅三藐三菩提といふのは
 一口に佛法と心ろ得ればよろしい、併し一寸言つて置きませうが、唐の玄奘三藏が
 天竺の言葉を譯するに當りて、五種不翻と定義を定めた、其仔細は秘密にして譯さ
 れぬものと、多義にして譯されぬものと、其物柄の自國にないので譯されぬものと

ク、刺れるやうじや、息子や娘が看護で居って、お父さん頼って上げませうか、イヤ、止めて貰いませう、只でさへ痛んで仕方がないから、擦られたり撫られたりするど、尚ほ痛んで来るだらふ、夫よりかお氏神さまへたまわりして、早く苦しみがとれるやうに、お願ひ申して来て呉れや、これのは寝て居て済まないけれど、茲でよく、お願ひ申すから、ヤレ、何の業やら知らないが、是れでは逆も堪へ切れぬと、此やうな苦しみをして居るところへ、天井から一滴の甘露か落ちて、其口へ這入るといふと、いふに言はれないよい味であつた、スルと濡れ紙を剥ぐやうに、段々病ひか癒つて来る、今我々の身の上を見るに、實に宿業の大小の罪惡、實に大病にかゝつて居るのじや、それを佛げさまか三歸の甘露で、今は立派にして貰つた、難有いことではないか、

昔し漢の時代に高僧といふ人がありました、毎日、都に出て、籠を荷ふて市中をめぐり、馬の草鞋や牛の香や、眼に障るじやまものは、ことごとく拾ひ取つて、往來を清めて奇麗になし、往來の人や牛馬の通るに、不都合のないやうに心がけ

平生の活業と致して居りました、或るとき古い友達にむひますと、其友達の申しますには、君はマア飛んでもないことを仕て居るじやないか、併しそんなに零落たのか、何んだ馬糞さらひだか紙屑ひろひ見たやうな真似をして、そんなことは止めたまへナ、友達の面穢じや止めたまへ、イヤ、其様ではない、却つて喜こんで貰はにやならぬ、私しも今は悴れに世を譲つて、大そう閑になつたから、遊んで居るのも勿体ないゆゑ、斯様なことをして居るのじやが、マア是には深かい譯があるから、一寸マア聞て下され、家もますます都合よくなつて、一人位遊んで居ても、何も差支はないのじやが、此頃寺へ參つてれ論しを受けて、三歸戒の謂れを聞き、有難いことに思つたから、仰せの通りに懺悔して三歸戒を受けて来てから、丸で了簡が替つて来たよ、マア一寸考へて御覽なされ、斯様なことを誰か好くもので、誰れも好かんから私しがするのじや、私しは斯様思ふのじや、成丈け汚ない事をして人に奇麗なことをさせたいのじや、道を斯様奇麗にすれば、通る人も樂じやないか、是れが大功德になるのだよ、イヤ夫れは感心な事、それでは私しも明日ッからやり

ませうと、兩人是から一ツになつて、手わけをして道を清淨にし、間には寺へ參つて法義を聽聞して、終に大菩提を得たといふことじや、今此兩人の爲すところ、佛の御説を信受したのであるゆへ終に大菩提を得たるも感應道交の譯じや、感心なことではないか

第拾六席

(修證義第三章受戒入位第拾五節)

次には應に三聚淨戒を受け奉るへし第一攝律儀戒第二攝善法戒第三攝衆生戒なり次には應に十重禁戒を受け奉るべし第一不殺生戒第二不偷盜戒第三不邪淫戒第四不妄語戒第五不酤酒戒第六不說過戒第七不自讚毀他戒第八不慳法財戒第九不瞋恚戒第十不謗三寶戒なり上來三歸三聚淨戒十重禁戒是れ諸佛の受持したまふ所なり扱此御贊題はいよく入位の受戒じやはどに、今は只儀式が揃はんで、只はんの御嘶しにするのじやが、夫れでも眞實に誠心をもつて、手でも洗つて來て清淨な上にも清淨にして、心をしづめて敬聽してね實ひ申したい、御文は三歸の戒法をうけて來て、次には應に三聚淨戒を受け奉まつるべしとありて、假に茲を三聚淨戒の式場

と心得て下さり、三聚淨戒とは第一に攝律儀戒なり、攝律儀戒とは、佛法各宗何れに行はせらるゝ儀式なりとも、此一戒に收め且つ出世間のことばかりでなく、世間の事の惡といふ惡は決して爲さぬと誓ふ戒法じや、第二攝善法戒なり、此戒は前の攝律儀戒と違ふて、ねふよそ有ゆる善といふ善は、勤めて行ふべしと誓ふ戒法である第三攝衆生戒なり、此戒はもろくの生とし生けるものは決して余所の縁なきものと思はず、何處までも大切に思ふて、眞實安樂を興ふべしと誓ふ戒法じや、次ぎは應に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒なり、此戒と他の九戒と皆な三聚淨戒の中に籠れる譯けなのじやが、十重禁の第一に置いて茲に重ねて願はすのじや、即ち殺生の重い罪なることを知らねばならぬ、昔しの寺子屋で教えた本の古狀捕といふものに、今川了俊が忤れの仲秋に對して、無益の殺生を爲すなどあると、強情な子供があつて、ソソなら益になることなら、殺しても宜しいのですかと問ふたといふ、此様な人は終に牛殺しにでもなるかも知れない、ともあれ生きものを殺してはならぬ、其仔細は心地觀經報恩品の中に無始より以來一切の衆生、六道に輪轉し

て今に百千劫を經る、其中に於て互ひに父母となる故に一切の男子は皆我慈父一切の女人は皆我慈母、と去れば生き易り死に易り互ひに父母となりしか、今は佛説によりて疑ふところが無い、不幸にして今地獄餓鬼畜生修羅に生れて、諸ろくの衆生となつて居るに相違ない、若し牛に生を受け居るものが先きに死んだ我祖父母なるも知れん、魚に生を受け居るもの、我が昔の先祖なるも知れん、軍鶏に生を受け居るもの、我親なるも知るべからず、鰻に生をうけ居るもの、先きに天だ我が姉妹なるも知るべからず、只凡夫の故に我れ未だこれを知らないのである、日々我れ口に入る牛肉は兄の肉か、弟の肉か、日々我が喰ふ軍鶏や魚は姉の肉か、弟の肉か、扱は親の肉か先祖の肉か、これを思へば殺生は出来ないだらふ、殊に他の身の上のことよりも、先づ己れが身を何とせよ、命は大切なものではないではないか、若し己れが命が大切なら死んでよいと思ふものは、此世の中にないといふことを知らねはならん、去れば殺と雖も殺すわけにはゆくまい、じやから最も重い戒と思はにやならん、第二不偷盜戒なり、此戒は不殺生戒に比して少々は軽い戒じ

やが、ト言ッてあまり樂にはゆかぬ、其仔細と言ッたらば、己れの所有でないものを取るばかりが偷盜でない、年季小僧に往つたと見よ、十年が七年の間は主人の身体となつたのじや、夫れをなまけてばかり居るときには、時間を盗む偷盜の一ツじや、官員が偽病をつかつて、日曜でもないに休むといふのは、是れも時間の偷盜ではないか、官員ばかりでない、勤めをする人は皆其通りじや、第三は不邪淫戒なり、此戒も其様なに軽いやうでもないが、扱容易なところに大怪我のあるもので、自分の妻妾と極らぬものに、淫穢を行なつては濟まぬだけじやが、ソレでも閨門が乱れると家か乱れ國か治らないのじやじやから他に懸念の念さへ断てばよいやうなものであるが、扱悪名の廣がるのは、是戒に最も多い、三責の一僧を誹謗しては大罪になるのじやからマア、言はぬとして置くが、立派なれ身柄の人で、定まつた妻を幾人置いても置けるのに、何處其處でどうじや、マア餘んまり此ては言はぬから新聞を讀むと早分りじや、偷盜と邪淫が一番多い、第四は不妄語戒なり、此戒は虚言偽りを言ひさへせんけりや、夫れでよいのであるが、是れもあまりやさしくない、

虚言を吐くはどむづかしいことではない、直ぐ尻りか破れて仕舞ふが、兎角虚言をいひたくてならぬ、オイれ前あゝの錢は、イヤモー使ッて仕舞ました、ナニ隠してソツと溜めて置く癖に、夫婦の中でさへ直ぐ虚言じや、ナア世間に向て虚言をいふのを調て見ると、甚だしいかな大抵虚言じや、只虚言の世の中で馴れて居るから、新聞に書ても面白くない、一寸しても直ぐ虚言じや、人が只許して置くまで、虚言で他人を害する事があるゆへ大切に慎ねばならぬ第五不酤酒戒なり、此戒は面白い、呑むなどは言はず賣るなどのれ示しじや、勿論賣るものかなければ買人もなし、又賣るなどれ示しのはせじやから、醸造家もないことになる、何のことはない水源を絶ちて、川をから干しにしたやうなものじや、是れでは呑むものか自然と飲めぬ、夫れて此戒は酒を賣るなど戒しめて、呑むなどいふことを其中に隠してあると思へば矢張り呑めぬことになる、尤も酒を飲んでではるいことは、大智度論に酒に三十五の過失かあげてあるがイヤ恐ろしいものです、大抵な悪事は酒を本として始ります、一々今これを申せば、随分三晝夜ぐらゐるな價ひは澤山あれど、皆さまが氣をお付け

なされて、お考へになつてはかりでも、随分大變なことでせうから、今は茲らでやめて置ませう、第六不説過戒なり、此戒は他人の悪事をいふなどのお示しじやか、世間へ出て見ると是戒を犯すものか尤も多い、先づ井戸端會談を始めとして、學者智者と呼はるゝものゝ會合に存外多く是戒を犯す、シテ世間の法律にも人身攻撃が悪いといふので、チャンと規則が立つて居つて新聞屋が今に泣いて居るが、拙僧等も新聞紙法などは、至極隨喜するところである、ドーも人の過ちは言ひたいものと見える、第七不自讃毀他戒なり、此戒は讀んで字の如し、自分を讃めて他を毀つくるを戒めたまふなり、ナセ他を傷くといふとなれば、自分を讃めるといふと、其相人は必らず悪くなるらんけりやならん、ドーダ關取、今日の角力はドーヒヤツたな、へい向ふが強うゴシした、是れなればよいけれども、向ふが弱うゴシしたではいかん、ダカラ自讃を戒しめたまふなり、第八不慳法財戒なり、慳はおしむなり、貪はりて他へ財をやりたうないのである、法を慳む事は僧侶などに多い、これも其様に褒めたことでない、じやからこれを戒しめたまふなり、第九不瞋惡戒な

り、此戒は餘ほど氣を付けて貰いたい、決して瞋るなど戒しめたまふ戒なり、兎角自分の氣に入らぬことは瞋るものじや、國際問題とか外交問題とか、一ツ破れると戦争になるが、瞋つてならぬとの戒しめである、然れ共悪人が盛んなれば天下高人の害になるゆへ瞋ねばならぬ事もある文王一たび怒りて天下平かなりなるは、此れは好ひ瞋りである、つまり今はそんなことに用がないから、只一瞋らぬことにすればよい、第十不謗三寶戒なり、此戒は已に三歸戒で受けたもので佛實法實寶の三寶を謗らぬ戒じや、此戒さへ眞成に守ることが出来れば、前九戒までは骨は折れないのである、即ち一体三寶の眞理が能くわかれば、前九戒の相人はないのじやから、眞逆に一人角力も取れないわけじや、一体三寶か分らぬといふと、この戒もくも皆何れもむづかしい、是で戒は略済しましたが、ドーです、斯様なに多く爲してならぬことがあるか、失敬じやが逆も持てますまい、ソコデ又一ツお断しがあるので、それは何じやといふと、戒を受ける時には、皆是れ丈を受けるけれども、自分で持てると思ふ戒を一ツでも二ツでも持てば、其一戒か二戒で、十分に解脱の徳

を以つて居るのじや、これを分持といふて全受せんともいふのじや、故に又別々解脱ともいふてある、此次の御文は上來三歸三聚淨戒十重禁戒是れ諸佛の受持したまふ所なり、此文に依れば、前の諸戒は諸佛の受持されたものじや、是れは茲にを断しせんでも、れ分りに相成るであらふと考へる、

これにて戒法のことば荒方判りになりましてせう、しかし授戒は口ささばかりでは出来ませぬ、殊更授戒は轉凡入聖の一大儀式でありますから、必らず最寄り寺院に授戒會の修行あるとさ之に就きて七晝夜の加行を行ない以て御祖の正傳菩薩の大戒を受けなさらなければ此席でのおはなしも何の役に立ちませぬ、今はたゞ授戒の豫備として茲に戒法の話を致して置くばかりであります、扱授戒の嚴かなる御儀式に依りて諸佛同等の寶位に就た以上は、即ち三界の大導師と出世したのでありますから、これよりは衆生濟度を心ろがけねばなりません、最早や決して三千大千世界中に恐れるものはありませんから、是を今晚のね土産といたして下さい、譬へば戒法は本來の法律であつて、山の高いのも戒法なれば海の深いのも戒法じや

山が高いからと言つて海を笑ふでもなく、海が深いからと言つて山を罵りもせん、山は高く聳つて本来の戒法を守り、海は深く淵源を守りて本来の戒法に背かん、女は女、男は男、剛柔相ゆつらざるは本来の戒法なのじや、柳の緑花の紅みな本来の戒法なのじや、決して他のものから、手も付けられもせんければ、又手をつけるわけにも往かんのじや、故に餅屋は餅屋の戒法を守りて何處までも餅屋で押しぬき、八百屋は八百屋の戒法を守りて、何處までも八百屋で押しぬき、山が高さを守るやう、海が深さを守るやう、本来の戒法を守りてへすれば、世間決して争ひの起る筈はない、けれども人間といふものは、手を翻がへせば雲となり、手を覆へせば雨となるといふやうな、刹那にかはる心ろといふものを持つて居るから、兎角本来の戒法に背いて、他に害を加へることを圖らう、故に諸佛菩薩にいろくどれ世話をかけるのじや、誠に早や困つたものじや、本来の戒法といふことがわかつて見たら、本来不殺生と出来て居るので、殺すなどいふでない、殺されないのが戒法の本体であらう、本来不邪淫なのじやから、邪淫されないのが戒法の本体であらう、其

他の戒法もみな此通りなのじや、それを強でもやるのじやから、大層な罪になることが知れるじやらう。

明治二十三年五月十一日の新聞紙に、聞くも厭やな新聞種がありました、美濃の國安八郡に小曾根といふところの、可なりの百姓であつて、其名を榎谷染五郎と呼びました、元來遊獵を好みまして、父の遺言も守らず日々野山へ鐵鎗を持って往きました、只ある向ふに雉子が居りましたから、狙ひすまして一發ズドンと放ちまして、儘かに手筈ひいたしたから、直ぐ駆け付けて見ますといふと、是はしたり何んにもない、ハテなど思つて其處此處と探かすうちに、俄かに一天掻き曇りて、墨を流したやうになつて、山林類りに動搖するから、コリヤ凄まじいことじや、何が出て来るも知れんど、早く家に歸りますと、是れはまた何としたことぞ、家には村の者が大勢集まつて居つて、オヤ染五郎さん能く帰りになりました、れ留守にれ内儀さんが向の家へ、一寸用事でれ出かけなされると、何處で放つた彈丸か知らねど、れ内儀さんの胸板を打抜かしまして、アレあのやうに即死されました、まことに

ね氣毒きどくのまなことでありましたと、言はれて染五郎せんごろうは胸むねにキックリ、デは那なの彈丸だんがんが、女房にようぼうを打ち止めたか、エ、残念ざんねんなどは思おもったが、うんなことは毛けばさも言いはずに、大勢たいせいの手てを借りて葬儀そうぎだけは營いなんだが、それでもまだ遊獵ゆうりやくを止めずに、矢張やばり暇ひまさへあれば、野山のやまに遊あそぶを好このむといふて、大層たいそういやしんで書いてありましたが何處どこまで遊獵ゆうりやくが好きなことか、こんなじや迎むかも仕方しかたがない、此この染五郎せんごろうをおもふにつけても、戒法かいほふは守まもらにやなりません、

第拾七席

(修證義第參章受戒入位第拾六節)

受戒じうかいするか如ごときは三世さんぜの諸佛しよぶつの所證しよじようなる阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼだい金剛不壞こんごうふぐわいの佛果ぶつぐわいを證しんするなり誰たれの智人ちじんか欣求こんぐせさらん世尊せそん明みらかに一切衆生いっしよじゆじようの爲ために示しします衆生しゆじよう佛戒ぶつがいを受うくれれば即すなはち諸佛しよぶつの位ゐに入る位大覺ゐたいかくに同おなふし已まる眞まに是こゝれ諸佛しよぶつの子こなりと扱受さくじう戒がいがすみ佛ぶつの位ゐに入いりました上うは、最早もはやや世よの中に怖おそろしいものや恐おそいものはありませぬから、自分じぶんで自分じぶんを卑ひすみて、下くだらぬものにねはしめしてはなりません前席ぜんせきでもね嘶なしに及びおよびましたる通り、戒かいを受うた方々かた々は大千世界せんぜんせかいの大導師だいたしでございま

すから、最早もはやや只ただの人間にんげんではありません、シテ御寶題ごぼんたいは修證義しゆじようぎの第十じゆ二節せつで大覺位だいかくゐにのほりましたのでありますから、前に三歸戒さんきけいをね説ときなさるゝ時は、已まに歸依きいし奉たてまつるか如ごときは生々世々しやうしやくせしやく在々處々ざいざいぢぢに増長ぞうぢようし必ず積功累徳じくくうらいとくして阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼだいを成就じゆじゆするなりとれ示ししに相あなつて、尙なはまた成就じゆじゆするなりと未來みらいをね指さしなされておれど、此寶題このぼんたいに至いたりましては、既に順じゆんに修行しゆじゆを積み重ねて、三歸さんき三聚さんじゆ淨じゆ十重じゆじゆ禁きんと十六條じゆじゆ戒けいうけましたから、受戒じうかいするか如ごときは三世さんぜの諸佛しよぶつの所證しよじようなる阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼだい金剛不壞こんごうふぐわいの佛果ぶつぐわいを證しんするなりと、れ示ししに相成あひなつて、無上正眞道むじやうしやうじんどうの金剛不壞こんごうふぐわいの身みとなつたのじやぞと仰おほせらるゝ、此この金剛不壞こんごうふぐわいの佛果ぶつぐわいと仰おほせらるゝは、金剛石こんごうせきなんぞいふあんなものではなく、イヤ那樣あんななものでも、随分直ずいぶんちよくのするもので、此地球このちきう上じやうではあれより堅かたいものはないとしてある、ガラスなんぞ切るには是非せひとも金剛石こんごうせきでなければならぬといふ、ソレでも金剛石こんごうせきを細工さいくせる品物しんぶつが、随分見みかけることもあるから、金剛石こんごうせきを壞こす道具どうぐもあるのじや、今いま此この金剛不壞こんごうふぐわいの金剛こんごうは、帝釋たいしやくの持もたる、寶物ほうぶつの名なで此この金剛こんごうのやうな堅かたいものは世よの中に決けつしてなく、火ひで焼やふが拙つちて打たかふが

如何なることをしたからといつて、決して壊れるものでない、又此金剛に出逢ふたものは、忽ち粉な微塵になるそなた、ソレで大覺位の佛果を贊稱して金剛不壊と言つたもので、何にも人間の身体なもの、壊れない道理があるものか、死ねば腐るし小刀ぐらゐでも疵をつけるが、一体三寶の眞理といつたら、万劫末代時間のあらん限り、空間のあらん限りは、決して腐ることもなく、焼いて焼けず煮ても煮ゆる、砕いても砕けず、手に取ることも出来んければ見ることも出来んのじや、此理を悟りし佛体じやもの、佛体即眞理、眞理即佛体であるから此れ徳を贊稱して、金剛不壊とは名けしなり、今は既に斯の如き尊とい佛果を證したのじやから、其證據には斯様であると、梵網經の盧舍那佛のれ詞を引きなされて、世尊明らかに一切衆生の爲めに示しましませす衆生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入る位大覺に同ふし已る眞に是れ諸佛の子なりと、仰せられて受戒するものは眞に佛の子であると證據をた立てなされた、大願が成就したのである、是れが我々人間ばかりかといふに、既に前にもいふた通り、一切衆生が皆大覺世尊と同じやうに相成るのじや、然

しながら、四惡趣の衆生は我々と異つて居るから、受けることが中々難い、難いものじやに依つて戒を受けられぬものもたんとある、じやに依つて我々共も、此濟度を怠らぬやうに勉め、況んや其肉を噛み喰ふなどの邪見をやめて、速やかに戒を受くるやうにせにやならぬ、これ皆さまの受戒された所詮なのじや、夫れで受戒が済んで大覺位になつて、世界の大導師となつたのじやから、眞道にソんなこともあるまいが、若しやれ受けになりました、十六條戒の一つでも又は半分でも、夫れが一つもまもれぬといふと、矢張り元の奎阿彌とやらで、聞かぬ前と同じで濟めばよいか、破戒の優婆塞優婆夷となつて、何ぼうか罪になります、是の事は西明寺道世破戒篇の述意に於て吳々も歎かれてある、勿論そんなことはない、若しやあつたら大變じや、じやから一分でも守るがよろしい、其の一分で立派に佛けになられるから、若し酒屋さんであつたなら、俄かに酒屋を止めて仕舞つて、明日から酒を賣らなんだら、御膳をたべることが出来ない、不酤酒戒をやめて出来やうとれもふ戒を守るがよい、又魚屋さんであつたなら、何様も商賣なら仕方がない、不殺生戒

だけは守れんでも、酒を呑まぬとか酒を買はぬとかを守り、落語家のやうに虚言をいふのが商賈であれば、是も不妄語は守れんから、不殺生戒を守るとか、何とか銘々の商賈に考へて、是非とも一分は守つて貰いたい、併し失敬を申しました、大覺世尊同様なあなた方に向つて、飛んでもないことを申しました、一分や二分どころでない、十六條戒ごとくくまられる、精進堅固なことは陀度請合じや、誰も此大覺位、即ち佛果をよるこばぬものは一人もない、誰れの智人か欣求せざらんとわつて、智人だ賢人だといふ人でも、此阿耨多羅三藐三菩提を、欣びもどめぬ人はない、夫れを愚人の我々共が、大覺位になつたのじやもの、これをよるこばぬで居るものはない、じやに依つて少しばかりも心配するなどは決してないじや、甚だ失敬なことを申しました、

譬へて破戒の有様を申せば、丁度酔ッばらいが糞坑に墜ち入りて、グッ寝て居るやうなものじや、自分が呑んで自分が吐て、其上おまけに尿なほやらかして、其中に華骨のゆめをひすんで居る、側を通る人か氣の毒にれもつて、呼び起して去らせや

うとすれば、白眼みつけて小言を言ふ、うふして少しも正す氣はない、ね經には此事を、人あり糞坑に墜つるが如し、何ぞ救はんぞ欲するを知らんと、佛けさまは断念めてれ仕舞なされた、そうでもあらふ、呑んで酔ふのは易く、醒めて正すのは難い、戒もうくるは易く持することは難いのじや、オイ酔ッばらひさん、家ではれ内儀さんが探して居るせ、ソソなどところに寝て居るもんじやない、ナンダ、四アが探して居ると、迎へに來いッて其様言ッて呉れ、見る人は胸を悪くして嘔を吐て、再びと見る氣はない、若し是れが僧でもわつたら夫れころ好いわらひものとなつて、人か尊重もせんければ、敬ひもしません、況んや大切な行法などに頼む人は尙はありません、若し僧で破戒すれば、責梁經に曰く、若し破戒の比丘、自から惡を知らざれば八輕法を得、何を八となす、一には愚痴となり二には口瘡、三には身を受くること矮陋、四には顔貌醜惡見る者嗤笑す、五には身を轉じて女身を受け貧窮の使婢となる、六には其形瘦せて壽命を天損す、七には人敬せず常に惡名となす、八には佛世に値はず、と、又宜はく、犯戒の人は畜生と異なることなし、木頭

と異なるなし、と、斯様な次第なものぢやから、丁度酔ッばらひが糞坑に落ちたやうで、誰れも救ひ人かありません、是れは本んの替へてあッて、戒法を受けられたあなた方に申すと思ッてはなりませんし、又大切な戒の後へ、斯様なことを申しては、甚だ尊敬の心を失ッて、相濟んことに思ふが、ソコか拙僧の老婆心で、轉はぬ先きの杖じや、諸佛諸菩薩御免なされや、

昔し宋に不賢といふ人かあッて、寺にゆいて戒を受けて歸りました、歸る道が甚だ悪るくッて、れ負けに闇の夜と来て居るから三進も三進もいかん、盜賊があとを尾けまして、不賢を呼んで金を奪はふとすると、不賢は、れ前は何じや、金を出せといふのか、私しが懐ろには少しも金はない、ある人から奪るがよい、すると盜賊は金がなくは着物を脱てゆけど、今度は着物を取りにかへりました、不賢は叱り付けまして、潰様は少しくらゐ斯しがわかるか、ナニ斯しが分るか、飛んでもないことをぬかし居る、人間だもの分らないでぞッするものか、オ、左様か、人間じやわら分るとは蒸じけない、私しは又犬か狼かと思ッた、何だ馬鹿にするな、イヤ馬

鹿にするぢやない、其様なら言ッて聞かせる、誰しんで承たまはれ、我今貴様の爲めに道を説くが、人の物を取るといふのは抑も如何なる罪であるのぢや、ナニ道を説く、道を説くもすまじい、盜賊じやから金を奪るのぢや、ソレじやから犬か狼かとらふのぢや、人間なれば誰しんで聞け、夫れ人間といふものは善生最勝なもので、人間の姿な形ぢやもつて生れて来るには、大層な後徳ものといはねばならん、盜賊のやうなことをすると、又惡道に生れにやならん、ナニ善道を修めて大覺位には登らんのだぢや、今我れば三界の大導師なり、若し能く就て學びなば、無上の寶を與へ取らせん、學ぶや否や、ナニダ寶を呉れる、學ぶとは何を學ぶじや、貴様は福にして人の惡むことを覺え、曾て安き心るもあらざりしならん、夫れ安き心るのなきは惡事を爲さんとすればなり、若し翻へつて善事をなさは、大道狹しと通らるゝに、常に人の居らぬ斯やうな林に隠れ、日影を住居とする有様は、暗黒地獄の境界じや、學ぶといふも十日か二十日、其上無上の寶を取らせん、貴様は惡事を覺ゆる思慮あり、何を善事を學ぶの機根なからん、教えて成らないこともなからん、イ

「我家へ同道せんや、盜賊は煙に巻かれたやうに、東か北か分がわからず、實かはしさに承諾して、アは學ぶといたすか、實のことは忘れまいぞ、イヤ決して忘れんナニ其様ことを言つて、偽はりを言つて連れて往つて、役所へでも突き出すだらふよらう〜、イヤ偽はりにあらず、若し茲にて能くば、石上にて道を説かん、イヤ偽はりでなくば参りやせう、茲じや塞くて堪らんから、ドーせ悪るいことスリヤ何時か一度は、屹度細目は支ぬかれない、モシ突き出されたら其れまでだ、年貢の納め時とれもつて断念めるは、ア偽はりでもよいから参りやせう、何分れたのみ申しやすせ、オ、能く承知して呉れた、嬉しいぞや、貴様一人實を得れば、又其實か子を生んで、何ぼどの實となるか知れん、モシ〜れ嘶しの途中だが、其實は何ぼぞ致しやす、何に實の直ひか、無償といふので償ひはないじや、但し安償では決してない、イヤ歸らふと盜賊と連れだちて、不賢は家に歸りましたが、是より甚深の道と學ばせ、五日にして寺へ往つて懺悔滅罪せしむるに至り、終に佛果を得させたといふ、ドーです皆さま、個様にやらねはなりません、是れでこそ戒をうけて、大覺

位になつた甲斐があります、實に無償にして無上の實を興へたでせう、嬉しいことじや、

第拾八席

(修證義第參章受戒入位第拾七節)

諸佛の常に此中に住持たる各々の方面に知覺を遺さす群生の長へに此中に使用する各々の知覺に方面露れす是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を爲すを以て其起す所の風水の利益に預る、聲皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす是を無爲の功德とす是を無作の功德とす是れ發菩提心なり

ナテ此御發題は修證義の第十七節でありまして、先づ受戒入位の勸らき振りを示し遊ばされて、此第三章を結びなされ、更に第四章の發願利生を呼びなされるのじや、持戒の功德妙用といつたら、實に大層な鹽梅で、大覺位の境界からながめて見ると、佛けと衆生との間だがらが少しも隔たりのあることなく、少しの滯はりも見ぬない、此圓融無礙の様子を諸佛の常に此中に住持たる各々の方面に知覺を遺さす群生の長へに此中に使用する各々の知覺に方面露はれずとは仰せらるゝのじ

かつ諸佛は戒を受けて持たれる諸佛のことぞ、大衆位の皆さ方のことじや、た
 どは新參の佛けぢも、萬事萬物本性本徳の戒法が分れば、古參の佛けと同じことじ
 や、其佛けながら皆な戒法の持主じやから、萬事萬物に知覺を成じません、ナゼか
 とらふに一方の群生、あつゆる姿た形もどめらして居るものも、皆戒法の持主じ
 やから、れ前さんが佛けごまで御座るかども、戒法の持主で御座るかども、何のこ
 ころも起して来ない、双方が戒法の持主じやから、佛けじやからとて尊ぶくもなく
 衆生だからとて卑やしらわけではなし、森が山は自づと高く、水は自から長しで、
 むらゆる佛け、むらゆる群生、一味一体甲乙なく上下なく、諸佛及び衆生が常に常
 住佛性の戒法によりて鎮らぐから、世界が自づと泰平なのじや、言は、柳は柳の如
 く戒法といふ職分を怠たることなく、花は花の如く戒法といふ職分を守りて、縁り
 は長へに縁りなれば、紅ひは長へに紅なるなのじや、酒屋は酒屋の職分を守り、餅
 屋は餅屋の職分を守りて、分際を乾度まもると、誰れのを陰もないやうなもので、
 向ふがらも向ふとお辞儀をしたら、此方もれ早うとれ辞儀として、各々其本領を

失なはないから、いければ、も皆唯我獨尊となつて、世界の莊嚴が自から出来の
 わけではないか、此圓融の妙合の有様を悟りたいから、散々遠くを探したが、何に
 も其様な遠方にはなかつたのじや、すな、此戒法が分るやまになると、一切の諸佛
 又は衆生どもが、此常住の一体三寶の理の戒法の持主となりて、無礙無礙の境界に
 あるのじやから、萬物の外に心るもなく心の外に萬物はない故に心境不二となりて
 佛もなく衆生もなく迷もなく悟もない、故に一佛成道して法界を親見すれば、有
 情非情同時に成道すといふじや、此圓融妙合の無礙無礙の有様を次の御文に、是時
 十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て其起す所の風水の利益に預る、
 皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親と悟りを顯はす、是を無爲の功德とす、是
 を無作の功德とす、とのれ示じや、何ぞ大層なことになつたじやありませんか、是
 時と成悟りもなく迷ひもなく佛もなく衆生もなく、心と境と不二になつて、自由自
 在なはたらきを爲す、即ち斯やうな時、盡十方法界の土地であらふが草であらふが
 木であらふが、又の殿堂だ塙だ瓦だ礫だ、こんなやうにさま々々ありとあるものが

謂ゆる一切の万物万事が、みなことごとく佛事の作用をなすから、其万事万物の起すところの風や水やの戒徳のはたらきにあづかる、徳澤の風水の利益にあづかるものどもは、一として残すところなく皆な甚深微妙の不可思議の戒光の功德に照され何時の間にやら感化せられて、何れもみな親き悟りを顯はすのじや、斯るはたらきを爲すのは、實に戒法の功德じやが、其又功德じやの、戒法じやのと、名のつくものもないので、誰れがした彼れがした、誰れの陰でもなく、彼れの世話でもないから、假りに名を付けて又、是れ無作の功德なり、是れ無爲の功德なりとのれ示してあるのじや、無爲の功德無作の功德も是又名で、畢竟は本性本徳じや、併し本性本徳も又名じやから、甚深微妙不可思議といふのじや、茲のれ悟りになれば、夫れで佛敎の目的を達したのじや、だからこれだれ仕舞といへば、是れで何處からでも尻りは來ぬが、茲は我佛敎大切なところじや、是れ發菩提心なり、と次の第四章の發願利生を呼び出してあります、先づ一應受戒入位の結末をつけて、かやうになつたばかりでは、一向面白くないものじやから、是れから已れくの舞臺となるの

で、一番踊つて見せにやならぬところじや、だから漸やく發菩提心なり、こゝは餘程わかりたいところで、還相回向ともとなへ、回光返照ともとなへ、還來穢土ともとなへ、我曹洞特有の名といふのは、却來或ひは退歩などいふて、來た道を後へ歸へるといふほどの事じや、後へ歸つて何を爲るかといへば、即ち乘生濟度をするので、已れが佛けになつたばかりじや、佛けではないのじや、佛には慈悲の徳と智慧の徳のあるのじや、一切乘生我子なりとも仰せられて、我子を育てあげるのは、おのれの跡を取らせたいからのことじや、ソコテ却來とか退歩とかいたして乘生濟度を發願するので、ソレで發菩提心と仰せらるゝのじや、じやから皆さまも、今は佛けになられたのじやから、菩提心を發しなされて、宅へ歸りになりましたら、御親父なりねつ母さんなり、又忝れや娘子たちに無上道を教へしなされるがよろしい譬へは學校の生徒たちが大學院を卒業して、博士號を受けたやうなものじや、已に大學院を卒業すれば、世間に向つて威張れたものじや、道理の上からあらはれたものなら、何んでも知れぬといふことなく、自由自在な境界じやが、夫れで澄し込ん

てしまつたら、何の役にもたぬやうなものや、ソレ黒死病が始まつたといふから、何處へでも乗り込んで往つて、其病因を探つて来て、斯様すれば癒るとか、此藥を呑ませれば回復するとか、已れの覺悟した道理を、世の中に施すから、夫れで大勢が助かるのじや、今より何年たつといふと、慧星が出て来るが、一番研究して見ようとか、今年の何月何日には輪環の日蝕が始まるから、一番何んな結果が出来るが、一ツ研究して見やうといふので、大金かけて見ゆるところへ出でゆき、歸つて来て其おもひさを披露するから、學問上又一ツの經驗が出来たとか、世間は大利益を興へるので、甚だ面白いことであるが、佛の位に登つたから、是でよいではなんにもならん、十界の内には聲聞緣覺の二ツがあつて、此位に入つたものは只自分さへ悟ればよいので、世間はドーなつてもかまはぬのじや、じやからこれを聲聞根性といふて、佛法上からいやしむのじや、ソんなことを致さぬやうに、發菩提心なりと仰せられて、却來して衆生濟度をするのであるとのれ示しじや、
 捕判官正成といつたら、誰知らぬものもない忠臣な方じや、津の國兵庫淺川に於

て討死せられた時の、自身もかねて覺悟の最期じや、謀計は用ゐられず、是では軍さの仕用がないとて、内外のものにも夫々遺言して、扱總領の一子帶刀正行にひかひ、汝は當年十一なれども、我がいふところを能く聞けよと、紅梅の昔みのやうなる、愛らしき正行の顔を見つめて、今日こそ實に娑婆で親子の見納め、これが別れか悲しやと思ひて、差しもに狂けき楠なれども、鏡の袖に涙をこぼして、イカに正行、若し我れ今日運つさて、討死を爲すときには、天下は曾氏の天下となりん、主上は如何にならせたまふか、若しいつ方に御在すとも、行在所うけたまはらば、急ぎ駆せ付け御助勢いたせ、其時の用意として、殘る一族の郎等を扶持し、痛はりかしづけ御軍の、心をなやませしめておきたるな、軍を起して朝敵を亡ぼし、主上を御世に立てんこと、其方の本分なるぞ、汝はこれより宅に歸れど、櫻井の驛より故郷に歸らせ、其身は淺川に討死せられた、然るに曾氏の計らひにて、判官正成の首を故郷に送り、郎等に届けさせた、左しも名高き勇將にて、鬼をも神をも恐れしめたる英雄の昔しに替る首の有様兩眼よさがり肉落ちて、サも哀れさを浮べて居らる

る、一家中の面々は首をななめけて、涙をこぼさぬもの一人もなく、中にも奥方と正
 行の愁歎、何にたとへやうもないことじや、人目もわかす身もたぬして泣かれける
 も道理じや、帯刀正行は流るゝ涙を押へて、持佛堂のかたへ立てゆく、奥方は心ろ
 もどなくおもはれて、跡をついて忍びうかゝひたまへは、佛前に両手を合せて、父
 上且らくれた待たまへ、追付拙者も泉下のね供と、父の形見の菊水の刀を脱ぎもち、
 袴の腰を能くく押し下げ、座をくつろけて胸引き開き、アハヤ自害と見なれば
 母親は後ろの方から、走り寄つて抱きつき、刀もさ取り取り支へて、流るゝ涙だせ
 さどめあへず、イカに帯刀承たまはれ、栴檀は二葉より香しく、頻迦の鳥の聲は卵
 より諸鳥に勝るとある、汝れさなくとも父が子ぞ、何とて斯ばかり狼狽したまふ
 ぞ、自害して何とせらるゝ、子供心にもおもはれよ、父の判官正成殿が、兵庫へ赴
 きたまひし時、櫻井の驛より歸されしは、跡とむらひとの爲めにもあらず、腹切れ
 ども救えたまはず、正成もしや運つきて討死すれば、天下は尊氏のものとなる、汝
 歸りて郎等を扶持し置き、御軍起して朝敵を亡ぼせよと、父が呉ゝの遺言ならず

や、汝に語り聞かせたる、言葉は既に忘れしよな、左様にアドなき心底では、父か
 譽れを失なふのみか、主上の御用に得たつまじ、行末さそと案じらるゝと、席を叩
 いて涙きたまへば、父の遺訓母のれさとし、ヒシと肝に銘して、座席の上に泣
 倒れ、眞實思ひ止まりましたと、母に詫び、父に詫び、是より朝敵亡しの道を勵み
 終には父には劣らざる、武勇の譽れを殘されたが、ドーじや皆様、今佛位に登られ
 たは、己れ獨り澄して居るのじやない、三毒の朝敵に圍まれて居る、衆生が澤山あ
 るじやらん、これを亡ぼす爲めの發願じやほどこに、正成の遺言が何處に當るか、母
 の教訓か何處に當るかよくよく考へて見らるゝがよい、

第拾九席

(修証義第四章發願利生第拾八節)

菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し發ひなり
 設ひ在家にもあれ設ひ出家にもあれ或は天上にもあれ或は人間にもあれ苦にあり
 といふども樂にありといふども自未得度先度他の心を發すへし

扱此御發願は修証義の第四章、發願利生の菩提門となりまして、これが第十八節で

ありますのじや、ソコで前席にも申した通り、授戒して佛位にのぼりますれば、それで済んだとれもつてはならぬ、大千世界に譬へるものゝない、尊とい位に即いたのじやから、これで済んだとたぼしめすも、無理な考へとはれぬが、茲か我が宗専門のね嘯しで、天子になつたらそれで人間のことは済んだかといふのに、決してろうでない、ソレ津田三藏か露國の皇太子殿下に無禮をしたと言ッては、至尊をもちへりみたまはず、遠く往いて御慰問遊ばされ、ソレ支那と戦争が起つたと言へば、遠く往いて御親征相成る、其外平生じやからとて、百官を置いて其上を御監督遊ばされ、何處までも慈愛の心をもつて民百姓を憐れんで下さり、賞罰を設けて國を治めて下さるから、我々互ひは泰平に暮して居らるゝのじや、丁度かやうな塩梅に、大覺位にのぼるへさをそれを一足引さ退りて菩薩の位地に下り来て、菩薩の大願を起して、衆生濟度をいたすのじや、これを自未得度先度他といふのじや、それから、茲に度すといふ字があります、これに少し眼をつけて貰ひたい、是れまでのところでは、悟りとか迷ひとかに苦しんだけれども佛位にのぼれば迷ひも悟

りも入らぬから、此度は他に向ッて、六道の衆生を濟度するので、言は、これのれより下のものに向ふ言葉じやから教へてやることになるのじや、ソレから發願じやの營なむのといふのは、一体ぜんなことかといふのに、一切衆生に利益を興へてやらふと發願して、シテこれのが是まで學んで來たやうに、生を明らめ死を明らめしめ扱はさまゝの道を踏んで、漸やく受戒入位となつた次第を、他に向ッて教へてやるのを、營なむといふのである、テ度るといふのは如何なるわけかといふに、迷ひの此岸から悟りの彼の岸へ度ること、言は、私しはマア〜どうでもよいから、れ前さんたちが早や向ふの岸へおわたらなされと、ぜんぞと見るはどの人を導いて向ふの岸へ送ッてやるのじや、それから迷ひと悟りの間には川が一筋あるのじやが舟で度るか泳いで度るか、といふに勿論我祖師門下の教へでは泳いで度るに違ひない、じやから泳ぎも上手でないで流れて往ッて仕舞ふから、是では利生の甲斐がない、ソコで懺悔滅罪の水練卒業の證書を興へて、是でよい決して溺れも流れもせんから泳いで往ッて受戒入位の悟りの岸へ着くと教へるのじや、設ひ在家にもあれ設

は出家にもわれ或は天界にもわれ或は人間にもわれ苦にありといふども樂にありといふども此心を發すものは誰でも彼れでも皆大導師なり皆慈父なのじや、だから在家にもわれ出家にもわれ或は天上にもわれ或は人間にもわれ、苦にありといふども樂にありとするども、かやうじや、テ苦にありといふどもとあるは即ち三惡道の衆生のことじや、設ひ三惡道の衆生たりとも、一念此善提心を起せば、一切衆生の大導師じや、じやから早くこの心を發せよと示し下さる、アすから誰れも發さにやなりませんけれども、若しも在家の人ぐは、出家といふ本職があるから、ソンのことは此方の役じやない、何様不得でもつくやうになんど、ツマらぬことを考へらるゝかも知らないが、それでは在家にもわれ乃至苦にありといふどもとあるれ示しに背く、佛祖の垂示に背くやうでは、誠にすまぬことじや、じやから其様な心を發さず、其身柄ぐの分際を言はず、在家出家より下も地獄の衆生に至るまで此修証義にあるれ言葉には、一言半句でも背かれぬのじや、電光石火と火花を散らして、一生懸命で戰つて居る、其刀の下へでも何でも、れのれを忘れて飛込んで

往つて、コレ何をするのじや、コレ浮雲ないことするじやないか、早く止めるよ體我をするごと、かやうな場合にのみやうな時もないと言へぬ、若しあるとしたときには我れを忘れて救ふのが、此發願の仕方である、

譬へば佐倉宗五郎の老居を見るか如し、宗五郎を始め母と子供を縛して、鬼畜のやうな役人どもに責め立てられ、宗五郎夫婦を松の木に栓しあげ、之を上下して其苦悶を増さしめ、肉飛んであたり腥ぐさく、口血を吐いて垂れ滴たり、流れて衣を赤くならしむ、妻をれを見るに忍びず、眼をどちてあふぎ見ることなし、又妻を責めて均しく松の樹にかけ、打擲至らざるところがない、又是れ血を吐き衣を潤はす、既に夫婦は半死半生、氣息奄々只肩のあたりの動くを見るのみ、ア、是れ何の殘酷ぞや、又ゆるめて藥を與へ、生氣に歸らして今度は子供を責むるを見せしむ、夫婦はドーして見て居られう、目を閉ぢ首らを低んとすれば、笞杖をもつてたどがひを支ぬ、指をもつて眼をひらき、是非とも子供の苦思を見せしむ、子供は轉々して只泣くのみ、泣で終に聲を出さず、死すれば藥りを與へて更に活し、而して又夫婦を

責め、代る／＼これを責むること數回、見るもの皆な感激して、偽りと知りつゝも偽りと思はず、涙と共に役人を懐らみ、何れもこれを悪まざるはない、此時に當りて其感のもつとも深きものは、踊りて舞臺に飛ひあがり、もつて役人の手をといて大喝一聲何を仕やがる、太い奴じやと拳こつで打んとす、斯様な次第になつて來るのも、何様いふわけじやといふに、畢竟宗五郎が我身を忘れて人を助くるの心ろからじや、是れは只芝居じやが、芝居でさへ見て居られぬ、實に世間を見渡して見るとコンなどころもたんとあるのじや、佛眼からはコンなことを決して見て堪らへて居られないじやから、何處へでも濟度にゆくのじや、決して先度他を忘れぢやありません。

昔し奈良の都に浪上覺右衛門といふ人があつて、相應な毒しもして居り又貧民をいたはりて、随分善人であるのじやから、他人よりは善人とも呼びさうなものじやか如何なることか此善人を指して、嫌はれの覺右衛門といはれた、何ゆゑ左やうな名が付いたといへば、向ふの家へ立寄つても佛道の嘶しを始まり裏の家へ往つても佛

法の嘶しを始め、右へ往つても左へ往つても、又は親類縁者のところへ往つても佛法の嘶しが始まるといふと、ドーも尻が長くてしかたがない、袴を立てゝも草履へお灸をすゑても、更にその功能はないじや、殊に親類縁者などへ往つた時は幾晩でもくでも泊り込んで居て、いつ歸るか分らぬ様子じやから、來られるといふと何處でもこまるのじや、其様などころから嫌はれの名が出来たらふが、何時となく是嫌はれといふことが、家内のものゝ耳へ入つて、ね親父さんや、あなた何處へゆかるゝも宜いけれど、あまり長居をなさらぬやうに、人に嫌はれてなりませんよ、ナニ嫌はれると、うればまた如何なるわけじや、イヤ死ぬの生れるのといふやうなことや因果の道理がこうじやとか、地獄へ落ちるの餓鬼道へ行くのと、人は皆な延喜でもないツて、否やがツてなりませんよ、ハ、ア夫で私しを嫌ふのか、よし／＼其様なら大丈夫じや、私しから嫌はれと名乗つて出で、それを看牌になは嘶さにやならん、馬鹿な人達もあるもんだ、ソレは宜がね前達は、些とは道理か知れたかねハイ善の上げ下しにもね嘶じや能く分つて居りますよ、ダがネ、餘り余所のうちへ

第貳拾席

(修證義第四章發願利生第拾九節)

其形陋しといふども此心を起せば已に一切衆生の導師なり設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり男女を論すること勿れ此れ佛道極妙の法則なり

サテ此御養題は修證義の第十九節になりまして、前席に置きまして、設ひ在家にもあれ設ひ出家にもあれ、或は天上にもわれ或は人間にもわれ苦にありといふども樂にありといふども、早く自未得度先度他の心を發すべしとのれ示しに相續いたすので、其苦にありといふども樂にありといふどもとある御言葉に引つゞく次第じや、依つて茲の冒頭に仰らるゝれ言葉に、其形陋しといふどもと仰せらるゝのじや、ナゼ其形陋しとのれ垂示じやと言へば、ドーせ惡趣の衆生に遠くない、惡趣の衆生いづれもみな陋しさものじや、蛇でも百足でも犬でも猫でも、扱は鬼畜夜叉羅刹いろくさまくゝの姿な形ちは、逆も人間天上の如きでない、人間天上もまた三十二相備はりたる如來の眼から見らるゝ時は、陋しさものに違ひない、其陋しさうち

にもさまくゝあるけれども、何様なかたちの生きものでも、二目と見られぬ有様なものでも、其形には拘はらない、此菩提心を發すときは、地獄の衆生餓鬼道の衆生といはず、既にくゝに一切衆生の大導師なりとお示しに相成る、此れ示しに依るときは、設ひ百足でも蛇でも一切衆生の大導師なのじや、ドーも變な次第じやが、茲が眼の注げどころであるのだ、實に發菩提心は有難いものじや、前夕申すとほりに、四趣の衆生は悉く不惑なものはないので、よしんば人間を濟度するには、是非とも人間の身を拵らえ出して、これに御仲間入りをして、そうして人間に漸して聞かせなけりや、何じやか事が分らないやうなもので、猫を濟度するにも其通り、猫の仲間に入りて、シテこれを濟度するのじや、皆な其やうな次第でありて、佛けさせたまちが憐愍のあまりに、其やうなことをなさるゝ事は普門品に説てある通りじや、提婆といふ人は中くゝ惡い人であつて、言ふに言はれぬ惡物じやが、其嘶しを聞いて見ると實に驚いて難有男である、何はと釋迦如來に敵對したか、何はと佛け様を苦しめたか分らぬ、大さ石を投げつけておん身から血を出し、阿羅漢を殺ろし惡人を

かたらひ、五逆の内の大罪は大概犯した、夫から瞿伽梨尊者を弟子とし阿闍世王の如きを檀那とたのんで、五天竺十六の大國、五百の中國等の惡漢といふ惡漢は、皆提婆が一類であつたのじや、じやから厚さ十六萬八千由旬で、其下には金剛の風輪ある、大地が忽ち破れて生ながら無間地獄に墮ち、餘の共に墮ちたるものも何程もツたか知れない、これを能く洗つて見ると、根は釋迦如來の御教訓を受けられた如來様のね仕事じや、ぞ見すく地獄へ落とされたのは、若し人釋迦如來の御說法を誹謗し妨害して悪いことをしたものは、私しのやうに此通り地獄へ墮るとぞ、御手本をた示し下されたのじや、又成等正覺の佛げ様であるのに、假りに婆竭羅國王の女と生れて、八歳の時に釋迦如來の說法に逢ふて、忽ち菩提心を起し、刹那の間に變じて男子となり、菩薩の行を具足したとあるが、至極味はひのあるところじや、じやから七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、と仰せらるゝのじや、よし七歳の女流でなくとも設ひ三歳の童子でも、ソんなことには堪屈は入らぬ、男であらふとも女であらふとも、決して論も糸瓜もいらぬ、じやから

男女を論ずること勿れ、此れ佛道極妙の法則なりと、た示し下さる、これが自未得度先度他といふので、佛道極妙の法則は御示しの外にないのである、故に自未得度先度他を、已れを忘れて營むのである、去れば慈父なり導師なり、決して疑ふてはならぬ、

壁へは狐狸の化けると言ふやうなものじや、狸一夜、月下の薄さを友として、腹敷を打つて楽しんで居ると、狐其うしろを伺がつて居つて、且らくすると敷の隅子に乗つて面白くなつて來たから、例の寶珠を三たび撫でると、十七八の別嬪となつた狸の前へ踊り出してカツボレを始めたところが、狸は驚いた、オイく誰れじや、何ものじや、尻尾なんぞぶらさげて何の真似じや、女にしてはドーも變じや、一体ね前は何ものじやい、ウン巴れか、巴れはな、此裏の明神の森の古狐よ、貴公が面白ううに嘘して居るから、貴公が例のね得意のやうに、一寸此様なものに化けて見たのよ、ソウか其奴は面白い、貴公も化けたまゝにして居て呉れ、巴れも今にヒョットコに化けるから、マテく其りや何様じや、甘く化けられたか見て呉れ、オ、

甘い／＼イヤ矢ッ張り尻尾が出て居るせ、イヤッ化け直さなくても宜いよ、サア願
 るから噤せといふので、大騒ぎをやらかしたたが、狐も狸も草臥れが出て来て、一体
 みやりながら、ア、面白かった、ナント狐、貴公も化けることは黒人の内だが、お
 れもまた貴公に負ない大關の積りだ、ソニデ二人とも是までのやうな悪いことをす
 る化け方では、人間から嫌はれていけない、モー／＼一ツ目小僧や見越入道のやう
 な、アンな化け方は止めにして、何とか爲めになる化け方をやらふじやないか、な
 るほど、ソリヤ宜どころへ気がついた、貴公の悪ものに似ない考へた、これも人間
 からは、箱荷さまだなどと敬まはれて、正一位の位まで持つて居ながら、祿なこ
 とは些ともやらない、折角病氣の癒るやうにと、油揚を持つて来て、喰はせ呉れる
 のを宜氣になつて、何とも思はず喰つて居る、それはかりなら堪忍もされやうが買
 って持つてゆく後ろから、横取りして取つて喰たり、お負けに二廻りも三廻りも廻
 らせて僅かな道を夜明けまでかゝらせたり、悪る三昧をやらかしたが、いま貴公の
 断しで氣が付いた、これも爲めになる化け方をやらふや、先づ取めへす何がよから

よ、イヤ貴公の賛成を得てられもうれしい、兩人合棒で働らいたら、随分面白いこ
 とが出来るせ、ソッサ兩關の働らさじやから、ハマなことはやらないのよ、ドーだ
 一番紙幣も化けて、世間の貧乏人を助けやろうじやないか、イヤ其りやいかん、請
 取つた人に氣の毒だ、ナニ左様でない、大盡な人にはいくらもあるから、些とや少
 ツとなくなつても、功徳をさせてやるのじやから、ソんなことは構はないよ、ウン
 溜る奴つは施せなんぞと言たとして決して施すものじやないから、知らないやうに功
 徳をさせてやるのだよ、ナルほど、一ト理屈あるやうだ、では早速やらかうよ、ド
 ーダ今夜は、モー遅いが、明日の晩から始めやう、ウンそれがよからよ、夫れから
 ネ、今夜も八兵衛さんのところで、權兵衛の高利貸が来て、酷い催促をやらかした
 が、明日の晩に出来なければ、釜を抜いて持つて往くツて言やがツたせ、明日ネ、
 八兵衛さんの通る先へ往つて、兩人が一圓ツ、になつて居やうじやないか、イヤだ
 めだ、モシ八兵衛さんのやうな正直な人は、屈けて出るかも知らないせ、とうか成
 程、シヤア貴公は観音に化ける、これは紙幣になつて貴公に持たれて行くじや、シ

貴公眞面白でいふのよ、汝が八兵衛、汝が信必届いたから、今汝を助けてやる、
 權兵衛が来たらこれをやれ、イヤ甘い、成程面白、じゃア貴公十圓紙幣に化
 ける、權兵衛からは眞成の釣りを出させるのじゃ、ウンます、面白いな、じゃア
 貴公へマな眞似をしないやうに、いか、じゃア是から往て八兵衛さんの枕元へ
 ツ、立つじやぞ、ウン宜しい、サア往ふといふので確かに相談を定め、八兵衛に手
 渡しいたして、急難を救ふたやうな次第で、悪趣に墮ちて居る衆生ほど可愛いもの
 じゃから、自未得度先度他で、何様しても憐れさが懸るのじゃ、此あはれさが懸る
 のが導師じやからじや、慈父じやからじや、畜生でも此通りじや、
 昔し唐の世に大悪人の悴れを持ッた、王氏といふ人がありました、家は富み榮えて
 何にも不自由はありませんが只悴が大悪人じやから、只これが不足なばかりじや、
 次女はまだ乳母をそへてあるほどの幼ないもので、蝶よ花よの可愛盛りじや、或時
 悴は親父が厳しき異見を加へると、悴れ奴は刀を持ち來りて父親に切ッてか、ツた
 から、叩き拂ッて家を追ひ出したら、其儘行衛も知れずになツた、扱追ひ出しは追

ひ出して見たが、親の慈悲は何處まで可愛いものであるか、雪の日や不孝ものめの
 居りどころ、此俳句の通りなもので、今は何處に居ることやら、此寒いのには飯も喰
 はずに居ッたら、空腹くて堪るまい、もしや盜賊でも働らいて、お官の御尼介にで
 もなッては、居ぬか、今に尻でも來はせぬか、斯様なに御膳も揃ふて居るが、此刺
 身でも遣りたいとか、此れ平を喰はせたいとか、少しも悪人を忘るゝことなく、夜
 の目も落付て寝たことがない、案じ暮らすこと最早や十年の餘じや、いつの間にか
 此兩親もれどろへて、次女も大きくなツたれば、悴れが今にも歸るか知らん、歸ッ
 て來たなら改心させて、此跡をやりたいものじやが、イヤ、わんなやつは仕方
 ない、寧ろ斷念らめて次女に嫁を、イヤ、今晚にも歸るか知らん、イヤ、嫁を
 貰ふとしやうと、どつれいつに思案をしたが、いくら待ッても歸つて來ず、年も段
 々と取ッて來るから、終に胸を定めて嫁を貰ふことにした、幸ひに近邊に張奉基
 といふものあり、學問も出來容貌もよし、智もわり徳もわりて誰れうやまはぬもの
 もない、これに相談をしかけると先方でも厭とはいはぬ、ろんならといふので、こ

れを賣つて、漸やくに跡どりは定めた、孝基は王氏の強となつて、ますます空固な
 行なひなれば、これは付けても悪人の悴れを思ひ出し、明けても暮れても悴れのと
 とばかり、思ひつゝけて居るうちに最早や三年、孫の顔も見るやうになつたれば、
 血を分けた悴れより腫まじく、浪風一ツ起つたこともない、時に両親とも重き病ひ
 にかゝつて、何方か先へ往くことなるか、父親は孝基を枕元と呼んで、我れも今
 にも知れない様子じや、家財田畑は残らす其方に譲り渡す、随分娘を不便がツて、
 中よく暮して下されや、時に追ひ出した悴れであるが、今端の際の一言だ聞て下さ
 れ冥途の絆しとなるものは悴ればかりじや、もし今夜にでも尋ねて来たら、何卒ど
 一食でも興へてやつて下され、是れで外に言ふことはない、頼み申したぞやト、
 言ふかそれもへばそれでひなくなつた、なんと皆さま此因縁を何と思はしやる、
 慈父といふものは此様な次第なものじや、悪趣に居るものはさ不感なものはない、
 此親が悴れとれるもやうに、悟らぬ衆生をねもふのが、即ち慈父じやと仰せらるゝ
 のじや、能く合點して見やれよ、

第貳拾壹席

(修羅殿第四巻 願利牛第貳拾節)

若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も其輪轉の因縁皆菩提の行願とな
 るなり然あれは從來の光陰は設ひ空く過すといふとも今生の未だ過さざる際たに
 急ぎて發願すべし設ひ佛になるべき功德熟して圓滿すべしといふとも尙は廻らし
 て衆生の成佛得道に回向するなり或は無量劫行ひて衆生を先に度して自からは終
 に佛に成らす但し衆生を度し衆生を利益するもあり

此御寶題は修羅義第二十節でありまして、前席に述べたやうに、設ひ如何なる衆生
 でも、一念よと人の爲めになることを思ひ發すと、それが其まゝ慈父じやと導師
 じやとよと仰せらるゝ、それで慈父じやと導師じやとよのれ示しが、何様な墮梅
 になるかといふに、即ち斯様であると、其様子を茲で垂示になるのじや、テ其様
 子は何様かといふに、若し菩提心を發して後には、たとひ尙は六趣の卵胎濕化の
 四生に生るゝとも、未れば皆衆生濟度の爲である故、何様な醜くいものに生れて出
 ても、其一切合切が即ち菩提の行願であつて、生れかはり死にかはりしながら、衆

生の濟度を仕て居る次第じや、之を異類中行と云ふて恰も觀音の三十二應身の様なものである、故に我々皆様たちが、受戒入位をされたれ方が、此から六趣四生に輪廻せられても其輪廻は決してほんどうの輪廻ではない即ち衆生濟度の一方便であるからして之を避けてはならぬ、必ず自から進みて六趣四生に輪廻せねばならぬ、卵胎濕化とは六趣の衆生の生れて來る次第で卵から生れて來ものは鳥のやうなもの胎から生れて來るのは人間や獸類のやうなもの、化生といふは天上や修羅やまたは虫のやうなもの、毛虫が奇麗な蝶になるやうなもの、濕から生れて來るものは蚊のやうな類なもの凡る天地が廣いと言つても、此四ツの外に生れやうはないのじやるれから此やうな卵胎濕化の四生のうちでも、今は懺悔滅罪して、受戒入位もすみ此菩提心も發すやうな此人間も、是れまでこそ知らずに來たれ、れ示しを聞て見たらば必ず大願を發さにやならぬ、故に御文に然あれは從來の光陰は設ひ空く過すといふども、今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて發願すべしと、重ね々御親切なお言葉じや、テ又御文に設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふども尙は廻らし

て衆生の成佛得道に回向するなりとのお垂示じや、これはおのれが、かよふに戒受入位もしまた此發願もするやうな功德があらはれて、妙覺果滿の三十二相八十種好の位らむになるほどの結構な身にありなから、尙はるの功德を惡趣の衆生にひけて迷ひを去りて悟りの開けるやうにと、自未得度先度他を營なまにやならぬ、その仔細といふたら或は無量劫行ないて衆生を先に度して自からは終に佛に成らす但し衆生を度し衆生を利益するもありとのれ示しじや、これは觀音さまや地藏様見たやうなれ方を指して仰せらるゝお言葉じや、此諸大菩薩の行願といふて、れのれはいつまでも佛けにならずに、衆生の有様が氣の毒じやから、るれを見ては居られない、可愛くうでたまらないから、先つこれを濟度して、利益を興へてやるのである、るれを茲へれ出しなされて、證據をお示し下さるのじや、夫から劫のことを少しばかり嘸しいたしてれきたい、劫といふのは時のことで、大層なお嘸しになるのだが喫驚して下さるなよ、一切と申しますのは、四十里四方の大きな城がある、其城の中へ芥子の實を一抔つめて、るれを百年に一粒ツ、取り除き、るれを取り切つて仕

舞つた時に二劫となる、これを芥子劫といひ、又モ一ツ盤石劫といふがあるが、これは四十里四方の大盤石がある、其石へ百年に一度つゝ、天人が降りて来て、其羽衣で撫でて歸る、シテ其石が摺れてなくなつて仕舞つた時が、即ち一劫となるのじや、なんと大層な噺じやないか、其一劫でさへ大騒ぎじやが、無量劫とは何様な時間じや、既に無量といへば數え切れぬお噺しで、佛けの口でも名を付けて言はれぬと見ゆた、だから一口に無量劫とおつ仰つて、断念めてお仕舞なされたが、其無量劫といつが何時まで、佛けにならずに衆生を濟度してござる諸菩薩もある、實に振りかへつて見るといふと悲苦に沈んで居る衆生が多いから、此濟度に忙がしくておのれは、佛けにならふといふ暇がないのじや、かやうなれ示じやから、此諸菩薩を見習つて、自未得度先度他を心ろがけるがよろしい。

譬へて見れば氣鬱病の人と、花見に誘引ひ出すやうなものじや、モシれ續さん、此日和のよりのは何のことぞ申しますネへ、お内にはかり引つ込んでいらつしやるぞ益々御病氣が重りますよ、妾の宅は根岸じやから、今頃になるとさうよ、毎日

く上野へ往つて、櫻の花を見ますけれども、花も奇麗だし人も出るし、大層にぎやかで申しますよ、些しはお氣晴らしをなさるがよろしい、八十位なれぢいさんがね白粉をベツたりぬつて、十八ばかりの新造の眞似をして踊るやら、彌次喜多の眞似をして通る人もあり、入笑人のやうな酒の席もあり、瓢箪などを肩へかけて来る人があると、何處の人だか知れぬものを、後ろの方から口を取つて、ガブくと飲んでゆく、夫れヤ、面白ろいこと、噺しにも書にもかけませんよ、妾しが儘かに知つて居るから、嘘じやないから往つて御覽なさいナ、ハイ有難う存じます、花見も随分面白ろいそらじやが、何だか妾しは氣がすまん、何をして見ても面白くなくて、靜かなところへ引き込んで、斯様やつて居りますのが、一番樂しみでありませんよ、御親切なれすゝめですが、又氣でもひいて來ましたら、其時往つて見ませうよ、アレマア何ですやう、花は何時までありませんよ、モ一満開の頃ですか二日三日でお仕舞ですよ、成ほど花がなくなれば、又もみぢの時もありますし、四季の詠めはたへませんから、氣の向いた時でもよいやうですが、花が一番にぎや

かですよ、ソんなことをねッ仰らすと、マアだまされたらばしめして、一度は往
 ンてござらふじませな、屹度御病氣も癒りますから、悪いことは申しませんから、お
 出かけとおやりなさいな、ハイ有難う、いづれ又、そうですかア、仕方がないこ
 とネへ、此日は斯のくらのにして歸りましたが、断念もせず又翌日も来て、モン
 お嬢さま、今日は昨日より好い天気じやありませんか、風もなしおだやかで、此様
 な日和は二度とありませんよ、今日は妾しが御案内いたしますから、是非ともれ出
 かけになりませな、ドレ妾しがか橋を揃めてあげませう、サお化粧もうつくしくれ
 やりなさいな、モシ途中でれいやになつたら、又れ供をして歸りますわな、ソイヤ
 妾しが口無調法でふいますから、碌な嘶しも出来ませんが、嘶しより面白ふい
 すよ、ソレなら往くとやりませうが、何度もこんなに御親切に、あなたへ對しても
 耐がわたる、オヤ厭ですやう、是れから支度をして出で往つて見ると、成はさく
 嘶しに聞いたより百倍も賑やかであつたから、イヤ面白くてくつて堪らない、是れ
 ではまた翌日も来やうなき、言ひ出し、病氣もいつか癒つて来て、果は人まです

めるやうになつた茲じや、丁度此娘のを勤め出すやうなもので、何様しても花の上
 野を見せにや置かぬ、見せたらまた此娘めも又人をすゝめる、是れが菩薩の行願
 なのじやから、此やうに必るかけにやならぬ、
 昔し我が朝景行天皇の御時に、陸奥あたりには徒らものが憂こりまして、民百姓を苦
 しむるといふことをお聞になり、天皇痛く震慄を憐れませたまひて、如何にせば宜ら
 んかと、御思案に沈ませたまふところに、勇猛に渡らせたまふところの日本武尊
 は、天皇に請ふて仰せられけるには、磨砕きてこれを平げ申さんと存するが、許さ
 せたまふや如何にと、天皇は幸ひのことに思しめされて、然らばとて許させたまふ
 た、スルと尊は喜び遊ばされて、急ぎ軍備をとのへ、御息所の橋姫を召し
 具したまふて、天皇にお別れ都を出で立たもふた、荒磯の東夷、如何に掻けくやわ
 りども、民百姓が不惑なり、争でか其まゝに置くべきぞと、勇氣凛々斗牛を貫ぬく
 御有様、羅刹阿修羅諸王ども、卒来い來れと進みたまふて、駿河の國へ至らせたま
 ふ時、此どころにも賊ありて、尊を害し奉まつらんと、偽はり欺きて降参なし、甘

ま／＼と尊を迎へまいらせ、御狩りをねすゝめまゐらせて、廣野にれ誘ひ奉てま
つりて、風かみより草に火をかけ、尊を焼き殺さんといたした、火は廣がりて原野
一面、今や焔の天地となつた、尊も今は遁れたまふに道なく、賊に死地に陥りたま
へり、最早や詮方つゝさせたまひて、傾きたまひてありけるところの、天の雲の
御劔を抜き持ちたまひ、御手にまかせて艸を薙ぎ立て、如何にもして連れんものを
と、勦らかせたまひたり、然るに尊の御威徳にや、風の向きが替り來つて、賊に向
つて吹出した、尊は煙を取り出したまふて、向ひ火を放ちたまふに、焔々として勢
ひ盛んに相成つて、賊は残りなく焼け死にました、是より此雲の御劔を呼びて草
薙ぎの劔ぞといひ、此土地を呼びて磯津野とは申しつたまふといふ、尊は是よりすゝ
みたまひて、船に召させて上總に移らんとしたまふところに、風浪烈しく荒れ來り
て、御船は今にも覆かへらん有様じや、其時御息所の橘姫にれかせられては、是
れ必らず海神の祟りならんとおぼしめし、吾が身を捨て、海神に捧げ、尊に代り申
さんどて、見るとへ恐ろしき逆巻く浪に、洵と躍り入らせますと、浪風も静まり

ましたから、尊の御身に恙かもなく、陸に上らせたまひまして、是より陸奥に遣ま
せられ、こと／＼く夷を平らげたまひて、れ歸りになりましたが、何と畏しき御
事ではありませんか、尊の尊とき御身をもつて、民百姓が可愛いさには遣る／＼と
の御東征、我身を忘れて死地に入り、危ふきところも幾度なりしか、れもふも勿体
ないことじや、九五の位にもすゝひ御身で、東夷を亡ぼしたまひたるは丁度先度
他の心ろとれなじことじや、かやうな次第なものでありますから、吳／＼も先度他
をれはし召されよ、

第貳拾貳席

(修羅殿第四章發願 利生第貳拾壹節)

衆生を利益すといふは四枚の般若あり一者布施二者愛語三者利行四者同事是れ即
ち薩埵の行願なり其布施といふは貧らざるなり我物に非されども布施を障へざる
道理あり其物の輕さを嫌はず其功の實なるへさなり然あれは則ち一句一偈の法を
も布施すべし此生他生の善種となる一錢一草の財をも布施すべし此世他世の善根
を兆す法も財なるべし財も法なるべし但彼か報謝を責らす自からか力を願つなり

舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり治生産業固より布施に非ざることをし、
 初是の御養題は修證義の第二十一節でありまして、前席の御養題の中に、或は無量
 劫を行ひて衆生を先に度して自からは終に佛と成らず但し衆生を度し衆生を利益す
 るもわりと仰せられた、其れ言葉の衆生を利益とれ示しのところより受けて、茲に
 衆生を利益すといふはとれ示しに相成るのじや、今衆生を利益するに、何様いふこ
 とを以てするかといへは即ち御文に四枚の般若ありと仰せられて、四通りの次第が
 ある、般若とは五種不翻の二ツてあつて、若し支那に譯して見ると智慧といふこと
 になるのじや、智慧ではドーも意味が軽るいから、矢張り本のまゝにして、般若と
 は仰せらるゝのである、初四通りとは四攝法のこと、其四ツといふのは最初に布
 施といふてホドコメといふことになるのじや、これは誰れも知つて居ること、托
 鉢の坊さまに、一錢半厘さしわけても、直ぐに財法二施功德無量檀波羅密具足圓滿
 とおつ仰るし、又盆暮にね寺へ付け肩をするにも、ね布施を持つて行くといふほど
 じやから、布施の名は誰れでも知つて居るが、天竺の言葉で檀那波羅密といひます

ので、支那に檀那を布施と譯し波羅密を度と譯します、布施と言ふ言葉は誰れで
 も知つて居るが、サア一錢半厘の布施で財法二施功德無量檀波羅密具足圓滿と、大
 層なことをうけるのじやが、これは坊さんに差しあげるばかりのことではない、貧
 ぼらざるなりと仰せられて、自分のものでなくても、人の物に心をかけないのが
 直ぐに布施となるのじや、那の人の容貌は實にうつくしい、あのやうに生れたいも
 のじやなぞ、取つてもつかぬ操りことを言はぬやうにするのも直ぐ施しの二ツに
 なるじやから、御文に我物に非されども布施を障へざる道理ありと仰せらるゝ、此
 布施の心ろは、十戒の不偷盜不慳法賤不邪淫などにわたるのじや、テ此方からあげ
 るばかりでなく、人の物を取らぬのも勿論のこと、人からわたの御影でなぞ、禮
 を言はれぬやうにするのも布施じや、テ御文の次はといふに然れば則ち一句一偈
 の法をも布施すべしとありて、己れの覺めても居り又は見て知れることなら、あな
 たのお顔に墨が付て居りますよと教へて遣つても、それがすぐ一句一偈の法の施こ
 しになるのじや、其次の御文には、一錢一草の財をも布施すべしとありて、人の財

ばかりが布施ではない、爲めにさへなることなら、已れの地面に生へて居る草のやうなものでも、艸餅にするからとて欲しいといふたら、サア〜れ摘みなさいといふのが、直ぐに財施になつて来る、これを此生他生の善種となる又此世他世の善根を兆すと仰せられて、廣大なことになるのじや、大きなことばかりに眼を付けず、ズツと細かなところへ眼をつけるといふと、道に轉がつて居る小石を取り除けて、人の通るに邪魔にならぬやうにするのも大功德の布施じや、徑ちに横だわつて居る柳の幹を結んで往つても、それが大功德の布施じや、又大功德や大善根といふのを忘れても、それが直ぐ布施じや、親に孝行をするのを孝行と思はぬのが布施じや、天子に忠義を盡すのを、それを忠義とれぬのが直ぐ布施じや、觀音さまのこと施無量尊と申しますが、物に畏るゝことのないといふのを施すのも布施じやから坊やれ慈父さんが居るから恐怖くはないよといふのも布施じや、勿論慈父なり導師なりじやから、此位なことがなくて何様するもので、かやうな心ろを持つて来ると一切世間の衆生どもの親じやといふことも分るし、一切世間の衆生どもの導師じや

といふことも分る、那の乞食は禮を言つて往かぬなと、腹を立てる人も多いが、其やうなことではござる、那のお寺での喜捨金表におれの名を出さぬなと、愚痴をこぼす人も多いが、其やうなことではいかぬ、何事でも悪むいと思つたら、オ、これは悪むいことを思つたど、其氣か付かれても夫れでも功德なのじやから、况んや悪むいことはせぬといふ所作は、尙ほ更結構な布施なのじや、其次の御文には、法も財なるべし財も法なるべし但彼が報謝を食ぼらず、自から力を頼つなり、かやうに示しに相成るのは、財法の二施を圓融して、面白い味ひのあるところど、れ垂示下さるゝのじや、彼が報謝を食ぼらず自から力を頼つなりとあるが、人の顔に墨が付いて居るを教へたとて、何か禮物を取るつもりでもなからふ、但自分の氣の付たことを教へるのじやから、何でもないことじや、これを大きく考へて見ると、已れか弟子を教へたからとて、其返報を食ぼつてはならぬ、又自分の子を育てたからとて、其子にかゝる氣で育てゝならぬ、じやから但自分が力を頼つなりと仰せられてある、此の道理を考へると、盲目に手紙を讀んでやるやうな次第じや、スル

と盲目のほうではヤレ、忝じけない肩を揉んで歸りませうと相成る、皆銘々が持
 ったもので施すから世の中が治まッて往くのじや、じやから自分が力を頼つなりで
 互ひに二施を行なひ合ッて居るじや、夫から次の御文には舟を置き橋を渡すも布施
 の種度なり治生産業固より布施に非ざることなし、かやうなお示しじや、「假り橋
 に手摺りのつさし花盛り」といふ俳句があるが、假り橋では至ッて魚末にちがいな
 い何に手摺などがあるものか、夫へ一寸した手摺りを付けても直ぐそれが布施にな
 る、小川の真ん中へ石一ツ投げ込んで女な子供に跨ぐに樂なやうにしても、それが
 直ぐに布施の種度じや、種度のことには前に言ッたと思ふた、夫から又俳句に、「生
 活の安き茶見世や花の中」と、茶を賣ッて商賣するも團子を買ッて商賣するも賃仕
 事で暮らして居るも、草鞋を作ッて飯を喰ふも、圓融して見るといふと、斯様な少
 さなことでも、皆れ互ひに助け合ッて、需用を供給して安穩に日を送るのじや
 これを大きく考へたら何様なものか、舟と言ッても收容軍艦の饋運のやうな大きな
 ものもあり、橋と言ッても錦帯橋とか永代橋のやうな大きなものもある、活業と言ッ

ても天子様のやうなれ暮しもあれば、商賣と言ッても、三井や大丸のやうなものも
 ある、皆圓融の妙味から言へば、矢張りれ互に助け合ッて、其需用を供給して
 安穩に日を送ッて居るのじや、知らず／＼に他の布施をうけたり、又布施として居
 るのじや、錢を持ッて往けば米を呉れる米を持ッて來れば薪をやる、當然の道理じ
 やが、知らず／＼布施をして居るのは妙じやないか、斯様ないふやうに合持の世の中
 じやから、布施はど面白きものはないのじや、だから金をやるのばかり財施ではな
 く、お經を讀んで報いたからとて夫ればかり法施じやない、取るもやるも布施じや
 から、何事に限らず此のやうに思はにやならん、是れが法界の道理である、これ薩
 埵の行願といふのじや、薩埵は天然の言葉で菩提薩埵といふ、これは其略語である
 行願は願は意に思ふことにて觀の機なり、行は身に行ふことにて諸ろくの作事
 なり願行二ツのものは夫婦と同様にして、少しも離れてはならぬものじや、
 譬へば布施圓融の有様といふは水のやうなものである、諸ろくの衆生を住ましめ
 て何んの心も起さず、舟を通はせて恩とも思ふでない、風が來れば風に任せて動

き、飲ふとすれば飲まれて、何とも思ふでない、多くの衆生に口を潤はさしめても物を育つる恩をかけても、何様な心を發すでもない、ツラれのれは何に依りて集まつて居る、互ひに利益して少しも喧嘩をせぬ、若しこれが一ツ間違つたら、大變な騒ぎになるのじや、魚も獸の虫も鳥も、皆何處でも往つて仕舞へ、舟は通さぬ軍艦は尙ほ厭じや、斯様なことを言はれた日には、黄海の戦ひも出来なければ、貿易の道も妨たげる、然るにそんなことは微塵はともない、只々衆生に利益を興へるのみじや、與へて夫れを何とも思はぬ、眞に諸菩薩の心ろのやうじや、此様いふやうな鹽梅が、布施の布施たる徳相なのじや、皆さまもかやうな心ろになつて貰ひたい、此行願を發して下され、ね頼みでふいませうぞや、昔し信濃に一人の道人があつて、其名を樂水といひましたが、逢ふ人毎に道を教へていふには、夫れ人間といふものは、君に忠義を盡し親に孝行をいたし、夫は妻を憐れみ兄は弟を慈しみ、朋友には虚言をつかぬ、此五ツの道は天地本然の道理であ

つて、實に之を當然のこととするのじや、君に忠をするのは君の爲めにするにあらす、親に孝をつくすのは親の爲めにするではない、夫を敬やまふのは夫の爲めにするではない、兄を尊ぶのは兄の爲めにするではない、朋友に虚言をつかぬのは朋友の爲めにするでない、依つてれもへ、自分の爲めには殊更することでないことを、見よ、花の紅ひは誰れの爲めといふでもなく、見て貰らはよとて咲たのではない、折らるゝとて咲たものでもないが、折られても何とも思はず、見て呉れぬとて悲しむ次第でもない、見やうと折らふと其様なことに頓着なく獨りて咲て獨りで散るのじやが、那のまゝが本然本性である、人も其通りでなければならぬ、かやうに致せは浪風は起らぬものぞと、明けても暮れても言はれたといふが、此教むが實に布施の徳相に叶つて、又菩薩の行願に些しも違はぬ、よく、此理を諳らめて、衆生濟度を忘れぬやう、心ろがけて下されませうぞ。

第貳拾參席

(修羅義第四卷發願 利生第貳拾貳席)

愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し願愛の言語を施すなり慈念衆生猶

如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり徳あるは讀ひべし徳なきは憐ひへし怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり面ひて愛語を聞くは面を喜はしめ心を楽しくす面はすして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘す愛語能く回天の力あることを學すへきなり。

サテ此御養題は修証義第二十二章でありまして、四攝法の二番目である、前席の御養題には、四枚の般若あり一者布施二者愛語三者利行四者同事と仰せられて、其れ言葉の下にて直ちに布施をお説き示しに相成つたが、此御養題は只愛語の一つの獨立なれども、是から次の御養題、又次の御養題まで、利行同事と皆一ツツに獨立してある、これを四攝法とするので菩薩の行願を四ツに分けて示し下さるゝのじや、これもみな圓融として見るがよろしいサテ前席に置かましては、布施の徳相を説きなされて大小さまざまに示し下されたが、此愛語と申すのは、口にかゝる布施とあつて、十戒の不安語不説過不自讚毀他不瞋恚の諸戒に當るのじや、それ言葉には愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し願愛の言葉を施すなり慈念衆

生様如赤子の懐ひて貯へて言語するは愛語なりとある、これは法華經の提婆品に慈念衆生猶如赤子とあるを引きなされたのじや、人間乃至鳥獸の類諸ろくの衆生共か、先づ恐つた時の聲をお聞きなさい、平生よりも餘程恐怖らしいが、之に反して可愛といふ時には、總て皆な猫撫聲じや、此猫撫聲は何から起ると言へば、勿論可愛からのことじや、可愛いは何から起ると言へば、只く慈愛の心ろからじや、だから衆生を見るに先づ慈愛の心を發し願愛の言葉を施すなりと仰せらるゝ、去れは慈愛といふて、いつくしみめづるの心ろが根本なれば、れのづと愛をかけたやさしさ言葉が出るから、對するものどもが皆うれしがる、嬉しがるからやさしさ言葉を施すことになるのじや、何のことはない子供を親が可愛いがるやうなものじや早く来て乳をね呑み、オ、くうれしいかなど、我れを忘れて可愛がる、「斯くまでに偽はり多き世の中に子をねもふことまことなりけり」かやうな歌があるが、何様なに人を喰ふといふ強い獸でも、自分の子は皆をだてるではありませんか、猫なんどの子を育てるのを御覽なさい、平生は自分が逃げて居る犬に、子を育てる時